
サーファーキング！

不足茶野

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サーフアーキング！

【Nコード】

N4065E

【作者名】

不足茶野

【あらすじ】

彼女は『家族』を取り戻すために、僕はあの人の秘密を知るために、ハガキを書く。この想い伝わりますように。伝わりますように……届け！僕らのネタハガキ！！ネタハガキNo.1の称号サーフアーキング目指して！で、なんでネタハガキ？

第1話 「僕に彼女がラジオで自宅」

子供の頃の記憶。

新しい人が前に立っていた。

オバサンという人はタバコをくわえながら僕を見下ろす。

「透みかへ……寂しくないのか？」

「うん！！ 僕、寂しくないよ。皆とも仲良くするし、勉強だって頑張るよー！！」

「ふうん……」

「だから」

「なんだ？」

「だから、この家を追い出さないで」

遠い……いや、僕にとつては少し前の記憶。

媚びる事から始まった新しい生活。

それから時間が経ち、色々と斜に構えてた、あの頃。

「ラジオを聞いている場所はそれぞれ。車で、仕事場で、友達の家で、もしかしたら恋人の家でこの放送を聞いている人がいるかも知れません……」

「……」

僕は今日も自分の部屋でラジオを聞いている。

舌打ちしたくなるような感覚。

独りで聞いている僕はないがしろかよ……

「でも、私は自分の部屋で独り居る人のために送ります」

「……」

『それが私のやり方……私も独りだよ。ブースの中だけだ』
この一言が僕を変えた。

四月も中ごろ。

聞きたくない声が心地よい眠りから僕を呼び覚ました。

「おい、多記^{たき}、起きろ。お前、波乗の家にこのプリント届けてくれ
目の前には担任の牛尾が立っていた。ふと横を見る。

隣の席の波乗澄音^{はのりすみね}は学校を休んでいた。

さらに波乗は最近や休みがちなので、プリントがたまって机からはみ出している。

「そういうことは友達か他の誰かにしてくださいよ」

「そう思ったんだが、ほら周りを見る」

僕は寝ぼけ眼で周りを見る。教室には誰もいなかった。

「ホントに良く寝たものだな、多記。もう皆は帰った後だぞ」
ちきしょーっ！ 誰も起こしてくれなかったのかよ！！

という事で今、僕は波乗の家に向かっている。

学校が終わり時間帯は夕方、周りが少しずつ赤に染まりつつあった。

高校二年生にもなるうというのに一体何をやってるんだか。

一所懸命取り組むような部活もやってないし、深夜まで起きてる
せいで教室でも寝てばかり。

ああ、何か夢中になれるモノはないものかねえ……

とか考えてながら歩いていると、それらしい場所についた。

連絡名簿によれば波乗の家は住宅街から少し離れた小高い場所にあるようだ。

その辺り一帯が波乗の家のものらしく、家が見えないのに門があった。

こんなのが実在したのかと思うぐらい、大きい門。自分の背の二倍ぐらいある。ちなみに背は175センチ。

僕は門についているチャイムを押した。

「すいませーん。僕、澄音さんと同じクラスの多記透たきとおるといいますが、今日学校で貰ったプリントを届けに来ました」

僕がインターフォンにむかって話すと、門が開いた。

門をくぐって、舗装がされている山道を歩く。

波乗の家が見えないのは多くの木々が生えているからだ。

ハッキリ言ってしんどい。息を切らせながら歩く。

10分ほど歩くと前方に建物らしきものが見えてきた。

だが、それは僕の想像を裏切るものだった。

というのも僕は最初の門からして家はきっと大きな洋館だと思っていたのだ。

でも、目の前にあるのはこじんまりとした普通の二階建ての家だった。

家の敷地と家の大きさのアンバランスに僕は少し面食らう。

ふと玄関を見ると誰かが立っているのが見えた。

夕方というせいもあって、それが波乗澄音だと分かるまで少し時間がかかった。

波乗は女子の中でも小柄で華奢だ。

ツインテールの少しくせ毛気味、黒い髪が印象的。

瞳は大きく、笑い顔が良く似合う女の子である。

しかし、波乗だと分かったとたん僕は逃げ出したくなる。それは彼女は泣いていたからだ。

僕は面倒な事は嫌だったので、プリントを渡してとっとと帰ろうとした。

彼女も僕に気付いたらしく、僕らは目を合わせる。
そのとたん彼女は走り寄って来たと思うと、僕に抱きつくような格好に。

僕はその場で固まってしまふ。だって彼女と学校では特別仲が良かったわけではないし、今日だってたまたま訪れたにすぎない。

……って、いつまでもこんな事してるわけにはいかない。僕は彼女の肩を掴んで引き離す。

「どっ、どうした？ 何かあったのか？」

ホントは早くこの場から去りたい。

でも、泣いている女の子をこのままにしておけないし。

僕の問いかけに彼女はこちらを見上げる。

彼女は僕より20センチ以上も小さいので、下から覗きこまれるような格好に。

潤んだ大きな瞳が僕を見つめていた。

「私じゃあもう限界なのかも……」

そう言う彼女は学校で見る明るい姿とは大違いだ。

こういう場合は関わらない方がいい。

でも……あの人とだぶって見える。放って置けない。

「まあ、落ち着け。僕で良かったら話を聞く」

「……本当？」

明らかに波乗は僕に期待の眼差しを向けている。

成り行きとはいえ、言ってしまった以上後には退けない。僕はうなずく。

しかし、彼女は僕から二、三步引き下がった。

「ありがとう。その気持ちだけで十分。元気だよ。……あつ、今何時？」

僕は携帯を見て、もうすぐ5時だと伝えた。

すると、途端に彼女は慌てだした。

「もうそんな時間なの！？ 家に帰らなきゃ」

そう言うと彼女は急いで家に入って行く。

僕は外に一人取り残された。

“その気持ちだけで十分”

そう言われたのは二人目だった。

結局、僕は何の役にも立たないってことが……

何気に手元を見ると、まだプリントを渡してない事に気付く。

何度も外から家の人を呼んでみるが、反応はなかった。

プリントは玄関に置いていこう。そう決めて玄関を開けた。

「なっ!？」

目の前にはガラス張りの箱状の部屋。

「玄関……だよな？ ココ……」

部屋の中では男性と女性が机をはさんで椅子に座り何やら話をしていた。

よく見ると机にはマイクが置いてある。

それはあたかもラジオブースと呼ばれるものだった。

「あたかもじゃないよ。ホントのラジオブース」

「そうか……って波乗なんでここに？」

それに俺の心読んだ？

「だって、ここ私の家だからいるよ」

そうだった。僕は波乗の家に来ていたのだ。

だったらこの状況は何なんだ？

「波乗、それじゃあ、あの二人は」

ラジオブースにいる二人を指差して聞いてみた。

「お父さんとお母さんだよ」

「マジで!？」

波乗は少し考えた後、玄関兼公開スタジオと答える。僕はますます混乱した。

だがその問題もすぐに解決した。
うん、帰ろう。何も無かった事にすればいい。

僕は波乗にプリントを渡すと逃げるように家を出ようとした

「きやつ!?!?」

「わわわっ!!」

と同時に玄関のドアが開いて誰かが入ってくる。

僕はその人とぶつかり二人とも尻餅をついた。

ぶつかった相手が持っていたらしいCDが辺りに散らばり、僕はとりあえず謝りながらCDを拾う。

「す、すいません」

「どうしてこの放送局はCD取りに行くのに、玄関を通らなくちゃあいけないのよお」

僕はその聞き覚えのある声に反応した。

とっさにぶつかった相手を見る。

「れ、玲子れいこさん?」

相手もこっちを見た。

「えっ……あなた、もしかして多記君?」

「やっぱり玲子さんだ!」

「……何でココに?」

目の前にいる女性は華富玲子かふれいこさんといい、彼女とは少なからず因縁がある間柄だ。

しばらく僕たちは見つめ合ったまま動けなかった。

でも、玲子さんは何かを思い出したように立ち上がる。

「ゴメン。今仕事だから」

そう言い残して僕の前から去った。

僕はただそれを見送ることしか出来ない。

「多記君大丈夫？」

波乗が僕に近づいてくる。ほぼ同時に僕は立ち上がった。そして、ラジオブースの方を見つめる。

波乗の両親が話をしている向こう側では、ミキシングブースで玲子さんが忙しそうに動いていた。

僕がそれを眺めている……と、いつも間にか波乗が僕の隣にいた。何か聞いたそうにもじもじしている。

でも僕は知らぬふりを決め込んだ。

そうしているうちに我慢しきれなくなったのか波乗の口が開いた。

「多記君。あの……華富さんとはどういう関係なの？」

「……」

僕は波乗に話す事ではないと思ひ、彼女を無視した。

というか、働く玲子さんから目が離せない。

「言えない様な関係？」

波乗の勘違い発言に僕は思わず彼女のほうを向く。

すると波乗は顔を赤くした。なにを想像してるんだよ。

彼女は何か誤解しているようだったので、客観的關係を述べる事にした。

「ただのラジオのパーソナリティーとそのリスナーって関係だよ」
すると、波乗は目を輝かせて僕に近づいてくる。

僕はあせってまたラジオブースの向こう側を向いた。

波乗の顔があまりにも近すぎてまともに見る事ができなくなったからだ。

ほんのり石鹸のような香りを感じる。良い匂い。

「ということは多記君、ラジオ番組にハガキとか出した事あるの？」

「……まあな」

「じゃあ、読まれた？」

「……まあな」

「どれぐらい読まれた？」

「常連つて呼ばれるぐらいかなあ。つてそんな事知ってどう……あれ？」

話しながら横を見ると波乗の姿は無かった。

僕が不思議に思っている、下から声が聞こえる。

下を見ると波乗が土下座をしていた。

「おっ、おい！ 何やってんだよ」

「お願い！ 私にハガキの書き方教えて！」

「はあ！？」

「私……サーファーキングになりたいの！！」

「サーファーキング？」

「うん！ 『ラジオデイズ』のね『ハガキ職人グランプリ』でね

」

「あー、よくわからない。かいつまんで言ってみる」

「うんとね、ハガキ職人になりたいです」

「ええっ！？」

「お願いしますっ！！」

土下座しながらハガキ職人になりたいと頼み込む女子高生って、

一体なんだよっ！

「おい、こんな冗談、面白くも何とも無いぞ！」

「違う！ 本気だよ！！」

顔を向ける波乗の瞳は潤んでいたが、確かにその眼差しは真剣そのものに見えた。

こういう時上手く断ることが出来ない。

昔の自分を思い出すと、受け入れてもらえない辛さが分かるから

……

「あのなあ、波乗……」

「じゅっ」(ものすげ〜く、多記を見えます)

「……はあ。で？ どういうことなんだ？ 教えるよ」

「それじゃあ」

波乗の顔がパツと明るくなる。

「どうするかは聞いてから決める」

すると波乗はすぐに叱られた子犬のような何とも申し訳なさそうな可愛いげな顔をした。

正直、この瞳に押し切られた。

……まあ、こいつに関われば玲子さんの事も分かるだろう、そう自分に言い聞かせることにした。

第2話 「題『私の家族』 2年3組 波乗澄音」

私は父とここ10年ほど話した事が無いです。

顔は毎日見てるし、声だって毎日聞いているのですが、言葉は交わした事はありません。

父はガラス一枚隔てた向こう側で仕事をしています。

父、波乗丈はのりじょうの仕事はラジオのパーソナリティー。

父が自分の家をラジオ局にすると言い出したのは十年前です。

私が七歳のときだったからあまり記憶がないのですが……なぜそんな事をしたのかは私には分かりません。

それから父はラジオブースから出なくなりました。

ラジオブースの中には生活に必要な物はすべて揃っていて、ブースの中で生活し、送られてくるハガキに目を通し、番組構成を考え一日4回の番組放送に備えています。

朝はお年より向け番組、お昼は主婦向け番組、夕方は情報番組、夜は若者向け番組、今のところ全て父がやっています。

放送していない時もハガキを読んだり次の番組の用意をしたり、休暇がありません。

小さい頃から私は番組をしている父を外から眺めるのが大好きだったです。

それが日課になっていました。それだけで父と会話しているような気になっていたのです。

また、この私設ラジオ局には波乗家の人々が働いてるんです。

母、波乗百合音はのりゆいねは父と一緒にアシスタントとして仕事をしていません。

でも、放送時間以外はブースから出て家事をこなしています。

祖父、波乗伝之助はのりでんのすけは昔はDJをしていたのですが、今は主にディ

レクターをしています。

祖母、波乗はのりこね琴音はTDとしてミキサーテクニカルディレクターを使って音声や音楽を管理しています。

そして2年前に突然やってきて、居候をしている華富玲子さんはA D。

私の家族はラジオに冒されています。

だから私の兄、波乗はのりまいく真行はその状況が嫌になり、家出をしました。今でもその時のことは覚えています。

三年前、私が中2の時。朝早く、私はトイレに行きたくなって起きました。

そしたら、玄関で大きな荷物を持ったおにいちゃんを見たんです。

「あれ？ お兄ちゃん何処いくの？」

でも、お兄ちゃんは答えませんでした。お兄ちゃんはラジオブースを睨みつけて怖い顔です。そしたら突然、お兄ちゃんはブースの窓を叩き、叫びだしました。

「こんな事いつまで続けるつもりだ！ 俺はこんなの認めない。ア
ンタのつまらん感傷に付き合ってる暇は無いんだ！」

しかし、ブースの中には聞こえるはずも無く、お父さんは放送を続けています。

暫くして、お兄ちゃんは私の方を見ました。

「澄音、お兄ちゃん出掛けるけど、必ず迎えに来るからな。それまで我慢するんだぞ」

「お兄ちゃん待つてよ！ お兄ちゃんがないと……」

お兄ちゃんは私の言う事なんか聞かずに走り去っていきました。

「一人でご飯食べなきゃならないよ……」

その日から私は一人でご飯を食べる日が多くなりました。

お兄ちゃんが家出をしても父はラジオブースを出ませんでした。

そんな父が許せません。

だから一言言ってやろうと、無理やりラジオブースに入ろうとしました。

でも、カギは内側からしか開けられず、入ることができません。私は諦めませんでした。

だったら合法的（？）に入れればいいのです。

平日の夜にある若者向け番組「ラジオデイズ」で、半年間に読まれたハガキの数を競うハガキ職人グランプリというコーナーがあるんです。

そこで1位（皆は1位のことを電波の王様って意味でサーファーキングって呼んでます）になればご褒美としてラジオブースご招待！！

私は頑張りました。

今までハガキなんか書いたこと無いけど、上手い人を参考にして色々研究しました。

でも、3年続けているのですが、ベストテンにも入りません。

私は限界を感じていました。なんだか元気が無くなって学校も休みがちです……

そんな時に現れたのが多記透君でした。

彼とはほとんど喋った事が無かったのですが、落ち込んでいた私は多記君に頼ってしまいました。

「よし、とりあえずお前の書いたハガキを見せてみる」

なんか多記君は偉っそう。でも、先生なので我慢します。

私は一番自信のあるハガキを見せました。

多記君はしばらくハガキを見つめたと思うと、すぐに目を離れため息。

私は不安になります。

「何かおかしい？」

多記君は私の方をチラツと見るとまた、ため息です。

「お前本気でサーファークィングつてのを目指す気あるのか？ これで読まれようなんざあ百年早い」

「ええーっ！」

私はシヨックを受けました。

それでも一生懸命に書いたのです。

「まず、ハガキにたくさんの色を使いすぎて見難い。ハガキを選ぶ人が目がチカチカするだろう、ネタで勝負するなら黒にしる！」

「でもでも、カラフルにして送ると懸賞に当たりやすいつてテレビで言ってたし……」

「懸賞なんてあんな主婦の暇つぶしと一緒にすんな！ ネタハガキは内容で勝負だ！！」

なんか妙に悔しかったので文句を言ってみました。

「主婦を馬鹿にしないで！」

「アホ！ お前は主婦か！！」

「主婦になりたいけど今は違います……ごめんなさい」

さらに多記君は駄目出しをします。

「それにネタハガキにお前の近況なんていらん。そんなのは普通のお便りでしろ」

「でも、お父さんが見てるから……」

「だったらなおさら止める。向こうはお前と分かったから故意に避けている可能性がある」

気付かなかったです。ちょっと驚きました。

「しかも何だこのネタは？」

「だって佳代ちゃんが面白いつて……」

「佳代つて同じクラスの友達かよ。あのなあ、自分たちの世代で面白いからといってラジオで通用すると思ったら大間違いだ。お前の

父さんは何歳？」

「えっ？ 四十二歳だけど……」

私の返事を聞くと多記君は少し考えていました。

「微妙だが、一九八〇年前後だな……あのロボットアニメ世代？
まさかな……」

多記君の言っていることはよく分かりません。

でも何か一生懸命考えているみたいです。

「まずはネタにさりげなく八十年代のネタを入れる。お前の父さんに『懐かしい』とか『こんなの聞いているヤツは分かるのか？』とか言わせれば成功だ」

「先生、よく分かりません」

すると多記君は顔を真っ赤にしました。

「先生はやめる。……ハガキを選ぶのはお前の父さんなんだろう？
だったら、読まれるハガキは選者の面白いと思うものが選ばれるわけだが、公平に選んでいるつもりでも自分たちの世代の話題が出れば、ついつい選んでしまうものなんだ」

「ふうーん。多記君なんだかすごい……」

今まで多記君とはあまり喋らなかつたけど、こんなにすごい人だつたとは、またまた驚きです。

「あとペンネームだが……『ジョニー大好きっ子』ってのはヤメロ。つていうかジョニーって誰だ？」

「ジョニーはお父さんの事です。お父さんの名前が丈だから、みんなから丈兄貴って呼ばれてて、それが丈兄になって、最後にはジョニーになりました！」

「説明はありがたいが、このペンネームは却下。もつと頭に残るよ
うなペンネームにしる。ただし、ペンネームだけでオチが付くものはヤメロ。『ペンネームオチはネタがつまらない』これハガキ職人の格言」

「メモっていい？」

「おお、メモれメモれ」

多記君は胸を張っています。ここで私はある事が気になりました。
「じゃあ、多記君はどんなペンネーム使ってたの？」

「…… ×松……」

「え？ 良く聞こえないよ」

「…… マツチヨ石松……」

「聞かなかった事にするね……」

「…… おう……」

「……」

しばらくして、多記君がポツリと言いました。

「ネタは駄目だが文体はそのままがいい。なんとなくお前の人のよさが現れている」

「…… え？ ありがとう！」

私は初めて多記君に褒められました。少し嬉しかったです。

「取りもどせると良いな」

「ん？」

「家族」

「…… そうだね」

これで私もハガキ職人になれるでしょうか？

私は掴みたいモノがあります。

それは家庭です。

お父さんがいてお母さんがいてお兄ちゃん、おじいちゃん、おばあちゃん、そして私。

皆でご飯を食べるんです。

だから、ラジオブースに入ったらお願いしたいです。

『お父さん。私と皆でご飯を食べてください』って。

第3話 「ハガキ投稿集団 宝条リン」

とりあえず、僕は波乗の家でラジオを聴いてみる事にした。
なぜなら自分の家で聴こうとして、全く電波が入らなかったからである。

この事を波乗に聞くと「分からない」と答えた。

彼女自身も自分の家以外で聴いた事が無いからだそうだ。

だいたいインターネットラジオの時代で自宅にラジオブース作って電波飛ばすってどういうことだよ。許可は取れてるのか？

波乗は「お父さんはデジタリアンじゃないから……」とか言っていたが、そういう問題ではない。

そもそも女子高生がデジタリアンとは言わない。

とにかく、しばらくは細かいことを気にしないことにした。

参加することで実態が自然に見えてくるに違いない。そう信じた
い。

話を戻すと「ラジオデイズ」は深夜枠の若者向け3時間番組で月
〜金まで毎日ある。

パーソナリティーは波乗の父親ジョニー。

日替わりで色々なコーナーがあり、曜日によって特徴が違う。

月曜日は普通おた（普通のお便り）中心、火曜日は笑い（ベタ）
ネタ中心。水曜日はお笑い（シユール）ネタ中心、木曜日は下ネタ
中心、金曜日はFAX・メールネタ。

各コーナーでは、ハガキを読まれることに1ポイント与えられる。
その中でも一番面白かったハガキにはMVPとして5ポイント与
えられる。

それを半年後とに集計してサーファークィングを決めるのが「ハガ
キ職人グランプリ」ということらしい。

午前0時、時報と共にジヨニーの音が響く。

『OK！ジヨニーのラジオデイズ！！』

古い。なんちゅー古いタイトルコール。

『さあ、今からの時間はみんな手を止める！！ そんなに考え込んで落ち込んでても意味が無いぞ！ 今からの3時間は全てを忘れて
“ だらだら ” するんだ！』

どうやらここまでがお決まりのセリフらしい。

隣で聴いている波乗は頷きながら聴いている。頷く所はひとつも無いぞ。

僕は気になった事を波乗に訊いてみた。

「ところで、ペンネームは考えたのか？」

「うん」

波乗は恥ずかしがりな僕に紙切れを差し出す。

僕は受け取り、見てみるとそこには幾つかの候補の中で『宝条リン』という名前に丸が振ってあった。

「……」

「どっ？」

「駄目だ」

「えーっ！！ なんで、ナンデ、何で！！」

「リンという名前にトラウマがある」

すると頬を膨らませて波乗が抗議をする。

「うーっ、そんなの多記君の勝手でしょ！！ これには『私が八ガキ職人の中でも補助輪がついた初心者に等しいから』って言う意味があるんですっ！！」

なんかうー、うー、唸って怒ってる。どうやら本人はかなりお気に入りのようだ。

「しょうがねえな。じゃあそれで良いや」

「やったー！！」

「飛び跳ねるな！！」

番組は少しフリートークをしたらずくにネタハガキのコーナーへ移った。

「波乗、毎日通して行われるコーナーはなんだ？」

「うーんと……音楽明けにやる一行ネタのコーナーかな」

「音楽明け？」

「うん、ウチのラジオCMとかないから。コーナーとコーナーの間には音楽を流して、間を取るの。その時に番組のジングルと共に一行ネタが読まれます」

「1放送に何回ぐらい？」

「10回ぐらいかな」

「多いな……とりあえず、毎日通して行われるコーナーは重要だ。まずはそこを中心にハガキを出す……」

「うん……でも……」

「どうした？」

「あそのこのコーナーは常連さんがひしめき合っているのです……」
「ほう……」

「クツクルドウーさんとか100g98円さんとか……」

「……待て……」

波乗が挙げたペンネームに僕は聞き覚えがあった。

クツクルドウーと言えば……アイドル・声優系のラジオで一時代を氣付いたペンネームで、彼がハガキを出したアイドル・声優は売れるという伝説があるほどだ。

100g98円だって、たしか、少年マンガ週刊誌のハガキ投稿ページでNO.1を取った人物。

まさか……同じペンネームってただけだろ？

そして、実際に幾つかネタを聴いてみる……確かにいいところ突いてる。

点取り占い風のシニールなものもあれば、時事ネタを入れたダジヤレなんかも冴えてる。

「この二人は本当に面白いんです」
「……」

『じゃあ、このコーナーのMVPは……ペンネームペンネームPNペンシル祭さいに決定!!』
「!!!!」

「多記君……どうしたの?」

「今……ペンシル祭って言わなかったか?」

「うん、言ったよ。この人凄いんだよ、今のところ八ガキ職人グラ
ンプリ五期連続でサーファークィングなの」

「……なんてこった」

もし、僕が知ってるペンシル祭ならば、全国ネットの深夜ラジオ
老舗番組「オールナイトブレイク」において三期連続で読まれた八
ガキNO.1になり、番組作家になりたいいわばプロだ。

意味が分からない。

なんで、ここまでのビッグネームが揃っているのか?

この番組はそこまで魅力のあるものなのか?

考え込んでいる僕に波乗が心配そうに顔を覗かせる。

「だから……私、思うんですけど……もっと読まれやすい普通のお
便りから狙った方がいいと思います……」

僕は少し甘く見ているのかもしれない……でも……

「……波乗」

「はいっ!!」

「……それでも、狙うぞ」

「え?」

「普おた（普通のお便り）はお前が書け、こっちのネタは僕に任せ
る」

「え? え? エーーーーーーー?」

「正直言つて、お前一人ではどうにかなる相手じゃない。だから
……ここは束で掛かるしかないだろ?八ガキ投稿集団『宝条リン』」

としてやるっ」

「でも……それって卑怯じゃ……」

「卑怯じゃない。集団で書いちゃあ駄目だなんてジヨニーも言ってる。無いだろ。ハガキにもキチンとハガキ投稿集団『宝条リン』と書く……凡人が天才に勝つ方法はこれしかない……お前、家族を取りもどすんじゃないのか？」

『家族』という言葉に波乗は反応した。

「……うん……頑張る」

「その意気だ」

当初、僕は玲子さんの真意を確かめたくて波乗に協力したのだが、今では伝説のハガキ職人たちの相手をしているうちに、僕の中の職人魂が蘇ってきた。

「この人たちを追い越したい」今はそういう気持ち先走っている。

サーファーキングを目指して僕らの戦いは今始まった。

第4話 「うん初採用」

一週間、番組を聴いて各曜日の特徴を掴んだ僕達はハガキを出し始める事になった。

「この一週間でジョニーが喋った言葉をリストアップしてある。ハガキを書く際に参考にしろ」

「え？ なんで？」

「お前にはイチイチ説明しなきゃならんのか。いいか、ラジオの番組……とくにネタハガキには流行り廃りがある。それを的確に掴んだものが勝利するんだ。」

「うんうん」

波乗はメモを取り懸命に僕の話の話を聞いている。

「流行り廃りを作る要素は幾つかあるが、まず押さえておいた方がいいのはパーソナリティーの言動をそのままお笑いのネタに入れる事、これはパーソナリティー自身に起こったことだから、つつい採用してしまう。もう一つ押さえておくポイントあるのだが……お前には無理だ」

「えーっ、なんで！！ うっっ！！」

「どうやら頬を膨らませてうっっ！！ と唸るのが波乗のクセらしい。」

「もう一つは自分で流行を作ること。上手くいけば自分のネタから新しいコーナーが出来たりする。ハガキ職人にとってかなりの名誉だ。しかし、それにはまず、パーソナリティーが大ウケしなくちゃならん。ジョニーを納得させるようなネタをお前は書けるのか？」

「師匠できません……」

「っーか、師匠は止める。まあ、お前は普通のお便りメインで書くんだから、季節ネタや地域ネタ、ハプニングネタや恋愛相談ネタでいいな」

「うん！！ やってみる」

波乗はやたら体を弾ませてワクワクしているように見える。
ツインテールも楽しそうに揺れていた。

「最後にこれも頼む」

「まだあるの？」

「番組で読まれないハガキを数枚書くこと」

「？」

「番組への意見なんかを書くんだ。これはネタ云々ではなくて番組に貢献するという意味で書くものだ。ネタハガキだけを書くのがハガキ職人じゃないぞ」

「はいっ！！ 頑張っつて、頑張っつて、頑張っつて、ハガキ職人になるっ！！」

「いや……そんなに頑張らんでもいいぞ」

そして、僕らはハガキを書き始めた。

二人とも真剣に書いているので室内は静だ。

ちなみにどこの室内かという波乗の自室。

明るい色を基調としていて、かわいらしいカーテンにぬいぐるみも数体おいてあったり……何と云うか、男が想像するような女の子っぽい部屋である。

自分の部屋とのあまりの違いに何か落ち着かない。

最初は自分の家でネタを書こうとしたのだが、波乗がそれを嫌がった。

自分の書いたネタをすぐ見て欲しいからだそうだが、彼女がポツリと言った言葉に本心があると思う。

「一人でネタを書いていると、何が正しいか分からなくなるから……」
僕にはすごく良く分かる。

一人でいると自分が生きているかさえも分からなくなるときがある。

自分を自分だと証明してくれるのは結局、他人に委ねるところが多い。

小さい机に向かい合ってネタハガキを書いていると、波乗が突然クスクスと笑い出した。

「どうした？」

「多記君、このネタどう？ 一行ネタのコーナーに出したいんだけど」

波乗は僕に一枚のハガキを差し出した。

ハガキを受け取るとそこには一言『うーん、皮膚の香り』と書いてある。

「……」

「ねっ？ どうどう？」

恐らく今の波乗にシッポを付けたら、さぞかしよく振っていることだろう。

彼女の期待をこめた視線に僕は耐えられなくなった。

「ま、まあ、いいんじゃないか？」

「本当!？」

「あ……う、うん……」

ハガキを書けた僕らは次々と番組へ送った。

家の中で番組をやっているのにイチイチ自分家宛にハガキを送る波乗は律儀だと思う。

その後も僕らは番組を聴きながらネタハガキを書いていた。

しかし、なかなかハガキは読まれない。

こういうものは一枚読まれるとあとは楽に読まれるものなのだが、最初の一枚が難しい。

「読まれないね……」

「まだ出し始めたばかりだろ？ 番組だつて一週間聴いただけなんだから、ハガキの雰囲気番組に馴染みだしたらすぐ読まれる」

「うん……」

という会話をして一週間がたった。相変わらず一枚も読まれない。

僕が自信を持って送ったネタハガキもあったのだが……

「多記くう〜ん」

「焦るな……焦ったら負けだ!!」

「じゃあ、私負けてるっ!! 今、焦ってるもん」

「だから焦るなって言ってるだろ!!」

「そういう多記君だって焦ってるでしょ!!」

焦ってる時ってついついケンカ腰になってしまふ。

僕は我に返った。

「僕は焦ってない……とは言えない」

すると、波乗も肩を落とす。

「やっぱり駄目なのかも……」

「……」

何も言えず僕らは黙り込んだ。

そんな僕らを見越してなのか、ジョニーの声が聞こえてきた。

『一行ネタ。ペンネーム宝条リンから』

「!!」

「えっ!?!」

何が読まれるんだ?

『うーん、皮膚の香り』

「え……」

「!!」

「やった〜!! 読まれたよ〜!!」

僕はこの時、何が正しくて何が間違っているのか分からなくなっ
た。

なんだか……耳鳴りがして頭がイタイ……

波乗はお祭騒ぎではしゃいでる。

僕の手をとってやたらブンブン振り回してるし、ツイントールが
バシバシ僕の顔を直撃する。

「これね、これね。昔、お父さんとラーメン食べに行ったときに私

が偶然言った言葉なんだって、その後お父さん大爆笑しちゃって」「そうなんだ……」

確かに宝条リンとしては大事な一步を踏み出したわけだが……僕は三步ぐらい後退した気分になった。

結局、後のコーナーで僕のネタが立て続けに読まれたことで自信が回復する事になる。　どうやら、ハガキを出して読まれるのには一週間ぐらいのタイムラグがあるらしい。

こうして、宝条リンは順調なスタートを切った。

書いたハガキの採用率は50%を超えているし、ジョニーにも名前を憶えてもらった様だ。

全てが良い方向に進んでいるように見える……

しかし、トップとの差はなかなか縮まらないように感じた。

特にペンシル祭との差は開く一方に思える。

ペンシル祭は読まれるハガキは少ないが、コーナーの最後に選ばれるMVPになる事が非常に多いのだ。

普通にハガキを読まれて1P、MVPは5P。MVPに選ばれるだけで5枚読まれた価値がある。

ペンシル祭は確実にMVPを狙ってハガキを書いているに違いはない。

まさに王者の得点方法、さすがサーファークィング。

一方、宝条リンは確実にヒットは打てるがホームランが打てない1P奪取のハガキ職人になりつつあった。

それは一重に僕の実力によるもので、少しずつではあるが限界を感じている。

何らかのテコ入れが必要になってきた。

第5話 「もうええ!!」

笑っていれば幸せになれると思っていた。
お母さんだって、祖母母だって安心して暮らしていける。
笑いたい、もっと、もっと笑いたい。
だから……

いつものように2年5組の教室へ入る。

何でもない普通の日……のはずだった。

しかし、ここ数日間の心の平穏は崩される。

波乗澄音が登校していたのだ。私は心の中で舌打ちする。

新学年が始まって今年も澄音と同じクラスなのが憂鬱だった私は
彼女が学校に来ないのを密かに望んでいた。

その理由は

「佳代ちゃん!! 久しぶり!!」

澄音は私の姿を見つけるとすぐに近づいてきた。

「うん、久しぶりやなあ」

「ちよつと休み過ぎちゃった。ごめんなさい」

「ええよ、それより元気にしとった? って元気じゃないから休んでたんやもんなあ」

嫌味もこめて言ったつもりだったが、彼女は全く意に介さない。

それどころか、瞳を輝かせて私に言う。

「うん!! もう大丈夫。問題解決しそうだから」

「え!? ……な、何が? もう、お父さんラジオ止めたん?」

私は驚きを隠せなかった。

澄音からだいたいの事情は聞いていた。

初めは半信半疑だったけど、実際に現場を見ると信じるしかなかった。

そして、彼女から八ガキ職人の話を聞いたのだ。

「まだ、お父さんは帰ってきてないけどね」

「そうなんだ……」

私はホツとした。

澄音がお父さんと会う……彼女が幸せになる……事が喜べない自分がいる。

『家族を取り戻したい』と言った彼女を応援できない。

私はもう……頑張ったって家族は取り戻せないから。

数年前

「ごめん佳代、お父さんとはもう一緒に暮らせなくなったの」

「何で？ 何でなの？ お母さん教えて」

小さい頃の私には意味が分からない。それが離婚だと理解するには少し時間が必要とした。

「お母さんとお父さんケンカしちゃってね……別々に暮らす事になったの」

「え？ じゃあ、仲直りしたらええやん」

「……もう出来ないの」

「何で？ なあ、何で？」

すると母は私の手首を痛くなるほど握った。

「痛い！！」

「もう、ここへは戻らないから。早く準備しなさいっ！！」

「……はい」

こうして、私は母の両親が住むこの街へ来た。

澄音とはこの街に引越してからすぐに友達になる。彼女の人懐っこい性格が私を引き寄せたのかもしれない。それだけ私も寂しかったのだらう。

ふと我に返って澄音を見つめると何だか嬉しそうな顔をしている。忌々しい。

澄音は私の後ろで誰かを見つけたらしく、手を振り出した。

「佳代ちゃんまた後でね」

「うん」

彼女は私の横を通り過ぎていく。行く先を見るとそこには多記通が立っていた。

二人はやたらした親しそうに話している。

いつの間に仲良くなったのだらうか？

少し気になったけど、気にしない事にした。

というか澄音の事は……いや、家族の事はもう考えたくない。

昼休み、私の元に澄音が駆け寄ってきた。

「ねえ、佳代ちゃん、お昼食べよ」

「うん、ええけど……なんでコイツまでおるの？」

澄音の隣には多記が立っていた。

下に目をやると、澄音の手が多記の制服の裾をしっかりと握っている。

「僕だって知るか！！ コイツが無理やり引張って……」

「多記君とはハガキの作戦会議を開きたいから絶対、逃げちゃ駄目

！！！」

「……じゃあ、私はお邪魔やな」

私の言葉を聞くと澄音は顔を真っ赤にして弁解する。

「そ、そんなことないよ！！ 佳代ちゃんにもいて欲しいの。私が

八ガキを書き始めた頃、よくネタを見てくれてたでしょ？ 今回もお願い」

「ああ……もう、逃げられへんみたいやな」

いつの間にか澄音は私の制服の裾も握っていた。

私達は校舎の裏庭へ移動すると備え付けのベンチへ多記、澄音、私の順に座った。

お弁当を食べだすと、澄音は多記と話を始めた。

「多記君、『あの人見ました』のコーナーで今流行ってるネタあるでしょ？」

「？ 芸人ネタか？」

「うん」

どうやら、多記はどういう事情が知らないけど澄音の手伝いをしているようである。

話の内容も恐らくラジオのネタだろう。

「そこで出てくる。『ままだ ろう』って誰？」

「……………」

私は前 五郎を知っていたが、黙っている事にした。

「僕も良く知らないが……新喜劇に出る人だろ？」

「……………」

二人のフワフワした会話にイライラしてくる。

「しんきげき？」

「……………」

「新喜劇っていうのは……僕も良く分かんが……」
我慢の限界が来た。

「あーもう！ ええ加減にして！！」

「え？」

「は？」

「前田 郎も知らへんの？」

すると二人は言葉には出さず、何度も頷いた。

「前 五郎つていつたら坂 利夫とやつてるコメディーNO.1やんか!! 『もうええ!!』 っつツツコミ知らへんの?」

「さかた しお?」

「波乗、坂 利夫はアホの人だ」

「……多記君、分からないよお」

多記は辛うじて坂田利夫は知っていた。

私は心の中で駄目だと思いつつも、自分の気持ちを止めるとが出来ない。

「それに新喜劇つて一口にいつても吉本と松竹があるし、どっちが分からへんやんか!!」

「エッ、そうなのか? 松竹も新喜劇やつてたの?」

「あほっ! 松竹の方が先輩や!!」

完全に私のスイッチが入ってしまった。

いつのまにか私以外の二人はドン引きだし……

そして澄音が恐る恐る質問してくる。

「じゃあさ…… テ トつて誰?」

「はあ? クモの決闘ネタとか人間パチンコとかわからへんの?」

「わからないよお……」

澄音の向こうで多記が何かメモっている。

「ちなみにお勧めは?」

「ずばり…… Mr. ールドや」

「誰?」

「吉本の爆笑王」

「マジで?」

「マジや。ハゲで一輪車乗ってるオッサンや……けどもうお亡くなりになつたんやけどな」

「なんでその人が爆笑王なんだ? わからん……」

「『自分は笑いに厳しい』とかぬかしてる”自称お笑い好き”な若

者じゃなくて、幅広くお客さんを楽しませて幸せにすることが出来る人やったからな。私は一番やと思ってる」

笑っていれば幸せになれると思っていた。

お母さんだって、祖母母だって安心して暮らしていける。

笑いたい、もっと、もっと笑いたい。

だから……

だから私は今日もお笑いの勉強は欠かさない。

それが私、工藤佳代の掟だった。

一通り喋り終わると、私を見る二人の目つきが変だった。

「佳代ちゃん、どうして今まで隠してたの？」

「え？」

「認めたくないが……お前、凄えよ」

「は？」

二人は立ち上がり私へ迫ってきた。

「何？ 何なん？」

「宝条リンに参加してくれ」

「宝条リン？」

意味が全く分からない。

第6話 「思い遣るといふ事」

「なあ、頼む！！お前の力が必要なんだよ」

「嫌や」

「何でだよ、理由を教えてくれ」

「昨日も言ったやろ、私はラジオには興味あらへんって」

「こんな会話を続けてもう3日になる。」

「多記は諦めずに説得に来た。ホントにしつこい。」

「コイツの後ろを心配そうに付いてくる澄音にも腹が立っていた。」

「波乗とは友達なんだろ？ だったら」

「友達でも出来る事と出来へんことがある！！」

「自然に自分でも驚くぐらいの大声を出してしまっ。」

「私の声を聞いて多記は不思議そうな顔を向ける。」

「どうしたんだよ。たかがハガキ書くだけのことだろ？」

「べ、別に。ただ、私のお笑い好きは人に披露するためじゃないし」

「……」

「ん？ お笑って笑わせる対象があつてのものじゃないのか？」

「……」

「笑わせる対象あつてのもの？」

「確かにそうかも知れない。」

「だったら私の場合笑わせる対象は……自分自身だ。」

「波乗、お前から何とか言ってくれよ」

「多記君、もういいよ。佳代ちゃん嫌がってるし……きっと何か深い事情が」

「深い事情なんて無い。」

「私は単に彼女が……羨ましいだけだ。」

「だから余計に澄音の言葉がムカつく。」

「とにかくお断りやつ!!」

「お、おい待てよ」

「ああ、行っちゃった……」

私は二人を振り切るようにして走り出す。

なんだか全てに腹が立っていた。

頑張っている澄音、彼女に協力する多記。

そして、何もしない自分……

こっちに引越してくる前からお笑いは好きだった。父親の影響
だったと思う。

さらにこっちへ来ると私のお笑い好きは加速した。

お笑いのビデオや本、グッズを買いあさる。

お笑い番組やビデオを見ると、父親と一緒に笑い転げた日々を思
い出した。

でも

今、私の隣には誰もいないし、一緒に笑ってくれる人もいない。

次の日も多記は私に付きまとった。

「付きまとわんというて、ストーリーカーっ!!」

「何といわれようと工藤が参加するというまでは付きまとう」

「……」

私は徹底的に多記を無視する事に決めた。

昼休み、私は逃げるように屋上で昼食をとる。

しばらくして、出入り口から多記と澄音が入ってきた。

幸い、私には気付いていない様子なので給水塔の裏に隠れる事に
した。

隠れているだけなので別に聞き耳を立てたわけではないが、自然
に二人の会話が聞こえてくる。

「くそ、居ないな」

「多記君もついいよ。諦めよ」

「駄目だ。ペンシル祭達に勝つにはアイツの力が必要なんだ」

「うっつ……それは分かったよ。でも、お昼なんだからお弁当食べようよ」

「僕は食べないから波乗、お前は勝手にその辺で食べる」

「え、なんで？」

「今日は金がない。だから昼は抜きだ」

「だったら私のを半分こしよ」

「嫌だ」

「うっつ……」

そういえばこの前も多記はパン1つにパックの牛乳だけだった。

ダイエツト？

……んなはずは無い。家が貧しいのだろうか？

色々考えをめぐらせている私はある事を思いついた。

放課後、多記は私を逃がすまいと教室を出る前に話しかけてきた。私も話しがあつたので、ワザと捕まる。

「1回でいいからさ、ラジオ聴きにきてくれよ。そうすればお前も」

「そつやな……協力してやってもええかな」

「ホントか！？」

多記は嬉しそうに身を乗り出すように私に近づく。

「……10万でどうや？」

「10万！？」

「今すぐ現金で10万や。それやったら協力してもええわ」

「……」

「多記君。もういいから、私達だけでやろうよ」

二人の会話を後ろで聞いていた澄音は多記の腕を引っ張った。しかし、多記はそれを振り払う。

「……わかつた。10万だな」

「多記君!!」

「心配するな。ちょっと待っててくれ。今、家の人に借りてくるから」

それだけ言い残すと多記は走り去った。

私と澄音が残される。澄音は私に近づき、問い詰めた。

「なんで? なんで、こんな事するの?」

「何? 怒っとるの?」

「多記君、10万なんてきつと持っていないよ。いつもお昼のパン買うのだって困ってたぐらいだから」

私は優越感に浸っていた。

多記が金なんて用意できるはずがない。

そしてなによりも、澄音の必死そうな顔が私の苛虐的な心を満足させた。

だから、私はとどめの一言を言う。

「知ってるわ。分かかってて言ったんやもん」

「!」

澄音はしばらく私をじつと見つめる。

私の目には彼女は怒りに震えている様に思えた

しばらくして、澄音は手を伸ばすと私の腕を掴み引っ張る。

「……行く」

「は? 何処へ?」

「多記君の家……謝りに行く」

彼女は怒って私を罵るのかと思ったが、怒ることなく謝りに行くように勧めた。

「はあ!? なんで私が!」

「佳代ちゃんがハガキを書くの嫌ならそれでも良い。お願いだから

……多記君を困らせないで」

「何? アンタ、変にアイツの肩持つやん。もしかして多記のことが好きなん?」

私は澄音をからかうつもりで言ったが、彼女は表情を変え無かった。

「好きかどうかなんて分からない。でも、多記君は私を応援してくれるただ独りの人だから」

「……」

澄音は私から目を離し俯くと呟いた。

「ホントは一番に佳代ちゃんにラジオの事を頼もうと思ってた。でも、佳代ちゃん……お父さん居ない事いつも気にしてたから……私がお父さんに会いたいなんて言ったら悪いと思って……」

「！？ 知ってたん？」

「これでも10年近く友達やってるんだよ。それぐらい分かる」
「……」

確かにネタを何度か見た事はあったけど、ハガキを書いてくれといわれた事は無かった。

澄音は澄音なりに気を使っていたって事？

「私からもラジオの事は諦めるようにお願いするから……行く」

「嫌……」

「佳代ちゃん」

「くっ……」

澄音の方が一枚上手だった。

この子はトロそうな感じなのに人の機微には敏感だ。

私は何を独りで背負い込んでいたのだろうか？

自分のことばかり考えて……周りの気遣いも分からないほど拗ねていた。

そうだ……何も言わずにお笑いのビデオやグッズを買い与えてくれたのは母じゃないか。

母だっって一緒に暮らしていたのだから、お笑いが父の思い出だということ承知していたに違いない。

何してたんだろ私……

「……よく考えてみたら……お金を要求するのは間違ってたかもな」

「佳代ちゃん!! それじゃあ」

「多記の家に案内して」

「うん!!」

私と澄音は多記の後を追うように彼の家に向かった。

第7話 「独りじゃない」

「ところで多記の家は行った事あるん？」

「無いよ。でも、クラス名簿辿っていけば良いと思って……」

この子に行った事も無いのに多記の家に行けと私に言ったのだ。た。

私は呆れたが、そこが澄音らしいなと思い直す。

「それやったら、私が探すわ。アンタが探すとトロいから日が暮れるわ」

「佳代ちゃん、ひどいよお。……でも、ありがとう」

「……まあ、あれや。確かにお金を要求したのは悪かったと思ってからな。アイツにハッキリ断るために行くだけや」

名簿の住所通りに進むと同じような家ばかりの住宅街の中で、明らかに場違いの家が見えてきた。

西洋のお城を小さくしたような家(?)。

私は何度も名簿の住所とこの家の住所を見比べる。

「……どうやらココみたいやな」

「ええ！？ でも、表札は『井端』って書いてあるよ」

「でも、住所はここと書いてあるし……とりあえずチャイム押してみよか」

大きな門につけられてあるインターホンのボタンを押す。

しばらくして、インターホンから若い女性の子が聞こえて来た。

私は自分達の名前を名乗り、ここが多記透の家かどうか訪ねる。

すると門が開き、インターホンの人は私達に入ってくるように言った。

指示に従い家の中に入る。

玄関と呼んで良いのか分からないような扉が開かれ中に入ると、

内装は普通の日本家屋だった。

「なんやこれ……」

「なんだか面白いね」

玄関先ではインターホンで話した若い女性が立っている。

見た目からして私達より少し年上な感じだった。多記のお姉さんだろうか？

「あつ、靴を脱いでこちらへどうぞ。まもなく先生も来ると思いますが、すから」

「先生？」

「はい」

靴を脱いで家へ上がると私達は応接室のような洋間に案内された。広い、余裕でかけっこできるぐらいだ。

しかも、わけの分からない剥製や置物が置いてある。多分……高価なものだろう。

だけど……なんとなく統一感がない。赴くままに集めたような部屋だ。

室内奥にある座ると何処までも埋まっていきそうなフカフカのソファーに腰をかける。

隣では澄音が感嘆の声を上げていた。

案内してくれた女性はお茶を置いて部屋を出て行く。

私は当初の目的を少し忘れそうだった。

私達がこの家に圧倒されていると、応接間のドアが開く。

入ってきた人物に私達はさらに圧倒された。

お姫様のようなドレスを着て、タバコをくわえた女性が入ってきたからだ。

年齢は三十代半ばといった感じで、向かいのソファーに座ると鋭い視線を私たちに向ける。

向き合ったまましばらく沈黙が続いた後、女性が口を開いた。

「透ならさつき10万持ってどっかへ行った」

「えっ!!」

私達は入れ違ったのだ。

女性はタバコの煙を空中に吐くと話を続けた。

「アンタ達なんだから？ 10万もって来いって行つたの」

女性は私達を睨んだまま視線を外さない。

私は何も言えなくなっていた。

「そうです。ごめんなさい!!」

黙っている私の隣で澄音が女性へ謝つた。

「謝れば済むと思つてるの？」

「え……それは……」

澄音は悪くない。私は思わず口を挟んだ。

少なくとも澄音はこの件には関係ないから。

「彼女は関係あらへん!! 私がいきました……ごめんなさい。謝

つて済むかと言われれば返す言葉も無いけど……」

澄音を睨んでいた女性は今度は私を睨む。

「別に私はアンタ達を叱ろうなんて思つてないから」

「え？」

「この家は見ての通り貧乏じゃない。むしろ、金はある」

「……」

「私はただ透が『何も言わずに10万貸して欲しい』って言うから貸しただけさ。それで、ノコノコアンタ達が来たから、アイツが貢いだ相手がどんなヤツが見たくてね。これは私の好奇心」

「……」

「でも、透は決して自分から金をせびる事なんてしないんだよ。自分が居候の立場だつて分かつてるからね。十年近くアイツと一緒にいるけど今回で二回目だ」

「？」

多記が居候？ どういうことなんだろう？

「多記君はこの家の人じゃないんですか？」

私の疑問を口に出して言ったのは澄音だった。

「ああ。アイツはね昔、両親を事故で亡くしたんだよ。その後、親戚中をたらい回しにされて最後にウチに来たってわけ」

「……」

事も無げに女性は言ったけど、私たちにとっては十分ショックな話だった。

多記が両親いないって知らなかったから……

独りだって知らなかったから……私……私……私……

「……多記を探してくるわっ!!」

私は何かを思い出したように応接間を飛び出していた。

「佳代ちゃん!! ちょっと待ってよ」

「そのツイントールは待ちな。アンタが波乗って言うんだろ？」

……その髪型でわかった。いろいろと話を聞かせてもらおうか」

「はい？」

私は急いで教室へ戻る。

学校へ到着すると静かな教室には多記だけが教卓辺りで佇んでいた。

息を整えて教室に入る。ドアの音と共に澄川がこっちを向いた。

「あつ、居た居た。ほら、これ約束の10万」

「あのな……」

目の前にはしっかりと握られていた為にシワくちやになった1万円札が10枚あった。

「どうした？ これで協力してくれるんだろ？」

「……いない」

「はあ？ 何でだよ!？」

「さっき、澄音と一緒にアンタの家に行った」

「え!？」

「多記……アンタ両親が……」

すると多記は片手を自分の頭にあて、舌打ちする。

「チツ……あのお喋りバアさんめ……」

「私……両親が離婚してこっちへ来たんや……」

「え？」

私は自分でも良く分からなかったけど多記に自分の事を話し始めていた。

今まで誰にも言えなかったこと……私がお笑い好きな理由や澄音への妬み……

最初は戸惑っていた多記も最後は黙って聞いてくれた。

私の事について多記は何も言わない。

何を言っても気休めにしかならない事を身を持って知っているからだと思っ。

そこで、私はなぜ多記が澄音の手伝いをするのか聞いてみた。

すると彼は、はにかみながら答える。

「波乗を見てたらふと考えるんだ……僕が手伝うまでは誰にも相談できずに独り黙々と読まれるかどうか分からないハガキを書いたのになって……」

「……」

「そう思ったら……両親が死んで親戚の家たら一回しにされてた時の事思い出してな。あの時の僕も一人で戦ってた……」

「そうなんや……」

「あつ、でも今は幸せだぞ。あの人モノの言い方はキツイけど意外と良い人なんだ」

私には母親や祖父母が居た。

一人になっっている気になっていたのは私だ。

凄く自分の身勝手さが情けなくなる。

「だからさ、頼むよ。ハガキ書いてくれよ。皆でハガキ書いて、ラジオで読まれて」

「……………」
「最後は一緒に笑おうぜ」

「あつ……………」
”一緒に笑おうぜ”…………… 言って欲しかったのはこの言葉だったのかも知れない。

もう独りで笑うのは嫌だ。皆で笑いたい。

私は多記に表情を読まれたくなって下を向いた。

「独りの寂しさは分かっているんだろ？ だったら、僕らの代わりに波乗一人ぐらい幸せになっても良いじゃないか」

「……………うん」
私は頷く事しか出来なかった。

深夜0時になる。私は澄音の部屋でラジオを聴いていた。

「どうだ？ 実際ネタを聴いてみて」

「うーん……………結構レベル高いなあ。でも、何とかなと思うわ」

「佳代ちゃん、ホントに!？」

「多分な」

「よし。これで宝条リンもパワーアップだ!!」

「うん!!」

なんで今までココへ来なかったんだろう。意地張ってた私が馬鹿みたいに思えた。

「とりあえずス ス夫人辺りから攻めて行くから」

「……………そいつら誰だよ」

「ミス夫人って女の人のなの？」

「今の芸人ならテレビ見ればわかる。だからまずは二人に過去の知識を叩き込めよ」

「え、遠慮しとくよ」

「私も……」

「あかん!!! 今から特訓や」

「ええーっ!!!」

今、私の隣には多記や澄音がいます。

独りじゃない。笑ってくれる人がいます。

だから……今日も楽しい。

第8話 「私……ヨコレになる！」

非常階段。オレの目の前で女二人がケンカしていた。

原因はオレが二股をかけていたからなんだが、この二人はオレを責めずにお互いを罵り合っている。

最初は見ていて面白かったけど時間が経つにつれてつまらなくなってきた。

そろそろ終らせようと思う。

「お前達もう止めるよ。簡単な解決方法がある」

オレへ顔を向ける二人。視線が集まったところで十分間を取ってから言葉を投げかける。

「……オレが悪いんだ。どっちかを選ぶ事なんか出来ない。だから、二人とも別れてくれ」

みるみる顔色が変わる二人。

オレはなるべく悲しい顔をして、振り向き、反論のチャンスを与える間もなく立ち去る事にした。

残された二人は茫然とオレを見送る事しか出来ない。

潔いとかそういうのではない。後で個別によりを戻していけばいいだけの話。

そうすれば自分だけに戻ってきてくれたと勘違いするわけで……
今からそれを思うと笑いがこみ上げてきた。

教室に戻る途中、おずおずとオレの前に立つ男が一人。

「あの……川上くん……そろそろお金……返して欲しいんだ」

「あれ？ オレ、佐藤に金借りてたっけ？」

「……」

太ってガタイが大きいくせに気の弱い所がある佐藤は黙り込んだ。

オレが睨んでコイツが俯くといった状態が続く。

しばらくするとようやく返事をした。

「……………3万円……………か……………貸してる……………」

「えーっ！っ！？ そうだっけ？」

ただ黙って頷く佐藤。

「悪いな。今、手持ちが無いんだよ。今度バイト代が入るからその時なー！」

何度も佐藤の背中を叩きながら、オレは大袈裟なりアクションを取った。

「う、うん……………分かった……………」

すぐごと立ち去る佐藤。

まだ覚えてやがったのか……………ちなみに借りたのは半年前。

全然親しくもないがアイツの気弱な性格を考えて金を借りたのだ。ちなみにオレはバイトなんかしていない。

楽しければそれで良い。

そのためだつたらセコイ計算もどんどんするし、他人だつて陥れる。

こんなオレを非難する人間は少ない。

だが、そいつらは大抵、羨ましいんだ。

自分が出来ない事をやれるオレに嫉妬してるだけ。

そんなに羨ましいのだったらお前達もやれば良い。

今日も出来ないやつ達の遠吠えが聞こえてきそうだ。

オレの名前は川上直人。

『じゃあ、このコーナーのMVPは……………P・N・(ペンネーム)宝条リンに決定！！』

「やったね！！ 初MVPだよ！！ これも佳代ちゃんのお陰ですっ！！」

「いやいや、結構時間掛かったけど何とか取れたわ」

「お前のネタならいつか取れるとは思ってたよ」

三人、ラジオを聴きながら波乗の部屋で時間を過ごす。

もちろんネタを書くために集まっているのだ。

「すべて多記君が佳代ちゃんと言得してくれたからだね」

波乗は僕を覗き込むように満面の笑みを浮かべた。

僕はそれを直視できずに横を向く。

宝条リンは着々と常連達の間割って入る存在になりつつあった。

今月に入ってすでに三十枚は読まれた。

「この調子だと中間発表期待できるね！」

「いや、まだ喜ぶのは早い。半年のうちのまだ二ヶ月しか経ってないんだぞ」

すると波乗は口を尖らせ、うー、うー、唸りだした。

喜ぶのはホントに早い。

相変わらずペンシル祭は一枚の採用で各コーナーのMVPをとっていくことが多い。

波乗が担当している普おた（普通のお便り）だってクツクルドウのネタに苦戦している。

僕だって自分のネタを書くのに精一杯。

ただ、工藤佳代が加入した事でお笑いはほぼ目処が付いた。

これは喜ばしい事だと思う。

しかし、「ラジオデイズ」には他にもコーナーがある。

さし当たったの問題は、あるコーナーに関して宝条リンは圧倒的に弱いことだった。

案の定、3ヶ月目にはいる頃に恐れていた事が起こる。

読まれるハガキが頭打ちになった。

要するに一週間に読まれる枚数が限られてきたのだ。

「このままじゃあまずい……」

「枚数増やしてもなあ……ネタのレベルが上がるわけやないから……採用枚数は変わらんし……」

「どーしよう、どーしよう。多記君！ 多記大先生！ 私達どうしたらいい？」

波乗は目を潤ませている。その目で見られると辛い。

実はこうなった原因は分かっている。

元々、波乗達では限界があった。

それは

「波乗……オレ達には致命的な欠点がある」

「ええ！ なに？ ナニ？ 何？ 教えてーっ！」

僕は二人を交互に見る。

二人も目をそらさない。

「お前達は下ネタが書けない！！」

「やっぱりなあ……」

「ガーン」

ちなみに今のガーンは波乗が自分で言ったものだ。

自分のリアクションに気付き、波乗は顔を真っ赤にして、喋りだす。

「そ、そんな…… × × や ×なんて私書けないよーっ」

「いちいち口に出して言うなっ！ 僕だって恥ずかしい！」

「ラジオデイズ」のネタハガキのコーナーの中で軽いのをいれると下ネタのコーナーは三つある。

この三つのコーナーなしで今まで善戦していたのが不思議なくらいだった。

僕等は沈黙した。やはり女の子のハガキ職人では限界があるのか

……

「それやったら多記、アンタが書いたらええやん」

「待てよ！！ 僕だって他のネタも書いてるんだから無理だ」

「下ネタなんて男の想像力使えばチヨチヨイと書けるやる?」

「工藤……お前、男の想像力をどう捉えてるんだ……」

突然、波乗が僕の目の前に顔を近づけた。

「ねえ、ねえ、多記君も……そんな事、考えるんですか?」

「考えてるやんなあ、男やし」

「くだらない事を聞くな!! と、とにかく僕も手が回らないし、

第一、下ネタは苦手なんだよ」

「なんだ……」

「ガツカリやな……」

「お前等、何考えてるんだ?」

これ以上はどうしようもなく黙る。そんな矢先、波乗は呟いた。

「私……ヨゴレになる」

「え? 澄音、何言ってるの?」

「本気か? つらいぞヨゴレは」

「はあ? 多記まで何を」

「でも、それをしないとNO.1になれないんでしょ? 私……綺麗

なままではいられない! ヨゴレル! エロ姉さんになる!!」

波乗は握りこぶしを握って力説した。

「姉さんかどうかは知らんが、僕に任せろ! なるべく最小限のヨ

ゴレにするっ!」

「うん!!」

なんかやたら「ヨゴレ」を連発する変な会話をする僕達。

とはいえ下ネタ苦手同士が協力し合ったところでなんの成果があるのだろうか?

答えは次の週にアツサリ出た。

一枚もハガキが読まれない。

「ゴメン……私、エロ姉さんになれなかったよ……」

「いや、僕もたいしたアイデアが浮かばなくて悪かった」

「私は……なんもせんかったけど」

「やっぱりエロ姉さんじゃ駄目だったんだね。エロエロ姉さんじゃないと……」

「波乗、そこに何の意味もないぞ」

やはり、ここは誰かを新しく加入させるしかない。

そして、すでに目星をつけている人物は一人居る。

ただ……なるべく関わりたくは無かった。

「実はもう一人、宝条リンに加入させようと思うんだ……」

「本当!？」

「誰や?」

「川上直人っていうんだけど……」

第9話 「そうかあ!! そら、しょうがないなあ!!」

僕と波乗、工藤は廊下を歩いている。

二つ隣のクラスへ行くためだ。

「なあ、ホンマに川上へ頼みに行くの?」

「ああ、そのつもりだけど」

工藤の冴えない表情を見ると、彼女は川上の評判を多少なりとも知ってるらしい。

「ねえ、どんな人? どんなヒト?」

波乗は川上の事は全然知らないみたいだ。

「うーんと一言で言うなら……」

「ムカつく奴。女を騙して何股もかけたり、気の弱い奴見つけて金せびつたり、その場しのぎの口は冴えてて、せこい計算は超一流っていう噂や」

口ごもる僕をよそに工藤は川上の悪口を言えるだけ言った。

「まあ、世間の評判はもっぱらそんなところだな。でも、アイツはそんなに酷い奴じゃないよ」

「ふーん。多記君が言うんだからホントは良い人なんだよね」

「……」

「どうした工藤?」

「別に……」

工藤は黙って何も言わなくなった。

僕はそれに上手く答えられない。

波乗は僕と工藤の顔を交互に見ていた。

そして教室へ入ることにした。

川上は机にうつぶせになり眠っていた。

僕達が机を囲むように立つと、気配を感じたのか川上が起きる。

「よお、久しぶりだな、川上」

初め寝ぼけ眼だった川上は僕の顔を見ると、あからさまに嫌な顔をした。

「今さら何の用だよ」

僕は手短に今までのあらましを説明をする。

川上は爪をいじったりして真面目に聞かない。

「なあ、多記。オレはお前が嫌いだって知ってるよな」

「……知ってる。それを承知で頼んでる」

「だったら帰れ。お前の顔なんて見たくない」

「あの、ちよつといいですか？」

「誰？」

「私、波乗澄音といいます。よろしくお願いします」

「はあ……」

波乗が川上に話しかける。

「あの、お願いします。情けないですが……私一人じゃあどうしようもないんです」

そして波乗は深々と頭を下げた。

しかし、それをシカトするように川上は再び机へうつぶせになる。それ以上何を言っても反応がないので、僕等は退散する事にした。

夜、波乗の家。僕等はラジオを聴いていた。

今日も宝条リンは下ネタ以外のコーナーで順調にハガキが読まれる。

「やつぱり、川上は嫌な奴やったなあ」

「うん……」

波乗はともかく工藤には反対されると思っていたらしい。

川上の評判が悪い事は僕も知っているし、それは仕方の無い事だ。今の状態を解決する方法は別の人を探るか川上を説得するかの二つしかない。

とりあえず、現時点では別の人を探す方向で考えよう。

そんな事を考えていたら番組はあつという間に終り、ハガキもあまり書けないままに波乗の家から帰ることになった。

工藤と僕が玄関を出ると目の前には突然、華富玲子さんが立っていた。

「元気だった？ 多記君」

「玲子さん……」

波乗家に毎日来ているが、玲子さんはADの仕事をしているため、話す機会はほとんどないに等しい。

それが、向こうから話しかけてきたのだ。

「でも今はこう呼ぶべきかしら……宝条リンさん」

「知ってたんですか!？」

「考えたものね……一人じゃあ対抗できないから集団で一つの名義を使うなんて」

宝条リンのハガキには……本名ではなく仮名で送っている。住所も波乗の家ではない。なのに何故分かったのだろうか？

不思議そうに僕の表情を察してなのか、玲子さんは疑問に答えてくれた。

「私が多記君の筆跡を忘れると思ったの？ 昔は貴方のハガキを嫌というほど見てきたのに」

「あ、ああ……そうでしたね」

「え？ なになに？ 私には全然わからへん」

「僕は昔、玲子さんがパーソナリティーを勤めるラジオ番組の常連だったんだ」

「そうなんや……でも、そのパーソナリティーがなんで今ココにいるの？」

「それはオレが聞きたいよ」

この疑問は僕が波乗に協力している理由の一つでもあった。

しかし、今はその問いに答えてくれる様子は無い。

挑戦的な眼差しで僕らを見ている。

「そんなことより……貴方達、サーファーキングになったらどうするつもり？」

「……玲子さんがそんな事を言うって事は宝条リンも上位へ食い込んできた証拠かな」

「貴方達は黙って質問に答えれば良いの」

「多記、なんかこの人ムカつくなあ」

「……波乗を父親に合わせるためだ」

僕の答えを聞いた瞬間、玲子さんは目を見開き、はっきりした口調でこう言った。

「だったら貴方達は敵ね」

「……」

「貴方達を……いえ、澄音ちゃんを丈さんに会わせるわけにはいかない」

「どういうことだ」

「さあね。少なくとも今の澄音ちゃんを丈さんに会わせたくない人達が居るって事かしら。それに……貴方達がペンシル祭さん達、常連に勝てるの？」

その口調はあくまでも上から見下した感じだった。

少なくとも僕の知ってる華富玲子とは違う。

僕がラジオを通して感じた彼女の人は人の痛みが良く分かる優しくして強い意志を持った人だったはず。

「勝てるさ。そのために僕らは集まったんだ。まあ、内部で作為的な操作が無い限りという条件付だけど」

「私が故意に貴方達のハガキを弾くとしても？ ふざけないで！！」

ハガキはすべて丈さんに渡しています！！ それに、常連を甘く見ないで！！」

「そっちこそ」

僕はこんな話がしたいわけではないけれど、玲子さんの売り言葉

に買言葉でどんどん深みにはまって行く。

結局、玲子さんとは何一つ核心を突いた話が出来ないまま喧嘩別れになってしまった。

僕の心に残ったのは後悔と焦りだけだった。

次の日、やっぱり僕はもう一度川上に頼みに行く事にする。

昔の事もあったので一対一の話し合いが良いような気がして、他の二人を説得に誘うのは止めた。

昼休み。教室を出て川上を探そうとしたら工藤が僕を呼び止める。

「なんだよ」

「……どうせ、多記のことやから川上の所へまた行くんやろ？」

「行かないよ」

「ウソつかんでもええ。澄音なら今、先生に呼ばれて職員室行つてる。安心し」

「別に安心する必要はないさ。何処へも行かないし」

「ふーん。じゃあ、ずっと多記について行ってええよな」

「……ちっ」

根負けした僕は工藤を連れて行くことにした。

並んで廊下を歩きながらふと隣を見ると、工藤はなんだか楽しそうに大きく手を振って歩いていて。

僕の視線に気付いた工藤と目が合う。すると彼女は急にしおらしくなり、俯いた。

「なあ、行く前に教えてくれへん？ 川上とはどんな関係なん？」

「そうだな。……昔、川上と僕は友達だった」

「！？ 意外やなあ……ん？……『だった』って事は今は違っん？」

「僕がアイツが好きだった女の子と付き合ってから……疎遠になった」

「えええつ！……！」

「もちろん、アイツの気持ちは知らなかったのだが……川上にその子との仲を取持つように頼んだんだ……今思えば酷い事をしたと思ってるよ……」

「そうなんや……なあ、あのさあ……一つ聴いてええ？」

工藤は凄く不安そうに僕に質問する。

「ん？」

「多記は今も……その女の子と付き合ってるん？」

「いや、別れた……っーか、振られた」

「そうかあ！！ そら、しょうがないなあ！！」

僕の返事を聞くと急に表情がにこやかになり、何回も僕の背中を叩いた。

「工藤、何か急にテンション上がったくないか？」

屋上に行くと川上が一人で昼食をとっているのが見えた。

近づくと、川上は僕らと反対方向を向く。

「川上、頼む。ハガキと一緒に書いてくれ」

長期戦は覚悟している。今日は多分駄目だろう。

でも、何日でも頼むしかない。そうじゃなきゃあ……宝条リン勝てない。

波乗が父親に会えないだけじゃなくて、僕だって玲子さんに近づけない。

しかし、結論はアッサリ出た。

「協力してやっても良いぞ」

「マジでか？！」

「ああ。その代わり」

「？」

「この前もう一人居たろ……波乗って言ったけ？ あの子とオレの仲を取持てよ」

第10話 「I just confusion」

昼休み。

始まってすぐオレの元に一人の女の子が来た。

「川上くん……もう一度お願いに来ました」

「今日は一人で来たんだ」

「多記君達には内緒です」

「ふうん……」

目の前に立っていたのは昨日、多記と一緒に来た波乗澄音だった。一人で来たっていうのに彼女はオレの顔を見たまま何も言わない。しかたなくオレが話しかける。

「で？ 何の用？」

「ハガキと一緒に書いてください」

「嫌だ」

「ああ……」

オレの返事に波乗澄音は黙ってしまふ。

変な間がオレと彼女を包む。

オレはその場に居るのが嫌になり立ち上がるつとする。

「あつ」

波乗澄音は小さく呟いてオレではなく横を向く。

横を見ると大柄の男が立っている。

金を借りている佐藤だった。

「昨日の話……なんだけど……バイト代って……いつ……でるの？」

「ああ！？ 来月だよ、来月！！ お前はそんな事気にしなくても良いんだよ！！ 返すって言ったたら返すって言うてるだろうがっ！！」

佐藤にはいつも凶々しく下手に出るやり方で接していたのだが、波乗澄音の事もありオレはついつい口調を強めてしまふ。

「ちっ、ちゃんと返すからあっち行けよ」

「……」

腕力じゃあアイツに敵わないし、これで来月は返すことになるな

……

佐藤が居なくなつて、またオレ達に変な間が出来た。

「あの……」

「なんだよっ！！ お前のせいだからな！！ お前のせいで来月返す事になつたじゃねえかつ！！」

明らかに八つ当たりだが、そんな事はどうでも良い。

「ごめんなさい……」

「……ちっ、なんで謝んだよ……」

「でも、大丈夫なんですか？」

「は？」

「お金」

波乗澄音の顔を見る……表情からして本気で心配しているようだ。

オレは呆れた。

「オレの心配してどうするんだよ。アンタとは全然関係ねえし」

「え？」

「それに今の事で分かっただろ？ オレは無責任でなんでも先送りにしちまう様な奴なんだよ。だからそんなに期待されても困るし、してほしくない」

自分で自分の事を無責任だの何だのなんて言うのは恥ずかしい。

でも、波乗澄音の真剣な顔を見ていたら何だか調子が狂った。

いつものようなその場しのぎの軽口がなかなか出てこない。

「多記君が言っていました」

「？」

「川上さんは酷い人じゃないって……信じてます。だからもう一度お願いにきました」

「だからオレは」

「多記君が川上は必要だつて言ってます」

「……多記のことよっぽど信用してるんだな」

彼女は顔を真つ赤にして俯く。

しかし、多記の名前が出てきたことがオレを冷静にさせてくれた。

「だがソレとコレとは話は別だ。ハガキを書くのはお断り」

「……わかりました。あんまりしつこくしてもいけないし……でも

明日、また来ます」

「勝手にしてくれ」

波乗澄音は肩を落として帰って行く。

その数分後、今度は多記達が来たのだった。

「この前もう一人居たる……波乗つて言っただけ？あの子とオレの仲を取持て」

突然、川上の口から波乗の話が出てきたので僕は少し動揺した。

「だつてお前、二人付き合ってる子が」

「関係ねえよ。昔、オレがお前とアイツとの仲を取り持ってやったじゃねえか。この条件が飲めなきゃあ協力する事は」

「うーん……」

迷つてる僕の腕を工藤は掴んで引つ張る。

「多記、こんな奴おらんでも大丈夫やつて!! 下ネタ抜きでも枚数は稼げる!!」

「どうするんだ？ オレはどつちでも良いぞ」

「……うっっん」

「なあ、帰ろうや」

相変らず余裕ぶつた表情を向ける川上。

なんだか昨日の玲子さんと被った。

「わかった。条件を飲む。ただし、それはハガキ職人GPが終つてからにしてくれ」

「ああ、いいさ」

「多記っ!!!」

「じゃあ早速、今日から波乗家でネタを書いてもらうから。夜、僕がお前を迎えに行く」 「わかった」

僕は伝えることを伝えたとさつさと廊下へ出た。

工藤も後から付いてくる。僕は少しの間黙っていた。

僕が黙っているのは玲子さんのことがあつて自分を見失い、波乗の事を彼女不在のまま決めてしまった事からくる後悔からだと思う。そんな僕を見て工藤は話しかけてきた。

「なあ、玲子さんのことでムキになつて自分を見失つてるんちゃう?」

「なっ」

工藤の核心を突いた言葉に僕は言葉を詰まらせた。

「……そんなことない」

「それに……ホンマにええの?」

「何が?」

「……澄音の事」

「はあ? 川上が波乗と付き合う事に関しては波乗とアイツの問題であつて僕はきつかけを作るだけだから関係ない」

「ふーん……まあ、私はその方が都合ええけどな」

「え?」

「ううん、なでもないわ。こつちの話」

とにかく、川上が手伝つてくれる事になった。それで良いじゃないか。

宝条リンは死角がほぼ無くなった。

後はハガキを書くのみだ。

夜。僕が迎えに行くと川上は素直に付いて来た。
もしかしたら、昼の事はその場しのぎのウソかもしれないと心配
していた僕は安心した。

玄関先まで来ると玲子さんが僕達の前を通り過ぎる。

昨日の事もあり、無視された。

川上は玲子さんを見て驚く。

「おい、アレって華富玲子だよな」

「ああ」

「何でココに？」

「そんなの僕が知りたいよ」

「……なるほどな。お前が波乗家にこだわるわけだ。ハマってたも
んな、あの人のラジオ」

「ふん……」

川上は僕が玲子さんの番組へハガキを送っていたのを知っている。
昔からの付き合いだからしょうがないけど……

波乗の部屋に入るとすでに工藤は居て、波乗と話をしていた。

川上の姿を見た工藤は横を向き、波乗は微笑んだ。

「来てくれたんですね。ありがとうございます」

波乗は深々とお辞儀をした。

川上は途端に表情を崩し波乗の隣に座る。

「いやー、多記にどうしてもって頼まれたから来たわけ。澄音ちゃ
んヨロシクね」

「調子のええ奴やなあ」

「はい！！ おねがいしますっ！！」

次の週から宝条リンの下ネタのハガキが次々と読まれ始める。

これで全てが上手く行く……そう思った。

第11話 「相談天国」

夜。波乗家。今日も僕達は集まり、ラジオを聞きながらネタを書いていた。

皆一様に真剣な表情でハガキに集中する。

室内で聞こえるのはラジオから流れる波乗丈の声だけ。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………あ————っ！！！！ もう駄目だ、我慢できねえ！！ お前らなんか喋れよ！！！」

いきなり川上がわめき出した。

「なんだよ川上、集中力ねえな」

「はあ、多記、お前はバカか？ こんな雰囲気でもネタが書けるかっ！！！！」

川上は立ち上がると僕を部屋の隅に引っ張った。

「多記、よく考る！ オレは女の部屋で下ネタ書いている。それに加え手の届く所に女の子が居るんだぞ！！ そういう状況で下ネタを書かなくてはいけない。こういうのへビの生殺しって言うんじゃないのか！！ こんなに静かだと余計に意識するだろうが！！ 騒いでないとやってられん！！」

「まあ、気持ちは判らんでもないが……………」

目を血走らせて訴えかける川上に少し同情した。

そんな僕達の背後にはいつの間にか工藤が立っていた。

「川上、アンタが書いているの……………下ネタやんか。そんなデリケートなものでもないやん」「おい、佳代。何で下ネタの前に『……………』が付くんだ。バカにしてんのか！！」

「ちよっと、気安く名前を呼ばんといて！！ たかが下ネタ書く位

でガタガタ言うなや!!」

「何だと!! 下ネタは奥が深いんだ!! 良く聞け!! 下ネタを知らん奴はただエッチな言葉を直接使えば受けると思っっている節がある。しかし、真の下ネタはそれにあらず!! あくまでも直接的な方法は使わない、例えばバイブ!!」

川上の言葉を聴いて工藤は赤面した。

「アホツ!! 直接的過ぎるわっ!!」

「だから素人は困るんだ!! 携帯のバイブかもしれんだろうが」
「はっ!!」

驚いた工藤の表情を見て川上は満足そうに腰に手を当て胸を張って話始める。

「わかつたろ? 下ネタで重要なのはダブルミーニングだ! 一つの言葉で二つの意味を持たせる。十代青少年の妄想を直撃だっ!!」
「悔しーーーーー!!」

「だから、オレは考えなければいけない!! 単純に芸人のネタをパクってハガキ書いてるお前とは訳が違うのだ!!」

「何やて!! お前に何が分かるんや!! 昭和の下ネタづくりのくせにっ!!」

「ああ!? やるのかっ!!」

僕はケンカ腰の二人に慌てて割って入る。

「落ち着け二人とも!!」

「うるさーーーーー!!」

「え?」

「なんや?」

一気に室内が静かになる。

僕等は「うるさい」と叫んだ本人……波乗を見た。

「うーっ。ハガキに集中できないでしょっ!!」

「す、すまん、波乗」

「ごめんな……コイツがうるさいから……」

川上はダッシュで波乗の横へつけると、土下座して謝った。

「ゴメン、澄音ちゃん！！ いや、そうだよねハガキに集中できないもんね　今すぐうるさい多記と佳代を排除するから！！」

「アホ！！　お前が一番うるさいんやろっ！！」

「何だと！！　オレはなあ　」

「~~~~~」

波乗はこれでもかというほど頬を膨らませ僕らを睨む。

「……さっ、ハガキ書こうか」

「うん……」

「そうだな……」

各人所定の位置についてハガキをかき始める。

こうして室内はまた静かになった。

実は少し前までこんな状態ではなかった。

もっと和気藹々していたと記憶している。

今の原因を作ったのは他でもない波乗なのだ。

波乗は他のネタもちよくちよく書いているが、主に普おた（普通のお便り）を書いている。

他のネタがなかなか読まれないのは分かっていた。（最初に読まれたのはまぐれだとして）実は肝心な普おたの採用率がかなり悪いのだ。

普おたの性質上、読まれにくいのは分かっている。

だが、波乗は一人で自分の責任だと気負っているのだ。

自然に口数も少なくなってくる。

それを見て周りの人間が気を使ってあまり話さなくなる。

という悪循環にはまっていた。

次の日、学校で僕等は波乗に内緒で集まって相談することにした。「どうする？　澄音ちゃんはもう限界だぜ……」

「クラスでも表情暗いしなあ」

「うーん……」

皆一様に歯切れが悪い。

自分達はかなり順調に読まれているから、余計気になるのだろう。このままでは他の二人の士気にも影響しかねない。

三人揃えばなんとやらという諺も空しく良いアイデアが浮かばない。

「オレが普おた書こうか？」

「駄目だ」

「なんだよ、多記。お前、オレが澄音ちゃんと仲良くするのが嫌なんだろう」

「ちよっ……バカ言うな！」

「澄音の事なんとも思っていないんやろ？ それやったら、言葉詰まらさんでもええやん」

「うっ……」

なんだかこの二人の風当たりが強いと思うのは僕だけだろうか？

「違う。あれでもアイツはプライドが高い。せめて自分が受け持ったコーナーは自分でやり遂げたいと思ってるはずだ。中途半端な同情はいらない」

「確かに言えてるなあ……」

「じゃあ、どうするんだよ」

「……とにかくオレ達が八ガキ書くのを手伝うのは無理だ。ネタ自体はアイツが自力で書くことができ、さらに波乗をサポートできる方法はないものだろうか？」

「そんな方法あるやったら、とっくにやっとなるわ」

僕も自分で無理な事を言ったのは分かっている。

だから、工藤の反応ももっともだ。川上だって腕を組んで考え込んでるんだ。

「ネタ以外でのサポートか……オレ達が文字を書かずにできること

……」
簡単に結論は出ない。今でも十分八ガキは読まれているんだから
何とかなるはずだ。

波乗には悪いが……と僕は諦めの結論を出そうとした。

「そうかつー！」

「何だ！？」

「どうしたん？」

突然、川上が大声を上げた。

「オレに考えがある……多記、ちよつとこつちへ来い」

「え？ 何だよ」

「なんや、私は？」

「これはプライベートな話だ」

「は？ それと澄音とどう関係があるんや」

僕は川上と工藤から少し離れた所へ連れて行かれた。

そこで、川上から耳打ちされる。

「澄音ちゃんを救うにはこれしかない……を……と思うんだ」

「はあっ！？」

「佳代や澄音ちゃんは同じ……だし、問題ねえはずだ。あとはお前
だけ」

「なんでまたよりによって……」

それは僕にとって青天の霹靂とっていいような事であった。

「澄音ちゃんを救いたいだろ？」

「ああ……」

「じゃあ問題ねえよな」

「……わ、分かった」

「んじゃあ決まり。早速、今夜から来てもらおうからな」

僕は……どうしたらいいのだろう……少し憂鬱になった。

第12話 「元カノ」

夜になり、僕等は波乗家に集まった。

しかし、今日はいつもとは違う空気が漂っている。
タイミングを伺っているのだ。

川上は突如立ち上がり咳払いをする。

僕と工藤はハガキを書いている手を休め、川上を見上げた。
少しして、皆なの異変に気付いた波乗も顔を上げる。

全員の視線が集まったところで川上は話を始めた。

「いきなりだけど今日、宝条リンに新しい人を入れようと思う」

「川上、お前が勝手に決める事とちゃうやろ」

すかさず、工藤が口を挟む……っていうか、彼女には昼休みに新しい人が加入する事を伝えてある。
要するに演技だ。

「まあ、待て。オレの話を聞け。これは多記も既に知っていることだ」

「しょうが無いなあ、認めるわ」

工藤、早く了承し過ぎだ。

波乗は僕の顔をじっと見ている。

「オレはこの宝条リンに重要な欠陥を発見した」

「わー、川上、ホンマにか？ なにや、なにや」

工藤、もう喋るな……

「それはヴィジュアルだ」

「は？」

「オレ達文字ばかり書いてるだろ？ それじゃあ目立たないし、同じ様なネタがあった場合、最後にモノを言うのは付加価値だと思っただ」

「付加価値……」

波乗が呟く。よし、話に入り込んできた。

そこで僕は川上と交代する。

川上は携帯で連絡を取る役目になり、早速電話して家に来るよう
に告げた。

僕はやや大げさな感じで話を繋げた。

「アイキャッチをハガキにつけようと思う。お笑いネタ系のラジオ
番組では有効ではないが、アイドル・声優系統のラジオ番組では有
効だといわれている。ネタとは関係ないが選者の目に留まるような
イラストを入れる方法のこと。ネタを読んだあと『かわいいイラスト
ト付きでえ〜す』といわれるようなハガキだ」

「それやったら、私は関係ないなあ。お笑いネタ系のコーナー担当
やし」

工藤は普通に答えた。

彼女には新しい人が入ってその人はイラストを描くとしか伝えて
なかったからだ。

「そうだな、もちろん川上も下ネタ担当だし関係ない。恐らく、フ
ツおたに關係あることだろ」

「っ!!」

『フツおた』と聞いて反応する波乗。僕の顔をじつと見てる。

「ちげーよ!!! そこじゃないって!!! 道なりに来れば良いって
言ってるだろ!!! ……ああ、もう、しょうかねえなあ。今から迎
えに行くからそこ動くなよ!!!」

川上は携帯に向かって大声でわめいている。

何やら難航しているようだ。

そりゃそうだろうな。

「駄目だ。多記、オレ迎えに行ってくる」

「やっぱりか……頼んだ」

川上は携帯で話をしながら部屋を出て行く。

「何や、何があったん?」

「いつものことだ気にするな。……って言っても最近は何も会ってないから何とも言えないけど……」

「多記、アンタとその子どつう関係なんや？」

「ええつと、それは……」

僕が答えに困っていると、今まで黙っていた波乗が喋りだした。

「……多記君、もしかして私のせいで新しい人を入れなきゃならぬいの？」

『私のせい』という言葉使いからも波乗は肯定的には受け止めていないらしい。

波乗の言葉に工藤は慌てて僕をフォーローする。

「澄音、アンタのハガキな……ネタは悪くない無いと思うんやんか。ただ、選者の目に止まらなだけっちゅーかな」

「私のハガキはお父さんの目には止まらないの……」

工藤はさらに慌てて声を上ずらせて喋り続ける。

「ち、違つて、ほ、ほら、フツおた書くの上手いクックルドゥーとかいう奴がよくイラスト付ですとか『ラジオデイズ』で紹介されてるの聴くやん。だから……」

「もういいよ。皆と違って才能の無い私は絵を書かないと読まれなようなハガキしか書けないんです……」

「ああ……」

波乗は俯いてそれ以上何も話さない。

工藤も掛ける言葉が無くなって俯いてしまう。かなり重症だ。

こつなつたら下手な慰めは必要ない。

僕は言う事にした。

「おい、波乗。良く聞け」

僕が続きを話そうとしたとき、ドアの向こうから大きな足音が聞こえてきた。

室内にいる三人の視線が自然にドアに集まる。

この部屋のドアは引いて開けるのだが、何とも押し入ろうとし

た後、少し静になり、ドアが勢い良く開いた。

「あっ、タツくん！ もーっ！！ドコだかわかんなかったああああ！！！」

「わわわっ、コッチへ来るな、リンっ！！」

「はあ？ リン？」

「えっ？」

入ってきたのはツインテールの女の子。

もの凄い勢いで僕に走りよってくると抱きつくようにぶつかつた。「リンちゃんねー、リンちゃんねー、歩いてここまで来たのお、リンちゃんねえー、道なりに来いって言われねー、リンちゃん迷子だったのお〜」

「矢継ぎ早に言うな、とりあえず落ち着け」

「矢継ぎ早って何？ リンちゃん、わかんない」

「……分かったから、とりあえず離れる」

僕は後ろからの刺すような二人の視線を感じてリンに言う。

リンはそれでも離さない。

「嫌！！ そんなのお断リン！！ だって、リンちゃん怖かったんだもん！！」

「べ、別にええよ。そ、そのまま……何か二人共仲がええみたいやし」

工藤がメチャメチャ歯を食いしばりながら話すのが後ろから聞こえた。

僕がどうして良いか分からないで居ると、ようやく川上が部屋に入ってきた。

僕はリンが抱きついたまま川上の方へ移動する。

「何だ？ この状況は……まあ、いいか」

「よくない！！ 川上、何とかしてくれ」

「そうだな……えーっと、お二人さんに紹介するよ。多記の”元彼女”の琴和リンです」

「なんやてっ！！」

「!!!」

川上の言葉を聞いた工藤は大声を上げ、俯いてる波乗は肩が反応した。

「おい、川上!!!」

「いいじゃねえか、いずれはバレる事だし。最初に言っておけば」

「リンちゃんだよ!!!」

「相変わらずだな……」

いきなりの新加入！ 勢いづく宝条リン！ のはずが……

昨日に負けず……いや、昨日以上に重苦しい雰囲気が室内を包む。とりわけ工藤からは圧倒されそうな攻撃的視線を感じる。

「別に気にする事じゃねえよなあ、なんせ前の”彼女”だしな、今は”彼女”じゃないし」

「川上、ことさら彼女を強調するのは止める」

「え？ 何？ ”彼女”を強調するな？ わかったよ、”彼女”って言わなかった良いんだろ？ ”彼女”って」

ボキッ

「あれ？ おかしいなあ。今日はシャーペンの芯がよく折れるなあ……って思ったらシャーペンごと折れとったわ……」

「おい……」

「わーっ!!! すごい!!! すごい!!! リンちゃんに見せて!!!」

リンは大声を上げ、工藤に抱きついた。

「なんや、なんや。纏わりついてくるなっ!!!」

「お断わりリン!!! カツちゃんに抱きつく〜」

「誰がカツちゃんや!!! 多記、アンタの元カノやろ。何とかしてや」

「無駄だ。リンは気に入った人なら誰にでも抱きつく」

「わー、なんかカツちゃん良い匂いがする〜」

「こ、コラ……やめ……重い……」

何となく仲良くなりつつある二人だった。

リンのお陰か室内が騒がしくなる。

工藤はこれでいいとして(?)僕は波乗の様子を伺う。

さつきから黙々とハガキを書いている。リンの騒ぎにも一向に動かない。

なんとか、リンと仲良くしてもらわなくてはアイツを呼んだ意味が無い。

僕は波乗の隣に言った。波乗は僕が来ると少し離れた所へ移動する。

さらに近づくと移動した。

仕方が無いので離れたまま話しかける。

「とりあえず、アイツ、あんな奴だけど絵は上手いから。アイキヤツチには十分だと思う……だから今日から早速、ハガキに絵を
「
「いない」

「そう言うなよ。これでも皆、お前を心配してわざわざ
「
と言いかけて慌てて口を閉じる。

しかし、時既に遅し。波乗にはしっかりと聞こえていた。

「多記君に私の気持ちなんか分からない!!」

「っ……」

騒がしかった室内が一気に静まる。

「私はどうせ、才能のある皆に心配されるような足手まといだよ…

「…」

「波乗、聞いてくれ、僕は」

「うるさいっ!! 皆に才能の無い人の気持ちなんて分かるわけが無いよっ!!」

「なっ!!」

後になっていつも気付くのだが僕は意外に短気なのかもしれない。波乗の一言で僕も頭に血が上ってしまったから。

「ああ、分からないね」

「……」

「さつきから才能、才能ってウザいんだよっ！！ 才能を言い訳にして泣き言を言う奴の気持ちなんか分かりたくもねえなっ！！」

「……」

波乗は瞳は潤んでいた。

歯を食いしばり僕を睨んでいる。拳は握られ震えていた。

「……」

「……」

彼女は何も言わず室内を出て行った。僕は追いかけない。

「何？ かけっこ？ よーし、負けないぞー！！」

走り去った波乗をみてリンは面白がって追いかけて行った。

第13話 「好き！好き！！大好き！！！」

波乗とリンがいなくなると室内は静かになる。

僕は追いかけるタイミングを失っていた。

立ち尽くしている僕に後ろから声が掛かる。

「行った方がええんちゃう？」

「えっ？」

振り向くと声をかけたのは工藤だとわかった。

「澄音はともかく……リンちゃんはここへ来るの初めてやし、迷わへんの？澄音の家の敷地って結構広いし」

「そ、そうだな……じゃあ……リンを探してくる」

工藤の言葉に背中を押され僕は部屋を出た。

僕は名目上、リンを探しに外へ出た。

売り言葉に買い言葉とはいえ、言ってしまった事を後悔している。

とはいえ、あの二人がどこへ行ったのかよくわからない。

辺りを見回していると、雑木林の中で明らかに誰かが草木を踏み倒した跡を見つけた。

けもの道みたいだな。

にしても、わかりやすい目印だな……まさかリンの奴が？んな

わけないか。

だけど……まずはここから探すとするか。

僕は重い足取りを引きずるように歩き出した。

そして跡をたどっていくと、どんどん先に続いていた。

波乗が頑張っている事は皆知ってる。

だからこそアイツにも結果を出して欲しいと思った。

でも、会いたくもなかつたリンまで呼んだのにこのざまだ。

僕は手伝わなかった方が良かったのだろうか？ 余計な事をしたのだろうか？

一人で考えたって答えなんかでない。

もう一度波乗に会ってキチンと話をしよう。

草を辿っていくと人影が見えた。その数二つ。

きつと波乗とリンなのだろう。

二人ともツインテールなので良く分かる。

髪の結び目が肩に近く下についているのが波乗で、上のほうについているのがリンだ。

僕は早足で近づこうとした……が止める。

それは二人が会話をしていたからだ……

私はいつの間にか走りだしていました。

感情的になつて、皆を困らせて、あんなこと言ってしまったって、部

屋を飛び出して……

情けないです……

敷地内は大きな森に囲まれています。私は森の中へ入りました。

一人になりたい……この一心です。

しばらくして息切れがしたので私は走るのを緩めました。

ここまできればもう誰も追ってこないはずです。

そろそろ立ち止まるうとした時、私の背後に何かが迫って来る気配がしました。

「いっちばーーーーーんっつっ！！」

「ええっ!?!」

琴和さんでした。

彼女は私を通り過ぎると少し先の木にぶつかるとして止まります。

「この木がゴールだからねっ!!! だからリンちゃんがいちばーん!!!」

「えっと……」

「でも、リンちゃん……疲れたのお……」

彼女はその場に倒れこんでしまいました。

「大丈夫ですか？ 琴和さん」

何故だか私は倒れている琴和さんを介抱しています。

「うーん……ここどこ？」

「あっ、良かった。気が付いて……」

琴和さんは立ち上がりました。

そして何かを考えているようです。

「リンちゃん、走って……リンちゃん……リンちゃん……」

「私について来ましたよ」

「そうそう!!! リンちゃん、一番になったんだ!!! あー、面白かった。さっ、帰ろ」

しゃがんでいる私に琴和さんは手を差し出します。

でも、私は俯きました。

「はーちゃん、帰らないの？」

「……私は帰れません」

「何で？」

俯いている私を覗き込むように琴和さんが話しかけます。

彼女は屈託の無い笑顔で『何で？』と私に尋ねました。

そんな素直さが少し羨ましいです。

「すみません。帰りたくないんです……琴和さんだけ帰ってください
い」

「うーん、リンちゃん意味がわかんない……でも、いいや。先に帰るね!!!」

琴和さんはあつさり踵を返して歩いて行きました。
足音がどんどん遠ざかっていきます。

「はあ……………」

「……………」

しかし、またすぐに足音が近づいてきました。

「？」

「ここ、何処だかわかんないのおおお！！！」

結局、琴和さんは私の隣に座っています。

さっきまで帰れないと半べそをかいていたのに今はもう御機嫌で、
鼻歌混じりに木の枝で地面に絵なんか描いています。

地面に描いた絵なのに凄く上手いのが分かりました。

「琴和さんは良いですね。絵を描く才能があつて……………」

「リンちゃんねー、才能つてよく分かんないのお」

「……………そうですか」

「ふんふん」

「はあ……………」

「ねえ、はーちゃんは何で八ガキを書くの？」

「え？」

「リンちゃんねー、好きだから絵を描くのおー」

私は何で八ガキを書いているんだろ？

サーファーキングになりたいから？

本当にそうでしょうか？

「ああ……………」

今わかりました。違います。

私は……………私は……………家族を取り戻したい……………

皆でご飯を食べたいんです……………

これは、しばらく考えて無かった事です。

ただハガキを読みたいと思う一心で何かを忘れていました。

「私は……お父さんに会いたいです。『ご飯を食べましょ？』って言いたいです」

「はーちゃん、お父さん好きなんだねっ！！」

「はい！！ お父さんもお母さんもお兄ちゃんもおじいちゃんもおばあちゃんも皆、皆、大好きです！！」

「リンちゃんも！！ ダディもママも姉上様もグランパもグランマもだーい好き！！」

そうです。私には才能なんて無くても良いんです。

私に大切なのは……皆が好きという気持ちだと思います。

もしかして、琴和さんはこの事を分からせるためにワザと私についてきたのでしょうか？

「琴和さんもしかして……私のこと」

「リンちゃんオナカすいたあ〜。リンちゃん帰りたい〜。リンちゃん、リン界点寸前〜」「えっ……？」

……気のせいだったみたいです。私は立ち上がりました。

「琴和さん、帰りましょうか？」

「うんー！！」

でも、琴和さんは立ち上がりません。

「どうしたんですか？」

「はーちゃん、おんぶ〜」

琴和さんをおんぶして少し歩くと目の前に多記君が現れました。

さっきの事もあり、いざ多記君を目の前にする又何も話すことが出来ません。

「あっ……」

「うっ……」

先に話しかけたのは多記君でした。

「色々考えたけど……やっぱり波乗には八ガキを書く才能なんて無い」

「……そうですね」

「でも、お前は……家族を取り戻したいって気持ちを持ち続けている」

「はい？」

「お前の気持ちたちが皆を引き寄せたんじゃないのか？ 少なくとも僕はそうだぜ」

「多記君……」

「人を引き寄せるのも立派な才能だと思うんだが……どうだろうか？」

「……ありがとう」

涙ぐむ私を見て多記君はどうして良いか分からずオロオロしています。

私も溢れるものが止められ無くてどうしようもないです。

「ハガキのネタの事はオレ達に任せろ。そういうセコセコした事は得意なんだ」

「……うん」

頷くことしか出来ませんでした。

私が泣き止んだ頃。多記君が話しかけます。

「重いだろ？ よし、僕が背負ってやるよ。リン、こっち来い」

「お断わリン！！」

「お前が断るなっ！！」

「リンちゃん重くないもん、はーちゃんの背中が良いもん」

「……お前なあ」

「いいですよ」

「波乗……」

「今はこの重みが心地良いんです」

「……良く分からんが……まっ、いいか」

私達は歩き始めました。もう立ち止まりません。

雑木林を出ると家の前で佳代ちゃんと川上君が手を振っています。
今、私の気持ちはハッキリしました。

皆……皆……大好き！！

「川上、これワザとか？」

「何がだよ」

「澄音と多記がああなるって計算してリンちゃんを呼んだんか？」

「別に計算なんかしてないぜ。絵が書ける奴を入れたほうが良いって言うのは本当に思ったことだし……あれは計算外だ」

「アンタって……卑怯な奴やな」

「……そうか？」

「？」

「お前も知ってるだろうけどオレは澄音ちゃんを狙ってる。だってらなるべく不安要素は排除しておいた方が良いだろ？ だいたい恋愛に卑怯も何も無い。モノにしたら勝ち、振られたら負け、それだけだ」

「……最低」

「卑怯、最低で結構。それより……お前こそどうなんだよ」

「何が？」

「誤魔化すな……多記が好きなんだろ？」

「……アンタには関係ないわ」

「だったら何で素直に澄音ちゃんを追いかけろって言えなかったんだよ。よく人の事を卑怯だの最低だの言えるな」

「!?!」

「お前だつて澄音ちゃんが多記とケンカして少し安心してゐるはずだ……」

「黙れ!! 私……」

「なあ、オレ達目指すモノははっきりしてゐるだろ? だったら、協力しようじゃねえか」

「えっ!?!」

「お互いが上手く行くようにサポートするんだ」

「……」

「考えてみな……好きな人の隣に自分以外の誰かがいる光景を」

「……」

「嫌だろ? 悲しいだろ? このままだと多記はお前じゃなく……」

「……分かった……お互い、どっちが上手く行っても恨みっこ無しや……」

「ああ、分かった。交渉成立な」

第14話 「はい……リーダーです」

時間は確実に流れている。気が付けばもう六月末。四月から始まった八ガキ職人GP前半戦が終る。

波乗の話によればもうすぐ中間発表があるらしい。

これで宝条リンの実力がはつきりするわけだ。

今日もラジオからジョニーこと波乗丈が勢いのある喋りで放送をしている。

『さあ！！ 今日から中間発表までの一週間は特別企画と題してFAXネタを大募集だ！！ ポイントを稼ぐチャンスだぞ！！ お題はもちろん一発ネタで行こう！！』

「何っ！！ お前ら、チャンスだ！！ さっそくネタを」

僕がラジオから振り向くと机には川上しかいなかった。

室内を見渡すと何故か隅のほうで波乗、工藤、リンが固まってなにやらヒソヒソ話をしている。

「えっ！？ ホンマに？ ……で？ うんうん……」

「……なのぉ、それでリンちゃん……」

「……（波乗黙って物凄く頷いています）」

「アイツ等、何やってんだ？」

「知らんほうが良いぞ」

僕の呟きに川上が口を挟む。

川上はあの三人には関わらず、黙々と八ガキを書いている。

「何で？」

「ああやって女が集まってる時はろくな話をしていない。変な男の話だとか元彼の悪口だとか……とにかく露骨に言う。男が耐えられる内容ではない。一言で言えば『えげつない』だ！！」

「川上……実感こもってんな」

「ああ……経験済みだ」

「なんだか川上が顔を引きつらせて笑っている……相当辛い過去があるのだろうか……」

「でもさあ、元彼の悪口なんて付き合ってた自分を貶める行為じゃないのか？」

「そんなのどうでもいいんだよ。アイツ等は話をしたいだけなんだから」

「ふーん……」

「……ん？」

冷静に考えてみる……アイツ等が集まって男の話といえ……

よく見るとリンが主に喋っているみたいだし……

「ちよつと待て。元彼の悪口って……」

「多記、気を落とすなよ」

「わあああああつ！！！！ お前ら、その辺で話を止めろっ！！」
声を聞いて三人は同時に僕を見た。

リンはいつもどおりだが、工藤はニヤついてて、波乗は顔を真っ赤にしている。

「さあ、ハガキ書こか」（工藤、メチャメチャニヤついています）

「リンちゃん、絵を描く〜！！（いつもと変わりなし）」

「あの、その……（波乗顔を真っ赤にして俯く）」

「誰か教えてくれ……何を話していたんだ……いや、やっぱり言わなくていい……」

ものすごく話の内容が気になったが今はそんな事を言っていられない。

「今日から一週間、FAXのコーナーが増えた。よって宝条リンもガンガンFAXを送る」

「でもまあ、放送中もハガキのネタとかジョニーの言動をメモしたり、やる事は一杯あるぜ」

「確かに、でもFAXは放送中ずっと送らなくていい。ラジオデイズは三時間番組だから、せいぜい一時間チョットが限界だな。それ以降に送っても前半届いた分だけで読まれないだろう。前半勝負という事で」

「なんでFAXだけなんやろ？ メールとかの募集ないんかな」

「……ごめんなさい、波乗家は貧乏です……」

「別に澄音のせいと違うやん」

「……違うの……家にFAXが無いの」

「えっ！！」

ラジオブースにはFAXあるのに家には無い……波乗家……大丈夫か？

「だけど、折角のチャンスが無駄には出来ない……近くのコンビニに行こう。僕と川上が紙をコンビニまで運ぶからネタ作りは頼んだ」

こうして宝条リンFAX大作戦は始まった。

波乗家から近くのコンビニまで300m弱。

しかも波乗の敷地は大きく坂道だ。行きは楽だけど帰りがシンドイ。

僕と川上は放送から1時間チョットの間、走ってコンビニと家を行き来することになった。

こうして四日が過ぎる。

今日も今日とて波乗家でハガキを受け取りコンビニへ走る。

さすがに体がシンドイ。だが何とか気を取り直してコンビニへ到着すると川上が居た。

「なんだよ、まだ送ってなかったのか？」

「先客が居るんだよ……」

「ああ、なるほど」

四日連続でコンビニへ行くと、その時間帯に居るバイトだとかお

客だとかを覚えるもので、FAXコーナーには僕らが行くといつも先客が居た。

黒髪で髪の毛の長い女性。年は僕らより少し上ぐらいだろうか？切れ長の目に眼鏡をかけていて理知的なタイプに見えた。

彼女も僕たちの顔を覚えたようで、すれ違いざまに会釈をしながらチラチラと見てくる。

もしかして「ラジオデイズ」のリスナーかな？ と思いながらも聞けずじまいのままだ。

「やっとオレの番が来た！！ よし、送るぞ」

FAXの効果はあったようで宝条リンはかなりポイントを伸ばした。

そして最終日。

さすがにこのぐらいになると体の疲れがピークだ。

ネタを送信するとすぐに波乗家に向かう。

室内に入ると行き違いでネタを運ぶはずの川上が倒れていた。

「何してんだ、川上」

「もう駄目……ギブ……」

「頑張れ、後もう少しだろ」

「後は頼んだ、リーダー……」

「誰がリーダーだ！！」

川上はネタが書かれた紙の束を僕に渡すと、動かなくなった。紙を渡され茫然としている僕に声が掛かる。

「あつ、ついでにジュース買ってきな。炭酸のやつ。頼んだでリーダー」

「工藤！！」

「リンちゃんね、『新・稲 淳二のすごく怖い話・初版本』っ！！」

「売ってねーよ!」
「多記君……じゃなくて、リーダー」
「何だよ波乗、お前まで……」
すると波乗は僕の服の袖をつまんで軽く引つ張ってくる。
「……ついて行って良い？」
「え？」

急な申し出に僕が考えていると工藤の声が聞こえた。

「二人で行ったらアカン!!」
「なんでお前が言うんだよ……でも、確かに僕一人で十分だ」
「でも、男の子だけ外に出てズルイ……」
「あのなあ……」

波乗は上目遣いで僕を見る。

「うう……こういうのに僕は弱い。」

「……しょうがねえな」

「じゃあ、私も行くわ」

「リンちゃんも行く!!」

「はあ!？」

「だって、もうすぐ一時間経つし、ネタは書かんでええやろ?」

「……勝手にしろ」

多分、こうなったらもう止められないだろう。

ということと川上を波乗家に残し、コンビニへ向かう。

コンビニに着き、店内に入ると工藤は本の立ち読みを始め、リンは勝手に店内を物色し始めた。

波乗は何故かオレの隣にいる。

FAXにはいつもの女の人が立っていた。今日も紙を何枚か送信している。

波乗が僕の腕を肘で突付く。

「何だよ」

「あの人もリスナーなのかな？」

「さあ？ ……どうだろ？」

ふと腕の間から紙が見える。

一瞬だけだったが『カップラーメン症候群』と書かれてあった。意味分からん。シユールネタ好きか？

しかし、ラーメンネタ好きの波乗丈の好みを的確に付いている。これで少なくとも彼女がリスナーだと判った。しばらくして送信し終わった彼女が振り返る。

いつもならここで軽く会釈をして帰って行くはずなのだが……

「今日はもう一人の方は居ないのね」

「え？」

突然話しかけてきた。

「……はい。日頃の体力不足がたたっちゃって……」

「貴方はどうなの？」

「えっ、僕は……シンドイですけど責任ありますし」

僕を詰問するかのよう質問をしてきた。

切れ長の目で眼鏡装着。余計に責められている気になる。

答えを聞いて満足したのか、腕組みをして横目で僕を見てくる。

「そう、頑張るわね……宝条リンさん」

「……なぜその名前を！？」

「だって、その紙に書いてあるじゃない」

「あっ……」

僕が持っている紙に大きく『宝条リン』と書いてあった。

「確か宝条リンって何人かでネタを書いている人達よね」

「良くご存知で。じゃあ、アナタも『ラジオデイズ』のリスナー？」

「一応ね。まさかこんな所で会うとは思わなかったけど……貴方達、

私の周りではかなり話題になってる」

「……そうなんですか」

彼女の口が少し開かれて笑っているように見えるが、目は全然笑っていない。観察されているみたいだ。

「貴方がリーダー？」

「いえ……僕は……」

僕が否定をしようとするのと波乗が僕の前に立った。

「この人がリーダーです……」

「波乗……」

波乗に乗じて工藤が僕に何か渡してくる。

「そうや、この人がリーダーや。そして、リーダーやからこの本も買ってくれる筈」

「買わねーよ」

さらにリンが買い物籠に大量のお菓子を持って現れる。

「リンちゃんね〜、これ……」

「買わねーっ……」

「リンちゃん、まだ何にも言っていないのに……」

……と、くだらねえコントをしてる場合じゃない。

この人は一体誰なのだろう？

「そういう貴方のPNは？ ペンネーム ネットを送っているのだからPNあるんでしょ？」

「私はただのリスナー。それじゃあね。また、会えたら会いましょう」

結局、女性は自分の言いたい事を言っただけで帰っていった。

大量の荷物を抱え波乗家に帰った僕達は波乗の部屋で再びラジオを聴いていた。

『じゃあFAXネタを。あ〜、選ぶつもりなかったのについていカッ プリーダーメン症候群って言葉が目に入っちゃったよ。PNペンシル祭から』

「はあ……」

「どうしたん？変な声を上げて」

「さっきのFAX……ペンシル祭だったよな……」

「うん。そうやけど」

「じゃあ、多記君……あの人がペンシル祭……」

意外なところで最強の敵……ペンシル祭に会ってしまった。

……という事はペンシル祭はこの辺りに住んでいるのか？

『貴方達、私の周りではかなり話題になってる』

彼女の言葉を真に受ければ、他のリスナーもこの辺にすんでいる事になる。

考えてみれば波乗家からの電波はこの辺にしか届いていないのだから、近くに住んでないと聞けないわけか……

案外、街中なんかですれ違っているのかもしれない。

そう考えたら何だか迂闊に街中歩けねえなどか思ったりする。（

自意識過剰）

「なあ、リーダー。そこのお菓子も開けてーな」

「私もさっきから気になってた……リーダー、開けてください」

「リンちゃんはね〜」

「オレはリーダーじゃねえ！！」

「うう……（川上復活せず）」

こんなやり取りをしながら明日、八ガキ職人GPの中間発表を迎える。

第15話 「第19回八ガキ職人グランプリ中間発表」

今日は特別の日です。待ちに待った八ガキ職人GPの中間発表の日。

皆もいつもより早く集まる事に決定です。

私が部屋で待っていると最初に多記君が来ました。

「あれ？ オレが一番乗りか」

「うん」

多記君は私より少し離れて座りました。

座ってしばらく、腕組みをして下を向いたかと思えば、今度は座り直したりして、何だか落ち着きが無いです。

「多記君、緊張してますか？」

「し、してねえよ……そういう波乗はどうなんだ？」

「私は……感謝してます」

「はあ？」

「前はこんなじゃなかったから」

「……波乗？」

「いつも発表の前には諦めていました。でも今回はワクワクしてます。これも皆のお陰……特に多記君には感謝してます」

「止めるよ照れくさい」

多記君は顔を赤くしてそっぽを向いてしました。

でも、本当に感謝してます。神様、仏様、多記様つて感じ。

でも、仏様は死んだ人のことなので仲間に入れません。

「ちーーーーーすっ！！」

気合の入った大声とともに川上さんがドアを開けます。

川上さんの服装に私と多記君は呆然としてしまいました。

「川上、何でタキシードを着て来るんだよ」

「バカ野郎！！ 今日大切な日なんだぞ正装してくるに決まって

るだろ」

「別にテレビに映るわけじゃないし、中間発表だろ？」

「そ、それはそうだが……駄目なのか？」

「いや、意味無いだろ」

「そうか……」

「えー……っ、意味あらへんの!？」

川上さんの後ろにはспанコールとビーズを散りばめた紫のパイティードレスを着た佳代ちゃんが立っていました。

二人を見た多記君はため息をつくと言言います。

「……とりあえずお前ら座れ」

今、室内には普段着を着た私と多記君。タキシードを着た川上君さらにはパイティードレスを着た佳代ちゃんが座っています。

確かにいつもとは違う雰囲気。

「あーっ!! こんなんやったら来る前に多記か澄音に電話して確かめればよかったわ!!」

「お前らその格好で町を歩いてきたのか？」

「そっや」

「そうだけど」

「プツ」

「笑うなっ!!」

でも、二人の気持ちは分かります。それだけ大切な日なんです。しばらくして、大きな足音が外からしました。琴和さんが来たみたいですよ。

「おまたせ!! リンちゃん登場!!」

「!!」

私達の目の前には純白のウエディングドレスを着た琴和さんが立っています。

これで三対二になってしまいました。

「何でお前らそんな服を持つてるんだよ……」
普段着組の私達の方がおかしいみたいです。
多記君は呆れていました。

この光景を見た私の気持ちを多記君へ正直に伝える事にしました。

「多記君……」

「なんだよ」

「私もドレス着ていい？」

「……勝手にしろ」

私も急いでカクテルドレスに着替ええます。

ということで「ラジオデイズ」が始まる頃には多記君以外皆、正装になりました。

こういう状況になると私の部屋に居るのが勿体無くなります。

そう思っていたのはどうやら私だけではなかったみたいで……佳代ちゃんが皆に提案しました。

「なあ、折角の中間発表やし、玄関にあるラジオブースから聴かへん？」

「佳代、珍しく良い事言った」

川上さんも賛成しました。琴和さんはもう立ち上がっています。

多記君はもう何も言いません。

『さあ、みんなおの待ちかね、第19回八ガキ職人グランプリの中間発表だ！ 心して聞けよ！』

私達はラジオブースの前で発表を聴いています。

さつき華富さんが顔を引きつらせながら私達を見ていきました。

やっぱりラジオブース前にドレスの集団が居たら変でしょうか？

でも、お父さんはこっちを見ずに淡々と番組を進めています。

「私達頑張ったよね？」

「ああ……」

何か言葉数が少ない感じをみると、多記君も緊張しているみたいです。

そんな皆の緊張をよそにお父さんの話は続きました。

この中間発表では上位10人を発表します。ドキドキします。

10位、9位、8位、7位、6位発表されますが、宝条リンの名前がありませんでした。

正直、不安です。

「宝条リン……ランク外なのかなあ……」

「いや、大丈夫だ。6位の読まれた枚数が76ポイントだ。俺たちは少なくともそれよりは上のはず」

不安になった私を多記君はフォローしてくれます。少し勇気がわきました。いよいよベスト5の発表。私達は息を飲みます。

『注目のベスト5の発表だ！ まずは第5位！ PN、クックルドウーで84ポイント！』

「はあ~~~~~っ」

私達は同時に息を吐きました。

放送はクックルドウーさんの簡単な紹介があった後、続けて第4位の発表されます。

『第4位！！ PN、100gg98円で88ポイント！！』

「多記君！ じゃあ私達ベスト3に入ってるんだ！」

「ああ！ 信じられないが、そうみたいだな！」

私はこんなにワクワクするのは初めてです。思わず手に汗握りました。

きっと、多記君も同じ気持ちです。

私は皆にハンカチを渡しました。皆はそれを黙って受け取り、手を拭いています。

『とうとうベスト3の発表だ！！ 今回は初登場のハガキ職人がい

るぞー!!」

初登場はきつと私達です。心臓の音がドキドキからバクバクに変わりました。

横目で多記君を見ると、目を瞑り、口をへ字に曲げて下をむいていました。

私も同じ格好をします。

『第3位は…… P N、気まぐれサーファーで94ポイント!!』

「気まぐれサーファーって誰？」

川上君は知らないみたいです。多記君が質問に答えました。

「お前は途中から入ったから分からないかもしれないな。MVPこそ取らないが、どのジャンルにもまんべんなく採用されているハガキ職人だ」

「ふーん、中途半端ってことか。まるでお前みたいだな」

「……うるさい」

『さあ!! 第二位の発表だ!!』

「!!」

少し目を開け多記君を盗み見すると、へ字の口がさらにへ字になっていました。

さらに私も負けじとへ字にします。なんか口の筋肉が痛いです。泣いても笑っても後、二人。

本当に入っているのでしょうか？第2位の発表です。

『第2位は P N………ペンシル祭で100ポイント!!』

「なっ!？」

「あーいいなあ100だつて!」

「波乗、感心してる場合か! ……なんか不安になってきた。ホントに入ってるのか？」

そんな心配をしているうちに、第1位の発表です。

ドラムロールが鳴り出しました。

多記君は拝みながら「自分を信じる」とブツブツ言っています。他のメンバーも目を瞑っています。

そして、長いドラムロールの後、お父さんの声が聞こえました。

『なんと今回はルーキーが1位を奪取だ！ 第1位！ P N、宝条リンで113ポイント!!』

「やったーっ!!」

「よしっ!!」

「やりっ!!」

「よかったなあ!!」

「リンちゃんがいちばーん!!」

私は嬉しくて飛び跳ねました。

多記君は何度もガッツポーズをします。

「ありがとう！ これも皆のおかげ!!」

「何を言ってる!! お前だって頑張ったじゃないか、これは皆の……宝条リンの勝利だ!!」

私達は良く分からない間に抱き合っていました。

皆が一つになります。これが一体感なのでしょうか？

「悪いけど通してくれる？」

するといつの間にか私達の後ろには玲子さんがいました。

多記君は玲子さんを見ると私達を突き放すように離れました。ひどいです。

「まずはおめでとうといった所かしら？ でもこのまま首位を守るの？ まだ、前半戦じゃない。この番組の常連を侮らないで。2位のペンシル祭さんは元プロの番組作家さんだし、3位の気まぐれ

サーファーさんだつて、1位こそなつた事は無いけど、いつもペンシル祭さんとトップを争っているの。別名『無冠の帝王』。いつまで1位を維持できるかしら」

「……中間発表とはいえ、こんな新人に負けているようじゃあ、たかが知れてるけどね」

「皆をバカにしないで！！ 貴方たちみたいに5人がかりで1位をとろうとする人間とは違うの！！」

何だか二人とも口が悪いです。

でも、確かにあの人達のすごさは私が良く知っています。

無駄に何年もこの放送を聞いていたではありません。

1位は嬉しいです。これから維持しなくてはなりません。少し不安になりました。

と、同時に多記君と玲子さんの関係も気になります。

でも……今は素直に一番を喜びたい。

第16話 「忘れないよ、この名前」

七月。中間発表を終え、僕らは今日も波乗家に集まっている。今日の目的はラジオではなく試験勉強なのだ……

「おい、これだけ面子揃ってて誰もこの問題分からののか」

「私、学校休みがちだったし……」

申し訳なさそう答える波乗に、すかさず川上がフォローを入れる。

「いや、澄音ちゃんは悪くないっ！！悪いのは質問をする多記とこの問題だー！！」

「そやけど……皆アホやなあ……で、単位ベクトルって何なん？」

「……」

「なに？ ナニ？ リンちゃんにも教えてー！！」

僕らが何も出来ずに固まっていると横からリンが僕等を覗く。

こいつは学校が別なので一緒に勉強しても無駄なのだ。

「うるさい。今、お前に関わってる暇は」

「その答え、 ± 3 ベクトルeだよ！！」

「……えっ！？」「……」

全員がリンに注目する中、リンはどんどん説明を加えていった。

「んーとね、単位ベクトルっていうのは大きさが1の……でね、ベクトルaに……この時のtは実数だよ。それで……ってなるの」

「……」

「琴和さん、すーいー！！」

波乗が感嘆の声を上げ、工藤は口を開けたまま固まっている。

「そういえばお前、有名私立通ってるんだもんな。出来るよなこんな問題」

「関係ないよおー！！アホな子はアホだし」

「ああ、どうせ僕達はアホだよ……じゃあ、ついでにこの問題を教えてくれ」

「お断リン！！ 自分で解いて」
「…………ケチ」

こんな風に時間は過ぎていった。
結局はほとんど喋っていただけの様な気がしたけど……
中間発表以来、すっかり僕らは和やかムード。
いい雰囲気といえはいい雰囲気なのだが、緊張感が少し足りない
気もする。

区切りのいいところで勉強会は終わり、帰ることにした。
玄関のドアを開け、少し歩くと誰かが僕等に背を向けて立っ
ているが見える。

見覚えのある後姿は…………玲子さんだった。
僕だけじゃなくて川上也気付いたらしい。

「多記、あれ華富玲子じゃないのか？」
「ああ、そうみたいだな」
中間発表以来、というか以前から玲子さんとの仲は悪くなる一
方だ。

本当は話したいことがたくさんあるのに…………
僕が声を掛けようか迷っていると、玲子さんは振り返り僕等と目
が合った。

「……………」
「あつ……………」
玲子さんの顔を見て僕はかける言葉を失った。
彼女もそのまま何も言わずに走り去る。
他の連中にも見えたようで、工藤が皆に尋ねる。

「なあ、あの人、泣いてなかった？」
「…………泣いてたよな」
「リンちゃん、かけっこなら負けないよ」
「リン、あれはかけっこでも何でもないぞ。付いていくな……」
僕はリンの襟首をつかむ。

リンはそれでも走ろうとしたが、少しして諦めたようだ。
『その気持ちだけで十分』
そう言った2年前のあの日も玲子さんは泣いていた。

僕の一番古い記憶は十年前。家族で山へドライブに行ったときのことだ。

遅くまで山頂で過ごした僕ら家族は夜道を急いでいた。

運転席には父親。助手席には母親……と膝の上に僕。車内はラジオが流れている。

どこも渋滞だと伝えていた。

しかし、ここは山道。あまり関係の無いこと。

僕は遊びすぎたこともあり、ウトウトしていた。

だから、その瞬間はあまり記憶が無い。

父親の叫び声と母親の悲鳴が聞こえた後、もの凄い衝撃と共に僕は意識を失った。

意識を取り戻した僕は自分が横になっていることに気付いた。

最初は分からなかったけど、車が横転していたからだと理解する。何がどうなったか分からず、僕は両親を呼んだ。

「お母さん!!お父さん!!どこなの!?!」

呼びかけに反して声は聞こえない。

僕はとりあえずここから出ようと思い、体を動かそうとした。

しかし、何かが僕の体の自由を奪っている。

暗くてよく分からなかったけど、手探りで確かめるとそれは母の腕だった。

僕は母親に包み込まれる様に抱かれていたのだ。

僕は少し安心して母親を呼んだ。

だが、母親は答えない。

結論を言えば転落事故を起こし、すでに両親は死んでいた。

すでに死んでしまった母親に抱かれて救助までの時間を過ごすことになる。

僕は泣いた。

両親が死んでしまった事も悲しかったが、この夜空一人きりだということに怖かったのだ。

泣いて、泣いて、泣き疲れた頃……僕の耳に何かか聞こえてきた。それはラジオ。

カーラジオは事故の衝撃を耐えて放送を流し続けていた。どんな放送がやっていたかなんて覚えていない。

でも、消え入りそうな気持ちをラジオが繋ぎとめてくれた。

その後、無事救助されて、僕だけが助かった。

母親は僕をかばって死んだ。即死だったらしい。

その後、親戚の家を転々とした。

遊びに行く時の親戚の家とは違い、僕は歓迎されていない。疎外感に耐えられながら、ラジオだけは常に手元に置いた。

辛かった時、一人に怯えた時、そこにいてくれる。

今の家で暮らすようになっても変わらない。

ラジオは僕にとってそういう存在だ。

でも、ラジオの方は何も答えてはくれない。

話し相手になるわけでもない。あの放送を聴くまでは……

三年前の夏。何気なく聴いていた地方局の深夜のラジオ番組。

この回が第一回の放送だったらしく、番組の勝手が分からないパーソナリティーはあまり流暢とはいえない喋りを展開していた。

番組も最後になり、パーソナリティーがハガキの告知なんかを終えると締め挨拶をする。

「ラジオを聞いている場所はそれぞれ。車で、仕事場で、友達の家で、もしかしたら恋人の家でこの放送を聞いている人がいるかも知れ

「ません……」

「……」

舌打ちしたくなるような感覚。独りで聞いている僕はないがしろかよ……

『でも、私は自分の部屋で独り居る人のために送ります』

「……」

『それが私のやり方……私も独りだよ。ブースの中だけ』

この一言が僕を変えた。自分に話しかけてくれるパーソナリティー。

来週もこの放送を聴こうと思った。

そして、次の週。

『ふえーん、誰か助けてくださいーい！ハガキが、ハガキが一枚も来ないのです！』

『安いよ！安いよ！今なら採用率100%！』

何が安いのか良くわからないが、このパーソナリティーが必死なのは良く分かった。

よくよく考えてみれば『独りでいる人のために送る』なんてリスナーの反感を買うようなコメントを残してるんだからハガキが来ないのも納得できる。

だからというわけじゃないが、僕は生まれて初めてハガキを書いてみた。

このパーソナリティーなら何かが届きそうな気がした。

いざ書いてみるとなかなか面白く、我ながら良い出来だったので、そのままポストに投函。

さらに次の週。

本当にハガキが読まれた。

『呼びかけたかいたががあったよ！ペンネーム、マツチヨ石松君からなんと20通もハガキが届きました！』

僕はコーヒーを口から噴出した。

確かに20通送った。調子に乗って書いていたらそれぐらいになつてしまったのだ。

しかし、何で書いた枚数まで言うんだ？

……恥ずかしい。もう二度と送るまいと心に誓つ。

『へへっ……実はあんなに呼びかけたのに、この子しかハガキ来なかつたのよね……。マッチョ石松、マッチョ石松、マッチョ石松。よし、もう忘れないよ、この名前。もうこうなったらマッチョ君のためだけに放送しちゃう！』

何だか半分やけになつて喋っているこのパーソナリティーに好感を持ち、僕はこのパーソナリティーの名前を憶えておく事にした。

そのパーソナリティーの名前は華富玲子といった。

第17話 「ただの1リスナー」

僕は独りだった。皆にとつて忘れられてもいい存在。

本当に頼れる人は居ないし、世話になつてる井端のオバサン（本人にいうと凄く怒られる）にも迷惑を掛けられない。

でも、華富玲子というパーソナリティーは僕の名前を『忘れない』と言ってくれた。

その一言が嬉しい。自分を肯定してくれているのだと思った。

初めてハガキを読まれた次の週、僕はハガキを40通書いてしまふ。

だけど現実には甘くない。先週の放送を聞きつけた他のリスナーもハガキをたくさん書いてきたのだ。

その週、僕のハガキは読まれずじまい。

それも当たり前、ハガキを書くテクニクというものを持っていないのだから。

だから僕は学校の勉強そつちのけでハガキ職人の勉強をした。

すると半年後、僕は番組の常連になつていた。

さらに番組自体も軌道に乗り、一気に人気番組の仲間入りをする。当時の僕は完全に番組の虜になつていた。

そんな時、突然、番組の終了が告げられた。

終わると放送で告げられたときは、現実が受け止められず、ただラジオの前で呆然としたのを覚えてる。

心にぽっかり穴が開く感覚。

僕はそれを埋める手段が見つからず、本人に会つて確かめたくなくなり、生まれて初めて出待ちをする。

手紙で出待ちをする事を書いて送った。

季節は冬。待っている間、体は冷えたが心は熱かった。

会えば何か解決するはずだと思えた。

そして番組が終了し、玲子さんがラジオ局から出て来る。僕は玲子さんに近づいた。

「あっ……あの……」

僕はコレだけ言うのが精一杯だった。

幸い、玲子さんは僕に気付いて近寄ってきた。

「アナタがマッチョ君？ 手紙読んだよ。本当に来てくれたんだ。

……へえ……マッチョって言うわりには華奢だね」

「マッチョは止めてください。僕の本名は多記透って言います」

「そう。じゃあ多記君。今まで私の番組聞いてくれてありがとう。

君だけは最後に会っておかなくちゃと思ってたんだ。初めてハガキをくれた人だからね」

僕はそれだけで胸がいっぱいになった。

「あの……ありがとうございます！！ 僕、絶対この番組の事忘れませんから」

もういい、これだけ伝えればそれでいい。

始まりがあれば必ず終わりがあ、簡単な事だ。

僕はお辞儀をして帰ろうとした。

「マツ じゃなくて多記君。君だから言うけど実は私、オールナイトブレイクから新番組の誘いがあるの」

「あの人気番組のオールナイトブレイク!? 凄いいじゃないですか！！ 大出世です！！ おめでとうございます！！」

「ありがとう！！ 今から楽しみでしようかないよ！！」

満面の笑みってこうゆうことなんだなと納得できるような、幸せに満ちた笑顔。

不安より期待がはるかに凌駕しているんだろう。

「また、楽しい番組作りましょう！ 僕もハガキ書きますから！」

「うん、よろしくね！！」

この時の玲子さんの生き生きとした笑顔が忘れられない。

僕は自分の事のように喜んだ。

あの言葉通り、翌月から玲子さんは「オールナイトブレイク」を担当することになった。

僕は少しでも力になろうとハガキを出し続ける。

全国放送なのでさすがにレベルも高く僕は自分の腕を磨いた。

そして番組も順調に人気が出て華富玲子の名は一気に全国区となった。

さまざまな雑誌にもたびたび顔を出し、テレビにも少しずつ出演するようになった。

もう、地方ラジオ局の深夜放送でたどたどしく喋る、華富玲子ではない。

どこか遠い存在になった。

今にして思えば華富玲子がかもつとも輝いていた時期……だと傍目からは伺えた。

あの日の放送を迎えるまでは……

いつものように僕は「オールナイトブレイク」の時間を待っていた。

深夜一時の時報を合図に番組は始まる。

『華富玲子のオールナイトブレイク』

いつもの声にいつもの音楽が流れる。

後はいつものように音楽が小さくなり彼女のフリートークが始まる。

「……………」

少し待ってみるが、一向に彼女の声は聴こえない。

最初はマイクのスイッチであるカフをオンにするのを忘れたのかなと思った。

しかし、何分経つてもオープニングの音楽が鳴り止まない。もう誰かが気付いていいはずだ。

そして、ようやく音楽が小さくなり声が聞こえる。

だが、聴こえてきたのは局アナの男性の声だった。
『華富玲子さんが急病のため今回は私がお送りいたします』
変だ。絶対おかしい。

最初からいらないんだったら、むやみに音楽を流す必要が無い。
アナウンサーの声も落ち着きが無いし……何かあったのか？

そう思うと居ても立ってもいられなくなった。
何が出来るわけではないでも……行かなきゃ。

僕は自分の部屋を出て徹夜で仕事をしているオバサンの部屋へ向かう。

「直美さん（オバサンの名前）、何も言わずに僕に二万円貸してくれ!!」

「はあ？ 何言ってるの？ ……ここアミカケして」

直美さんは僕に構わず、アシスタントの子に指示を出す。

「頼む!! 本気なんだ!! 必ず返すから!!」

「あー、うるさい」

「お願いします!!」

頭を下げてお願いすると直美さんが僕へ顔を向けた。

「で？ ……返す当てはあるのかい？」

「……出世払いで」

「却下」

「そこを何とか!!」

僕と直美さんはにらみ合う。

しばらくして直美さんはため息をつき、僕に四万円を渡してくれた。

「倍持って行けば困ることはないさ」

「ありがとっ!!」

僕は家を飛び出した。この時間じゃあ電車も無いのでタクシーを捕まえて放送局に向かう。

一時間ぐらいして放送局に到着。

やはりというか、すでに異変を感じた多くのリスナーが集まっていた。

改めて華富玲子の凄さを目の当たりにした。

リスナー達の話している声が聞こえてくる。

「病院に運ばれた」だとか「ディレクターと喧嘩した」とか情報が錯綜していた。

僕は良くないと思いながらも局の裏側へ回り、局内へ侵入を試みる。

外から入れる隙を探していると局内の声が聞こえてきた。

「おい、外じゃあ華富玲子のリスナーで一杯だぞ。どう説明するんだよ」

「んなこと言っても本人は今何処かへ行っちゃったんだからどうしようもないよ」

これ以上放送局に居ても無駄だと判断した僕は玲子さんが行きそうなところを探した。

とはいえ彼女が放送で言っていた場所しか当ては無いけど……

タクシーに乗り込み有り金を全て渡し、あちこち運んでもらう。

僕は思い出せる限りの彼女のラジオでの言動を思い出した。

そこで思い出した一つの間所。

「玲子さん!!」

振り返った玲子さんの目は赤くはれていた。

「マッチョ……じゃなくて多記君!? ……なんでここが分かったの?」

「だって、放送で辛いことがあるとここへ来るって言ってたじゃないですか」

「……よく憶えてたね。放送でも一回しか言ったこと無いのに」

「それでも華富玲子の成長を見てきましたから」

「……そうだね」

「玲子さん？」

すると玲子さんはこっちへ近づくと僕の肩にしがみついた。僕は突然のことに動揺する。

「い、い、いきなりどうしたんですか!？」

息がかかるぐらいの近くに玲子さんの顔が迫っていた。

僕はまともに見ることが出来ない。

玲子さんは僕の首に腕を回して耳元で囁く。

「ねえ……今から私の部屋に来ない？」

「ええっ!?!……な、何言ってるんですか!?!」

僕の理性は吹っ飛びそうだった。

だが、ラジオの玲子さんとは違う雰囲気ギリギリで気持ちが止まる。

本心じゃない。いつもの華富玲子ではない。

ましてや、1リスナーの僕にそんな声をかけるはずがない。

「玲子さん……戻りましょう」

「えっ……」

なるべく、彼女を傷つけないよう、やさしく言っただつもりだった。すると玲子さんは回していた腕を離し、僕から少し離れた。

僕はホツとした。

寂しかった夜、今まで彼女に救われたことが何度もあった。

だからリスナーとして自分が出ることは何でもしたい。素直にそう思える。

「僕でよかつたらなんでも協力しますから」

「ありがとう……」

「それじゃあ」

「……その気持ちだけで十分だから」

「え？」

玲子さんは僕に笑いかける。

その笑顔は最初に会ったあの時のものとはかけ離れた作り物の笑

顔だった。

何が十分なのだろう？ その時の僕は意味が分からなかった。ただ去っていく玲子さんを見送るだけ。

結局、いつまで経っても玲子さんのオールナイトブレイクは再び放送されることはなく、僕もラジオから離れていった。

僕が知っている玲子さんはここまで。

何がどうなつて波乗家にいるのか知らないけどそれが彼女の出した結論なんだろう。

「多記、追いかけていいのか？」

僕は川上の声で我に返った。

「……行かないよ。僕に出来ることなんてもう無いはずだから。すかさず工藤が突っ込みを入れる。」

「『もう無い』？ 前から訊こうと思ってたんやけど、玲子さんとどんな関係があるの？」

「ラジオのパーソナリティーとリスナーの関係。それ以上でもそれ以下でもない」

きつとこれからも変わらないはずだ……そう思ってた。

第18話 「パーソナリティーとして」

私はある人に憧れてラジオのパーソナリティーを目指した。

その人の名は波乗文、通称ジョニー。

『OK！ ジョニーのラジオデビュー！！』

深夜の若者向け番組は丈さんのタイトルコールから番組が始まる。『さあ、今からの時間はみんな手を止める！！ そんなに考え込んで落ち込んでても意味が無いぞ！ 今からの3時間は全てを忘れて“ くだら” するんだ！』

このお決まりのセリフを丈さんは10年以上続けている。

学生時代から何度も聞いた。私にとつての魔法の言葉。

「玲子さん、一曲目の準備は大丈夫か？」

ディレクターの伝之助さんの声で私は我に返る。

「だっ、大丈夫です！！」

「まったく……いつもここで丈に見とれて仕事を忘れる……」

「す、すみません！！」

「いいじゃありませんか。玲子さんは丈の話芸を盗もつと必死なんですよ」

琴音さんのフォローで私も落ち着きを取り戻す。

「1曲目いきまーす」

丈さんと百合音さんにトークバックを使って話しかける。

こうすれば放送に私の声は入らずに丈さんに届く。

すると丈さんは上手い具合に話をまとめてくれる。

私はCDの再生のボタンを押した。

『あれは何年前の話だったか……』

『波乗文が何処かで海賊放送をしている』

そんな噂を耳にしたのは私がオールナイトブレイクを始めて一ヶ月後のことだった。

話を聞くと誰かが送ってきたカセットテープが情報源らしい。丈さんは目標だったが、私がこの業界で仕事をしようになった時にはすでに第一線を退いていて、丈さんの話を聞くことも無かった。

実際、この噂を聞くまで忘れていたのが実情だった。とりあえず噂のテープだけ家に持ち帰ることにした。

コンポにカセットを入れたきり聴かなかったけど。

この頃の私は目の前の番組に精一杯でそれどころじゃない状態。初めての全国放送ということもあり力も入った。地元ラジオからの大抜擢。

これもすべて地元ラジオ局のディレクターのお陰。

彼がオールナイトブレイクのディレクターと大学時代の友人で私を推薦してくれたのだ。

番組当初の反響は薄かった。最初の聴取率は全パーソナリティー中最後から二番目。

オールナイトブレイクは各曜日、パーソナリティーが違っていて私の曜日以外は皆、俳優さんだったり歌手だったり今が旬の人たちばかり。

そこへ無名の私が割り込んだところで太刀打ちできるわけが無い。でも、そんなことは前の番組で慣れていた。

前の番組なんかは三週目まで一通もハガキが来なかったのだ。

今回は前の番組のリスナーが応援してくれるだけ状況も良くなる。

地道にやっっていくしかない。他のパーソナリティーの様にドラマや歌でアピール出来るわけじゃない。

私が勝負できるのはラジオ。

他のパーソナリティーには出来ないリスナーのためだけに送る番

組作りを丁寧にするだけ。

それが実を結んだなんて大袈裟なものじゃないけど、番組の回数を重ねる度にハガキも増えていった。

少しずつ認められていく。聴取率も少しずつ順位を上げていった。順位が上がるに応じてラジオ以外の仕事も増えて来る。

雑誌の取材やテレビ出演など。私はあくまでもラジオの宣伝のために応じていた。

気付かない間に自分を取り巻く環境は大きくなっていった。

スケジュール管理は自分でやってきたのに私では処理しきれなくなってマネージャーを付けた。

局への移動は自分で車を運転していたのにいつの間にか後部座席乗ってる私が居る。

お化粧だってメイクさんが付き、チョイ役だけどドラマなんかも出た。

局を歩くのにも何人かで行動する。

確実に歯車は狂って行った。ラジオ以外の仕事がメインになって、ラジオの喋りも徐々に内輪ネタが増えていく。

番組へ来るハガキにも『最近トークが面白くないです』という意見が書いてあった。

忙しすぎて考える暇が無いのだ……って言うのは言い訳だと分かっている

……でも、自分ではどうしようも出来なくなっていた。

だから私はそういうハガキを無視した。最低の行為だった。

ネタハガキは放送作家さんに任せっきりにして、私は選ばれたハガキだけを読むようになった。

だって、もう努力しなくても聴取率はベスト3に入るから……

でも、ツケはいつか回って来る。さまざまメディアに出る私。

自分の中で才能の支出ばかりが増えて得るものが少ない生活サイクル。

それが確実に私を蝕んでいった。大勢の人の前に立たされる。皆、私のリアクションを待っていた。期待ばかりを感じる。

それに答えなきゃ……答えなきゃ……答えないと私は……私は……

あれ？

理解したときはすでに遅かった。

自分ではもうどうすることも出来ない。周りに振り回されるだけの私。

みんな……ナニヲ期待シテルノ？

「じゃあ、今日もいつもの玲子さんでお願いします」

「え？」

いつもの私？

……どんな私？

よくわからないままラジオブースに入る。

ふと時間を見ると0時59分。

後、1分で番組が始まる……そして、時報は1時を告げた。

いつものように音楽が聴こえ私はタイミングを見計らってカフをオンにしてマイク越しに喋りだす。

「……」

「玲子さん！！ カフが下がってるの？ 早く上げてー！！」

プロデューサー声がトークバックから聞こえる。

私はあわててカフを見る。

しかし カフはすでにオンになっていた。

慌てて私も何か埋めようと話そうとするけど……声が出ない！！

「あっ……あ……うっ……」

口が開くだけで声にならない。私は焦った。どんどん時間が過ぎる。

このままじゃあ……私……私……

次の瞬間、私の中で何かが終わった。

イスから立ち上がるとラジオブースを飛び出す。

スタツフが私を止めようとするけど振り切り走り去る。

……何でそんな目で見るの？

……期待しないで……私には何も無いの……

もう……嫌だ……何もかも……

逃げ出して行き着いたところ……ラジオ番組を初めて担当した街

……

ここなら私を癒す何かがあるかもしれない。

「玲子さん!!」

私は怯えながら後ろを振り向く。

するとそこには私に初めてハガキをくれた少年が立っていた。

「マツ　じゃなくて多記君!?　なんでここが分かったの?」

「だって……放送で辛いことがあるとここへ来るって言ってたじゃないですか」

「……よく憶えてたね。放送でも一回しか言ったこと無いのに」

「これでも華富玲子の成長を見てくださいましたから」

「……そうだね」

「玲子さん?」

私は自分の思いに耐え切れなくなり、彼の肩にしがみついた。

あの時から私を見てくれたこの子なら私の気持ちをわかってくれるかもしれない。

「い、い、いきなりどうしたんですか!?!」

「ねえ……今から私の部屋に来ない?」

どうかしている……こんな少年を部屋に誘うなんて。

でも……しがみ付けるものには何にでもしがみ付きたい衝動に駆られていた。

「ええっ！？……何言ってるんですか！？」

「……」

「玲子さん……戻りましょう」

「えっ……」

彼の返事に自然と手が離れ、距離をとった。

そうだ。彼はリスナーなのだ。

私をラジオパーソナリティーとしか見ていない。

私がラジオをやっているから彼はここまで来てくれたのだ。

「僕でよかつたらなんでも協力しますから」

「ありがとうございます」

純粋な気持ちで私を締め上げた。

いたたまれない気持ちになる。

「それじゃあ」

「……その気持ちだけで十分だから」

……もういいから。

期待しないでいいから……私を追い詰めないで。

そう言いたくて……私は言葉を呑んだ。

彼はそんな言葉を待ってないに決まってる。

「え？」

彼の疑問に答えることなく、私は精一杯、ラジオパーソナリティーとしての笑顔を見せる。

原点にきてても自分を責める結果にしかならない。足早にその場を去った。

そのまま家に帰り、自分の部屋に鍵をかけ、閉じこもる。

部屋の中で私はただ蹲っていた。

どれぐらいの時間が経ったのだろう？

暗くなつた部屋で、これらに対する不安が私を震わせた。恐怖がこみ上げる。

私の取り巻く全ての世界。その世界が壊れた時、私の中で「死」

という文字が浮かんできた。

手ごろな紐を捜し、柱にくくりつける。

踏み台を用意し、足を踏み出す。と同時に何かを踏んづけてしまった。

その時突然、私のコンポの電源が入る。

『OK！ラジオデイズ！』

丈さんの声が聞こえてきた。コンポに入れたままの海賊放送が流れる。

『さあ、今からの時間はみんな手を止める！！ そんなに考え込んで落ち込んでても意味が無いぞ！ 今からの3時間は全てを忘れて

“ くだら” するんだ！』

「 ああ……………」

涙がこぼれた。我慢しても我慢しても涙は止まらない。

私は感情を解放し、大声で泣いた。

このセリフは私のためだけに言ってくれたものではない、そんな事は良く知ってる。

でも、この人だけだった。

私にくだらしろと言ってくれるのは……

「 はい、後30秒で曲終わります」

あの時間の感動は忘れない、失いたくない。だから今、私はここに居る。

丈さんの近くに居れば安らげる。

彼は私にとってのラジオパーソナリティーで居てくれるから。

「 5秒前 4、3、2、1」

いつもの様に番組は滞りなく終了を迎えた。

その後、反省会をするべくスタッフルームに集まる。

今日の番組であった問題を話し合う。

私にとっては問題が無いと思われる箇所も丈さんにとっては気に入らないらしい。

それだけ彼にはこだわりがあるし、責任もある。

丈さんはいくつか父親である伝之助さんとやり取りした後、最後に私にとっては驚くべきことを話し出した。

「2週間後から金曜日担当を玲子さんにやってもらおうと思うんだけど」

「えっ!!」

「コーナーはそのままだし、他のスタッフには話を通してあるから、あとは君しだい」

「そんな……私が担当するなんて荷が重」

私がお断りしようとする百合音さんが遮るように話す。

「いつまでもADって訳にも行かないでしょ？ 私がアシスタントするから頑張りましょう」

百合音さんは丈さんの奥さんで元声優。

自分で担当した番組もあるし、アシスタントとしても業界で活躍していた。

彼女が居てくれると確かに心強い。

でも、そういう問題じゃない。

「あの……私はマイクの前に座ると声が……」

「知ってるよ。しかし……もう2年だ。そろそろ変わらないと……」

丈さんが何を考えているか良くわからない。

「この前の中間発表憶えてる？」

「はい」

「今まで聞いたこと無い新人が1位を取った……個人じゃなくて、仲間で勝ち取った1位だ。とうとうここにも新しい波が来たんだ。色々と変化する時期なんじゃないかな」

「それじゃあ、丈さんは宝条リンのせいで私に金曜日を譲ろうとし

「ているんですか!？」

「せい”じゃないよ。影響を受けたんだ。私だけが喋るんじゃないか
くて他の人が担当してもいいじゃないか」

「そんなの他のリスナーが納得しません!！」

「……君は『オールナイトブレイク』を担当したパーソナリティー
じゃないか。君しだいで状況も変わる」

「私は」

『このままがいい』……と言いかけて止めた。

皆の目が私に注がれる。私は外へ飛び出した。

結果は見えていた。喋れない私。落胆する皆。

また私は居場所を無くすのだろうか？ 涙が流れる。

丁度、運悪く私の近くに多記君達が通りかかった。

彼と目が合う。彼は2年前と変わらない純粹な目を向ける。

この子はどこまで私を追い詰めれば気がすむのだろう。

私はただ『このままがいい』と望んでいるだけなのに……

「……」

……戦わなくてはいけない。自分を守るため。

多記君……宝条リンをどうにかすればいいのだ。

宝条リンが負けたその時は、変わる事など出来ないと言って、

また元のADに戻してもらおう。

私は踵を返してラジオブースへと戻る。

欲しいものを手に入れるために……

第19話 「鳴かないカナリア」(前書き)

簡単な登場人物紹介を書いてみました。
必要なければ読み飛ばしてください。

<登場人物>

多記透たきとおる

高校2年。元ハガキ職人。

華富玲子の番組にハガキを出していたが、いつの間にかハガキを書くのをやめていた。

突然、ラジオ番組をやめた華富玲子のことが気になり、波乗澄音に協力する。

普段は少し冷めているけど、ラジオ(ハガキのネタ)の事になると熱くなってしまう。

ハガキ製作集団「宝条リン」を考え出した張本人。

ラジオを聞き始めたのは小さい頃、家族で自動車に乗っての旅行中、山中で転落事故を起こし両親が死亡。

救助が来るまでの間、車のラジオに励まされた事がきっかけ。

波乗澄音はのりすけ

多記透のクラスメイト。

自宅がラジオ局になって、家族が自分を置いてラジオ番組に熱中してしまい、独りになってしまう。

そんな自分の家族を取り戻したいとハガキ職人グランプリ1位を目指し、ハガキを書き続ける。

主人公に対してはハガキ職人の先生だと思っている。幼い面もあり、寂しがりや。

くどうかよ
工藤佳代

多記透とは同じ高校で2年生。宝条リンではお笑いネタ担当。

波乗澄音とは幼馴染。小さい頃、両親が離婚して関西方面から母親の祖父母のいるココへ転校してきた。

関西方面出身だけにお笑いに詳しい。

（理由はそれだけではなく、両親が離婚してしまって、父親とお笑い番組を見ていた思い出と、ずっと笑っていたい、不幸な自分を隠したいという気持ちから好きになった）

波乗家の事は知っていたが、家族を取り戻したいという波乗澄音に嫉妬し、積極的には手伝わなかった。

しかし、お笑いに強いという能力に目を付けた多記透の説得で「宝条リン」に参加する。

多記透のことが気になっている。

かわかみなおと
川上直人

宝条リンでは下ネタ担当。高校2年生。

主人公の古くからの友人。常に女の子の事を考えている。

ものすごく軽薄。ゆえに下ネタを扱えば天下一品。波乗に好意を持っている。

昔、多記琴和リンを取り合ったことがある。その為、多記のことは好きではない。

琴和リン（ことわりん）

宝条リンではイラストを担当。高校2年生（ただし、上記のメンバーとは学校は別）

多記の元彼女。人の話を聞かない。思いも付かない言動や行動で

多記達を困らせている。

時々、核心を付いた発言をするので油断が出来ない。川上に呼ばれ宝条リンに参加。

口癖は「お断リン！！」

華富玲子

元ラジオのパーソナリティー。

波乗澄音の父親、波乗丈に憧れてラジオの世界に入る。頑張って自分のラジオ番組を持ち一気に仕事も増える。

しかし、下積みの経験があまり無く売れたため、次々要求されることに対応できなくなり心を病む。

とうとうマイクを前にすると声が出なくなってしまう。

そんな時、波乗丈が「ラジオデイズ」を放送している事を知り、突然番組を降板し、単身波乗家に乗り込んで押しかけADとなる。

華富玲子にとって主人公は自分の番組に初めてハガキを送ってくれた相手であるが、波乗澄音に協力している主人公を敵対視している。

性格は真面目。だが、その真面目さゆえに間違った方向に進む事がある。

普段は温厚だが、主人達「宝条リン」に対してはムキになる。

波乗丈

波乗澄音の父親。通称ジョニー。

ラジオ番組「ラジオデイズ」のプロデューサー兼、放送作家兼、パーソナリティー。

ラジオ放送に情熱を持っている。

波乗百合音

波乗澄音の母親。番組のアシスタント。この人だけはラジオブー

スから出て食事を作る人。

昔は声優として活躍していた。おおらかで、真夜中で皆が集まっても気にしない。

波乗伝ノ助 はのりでんのおすけ

波乗澄音の祖父。「ラジオデイズ」ではディレクターを担当。

戦後の日本人の心をラジオで救ったと言われる伝説のラジオパーソナリティーらしい。

波乗琴音 はのりことね

波乗澄音の祖母。テクニカルディレクターとして音声や音楽の管理を担当。

井端真理 いばたまり

多記の保護者。母親の友人。少女漫画家。タバコを片手にお姫様が着るようなドレスを着て家にいる。

ぶっきら棒で言葉遣いもキツイが、親戚中をたらい回しにされていた多記を引き取った良い人。

ペンシル祭 さい……現サーファーキング

これまでのあらすじは次回にでも。

第19話 「鳴かないカナリア」

期末試験を終え（結果は聞くな）後は夏休みを待つのみとなった。そんな僕らに驚きのニュースが舞い込む。

玲子さんが「ラジオデイズ」金曜日担当になるという話だった。

今日、波乗丈から正式に発表された。

波乗が僕の顔を覗き込む。

「何だか多記君、華富さんがパーソナリティーをするって聞いて嬉しそう……」

「そ、そんなこと無いっ！！ 華富さんがパーソナリティーを勤めるって事は僕らのハガキが読まれにくくなるってことだからな」

「でも、□元緩んでるで」

「むぐっ……」

工藤はジト目で僕を見る。

「まあな。憧れの華富玲子のパースナリティー復活となれば嬉しいよなあ……マツチヨ石松さん」

「なっ！！ なんでそのペンネームを知ってる！ ……まさか、波乗っ！！」

「わ、私じゃないよぉ」

「オレだ」

川上がやたら胸を張って僕に答える。

「たかが、華富玲子のためにハガキ書く勉強したり、出待ちしたぐらい別に隠すことでもないだろ？」

「なんだか、お前の言動には何かしらの意図を感じる」

「そうか？」

そこへすかさず琴和が口を挟む。

「タツくんは玲子さんの声聞いてハアハア言ってるだけだもんね」

「同意を求めんなっ！！ 黙れっ、この直下型迷走娘！！」

「お断わりン！！ リンちゃん、黙らないもん！！ わ〜わ〜わ〜！！」

「小学生か！！」

こんなくだらない会話をしている間に時間は過ぎていった。

放送日、僕は少し早く波乗家へ来た。もちろん玲子さんの様子を伺うためだ。

波乗家の玄関にあるラジオブースはガラス張りで覗くことができる。

ブース内では波乗の母親、百合音さんと玲子さんがハガキの整理をしていた。

しばらくその姿に見入っていると、玲子さんが気付いて僕と目があつた。

すると彼女は百合音さんに何か話しかけ席を立つとラジオブースから出てきた。

「何？ 敵情視察ってわけ？」

僕の目の前に立った玲子さんは敵意むき出しで話しかけてきた。

「そんなつもりじゃあないです」

「言っておくけど……貴方達のハガキを読む予定はないけど」

「でしょうね」

「……余裕ぶってるつもり？」

今までは波乗家で会うとすぐに喧嘩口調になって、まともな話が出来なかった。

でも、今は違う。落ち着こう。いいチャンスだ。

「違います。あの……こんなこと言ったら他のメンバーに怒られますけど、ハガキが読まれるかどうかなんて二の次です」

「！？」

「僕……楽しみにしてました『オールナイトブレイク』が終わってからずっと」

「えっ……」

この時の僕はただ、華富玲子がラジオに復帰するという事柄に浮かれていた。

ただ、この気持ちを伝えることだけが一番の方法だと……疑いもなく思っていた。

「もともと波乗を手伝うようになったのは玲子さんのことが知りたかったからだし」

「っ……」

「あっ、今でもラジオを録音したMDを持ってるんですよ!! 最近、また聴いてます」

「……て」

「初めての放送の時憶えてますか? あの時、玲子さんは」

「……めて」

そこでようやく玲子さんが何か言っていることに気が付いた。

「えっ? どうしました? 玲子さん」

「……やめて」

「何を?」

玲子さんは僕を睨みつけ、叫ぶ。

「もうそんな話はやめてって言ってるの!!」

「!??」

「私のことが知りたいからココへ来た? やめて、どんな幻想もっているか知らないけど……そんなのに答えられるわけない!!」

「そんなつもりは……ただ僕は玲子さんの放送を楽しみにしてるっ
て」

「私の気持ちを無視して何を期待してたの?」

「ぼ、僕は……」

本当に悪気がなかったのだということ伝えたかった。

でも、玲子さんの潤んだ瞳を見るとそれ以上何もいえなくなった。

「ねえ? 私を追い詰めて楽しい?」

「っ」

玲子さんは再びブースへ戻っていく。
何も出来ずにただ見送るしかなかった。

確かに過度な期待をしすぎたかもしれない。

僕がしてきたことが彼女にとっては追い詰める結果になっていた
なんて気付かなかった。

波乗の部屋へ戻り、いつものように皆とハガキを書く。

でも、皆の話は上の空。気持ちをまとめられないまま放送が始まる。

『百合音・玲子のラジオデイズ!!』

掛け声と共に音楽が流れ出す。

ある程度流れると音楽はフェードアウトしていった。

『皆さんこんばんは、今日から金曜日のこの時間はジョニーに代
わって私達が担当することになりました』

問題はココからだ。隣にいた工藤が波乗に話しかける。

「この声って波乗のお母さんの声やんなあ。ええ声してるなあ」

「うん、お母さん昔、声優やってたから」

「二人とも悪い、少し黙っててくれないか？」

「何や、多記。えらい緊張しとるやんか。愛しの玲子さんの声がそ
んなに聞きたいんか？」

「……」

今は工藤の挑発に乗っている余裕はない。僕はラジオに耳を傾け
る。

『私は波乗百合音です。いつもジョニーさんのアシスタントやって
たから皆知ってるよね？ とか図々しい事言ってみたり。では、私
と共に番組を進めてくれるもう一人の女の子を紹介しま〜す。じゃ
あ自己紹介どうぞ!!』

『……』

玲子さんに振られたはずなのに彼女は何も答えない。

僕の中でどんどん不安が広がっていく。

波乗は「故障かな？」とかいってコンポを叩いている。

『あらあら、玲子さんちよつと恥ずかしがってるみたですね、か
くわくわくいっくってことで私が代わりに紹介しますね……』

百合音さんは玲子さんの声が出ないのを分かるや否やフォローを
入れた。

「……やっぱりあの噂は本当だったのか」

川上の呟きが僕の耳に入る。

「何の話だ!？」

「なんだお前知らないの？ ホントに華富玲子のファンか？ 彼女
が業界からいなくなった当時、週刊誌に載ってたんだけど……スト
レスでマイクの前に立つと声が出なくなるらしいぜ」

「!?!」

僕は立ち上がる。波乗が僕に話しかけてきた。

「多記君、どこ行くの?」

「ちよつと……」

「?」

「トイレに行ってくる」

波乗の部屋を出た僕はブースへ向かう。

しかし、途中で立ち止まる。ふと考えてしまったのだ。

『僕が行ったところで何が出来る?』

おそらく彼女を追い詰めるだけだろう。

どうしたらいい?

何かしなきゃという気持ちを何も出来ないじゃないかという気持
ちが交錯する。

僕はその場から動けなくなった。

第20話 「深呼吸で行く」

「まず、聞かせてくれないか？ 君はどうしてラジオのパーソナリティになりたかったんだい？」

「……まるで犯罪者と接するネゴシエーターみたいですね」

「君は犯罪者だろ？ パーソナリティとしてやってはならない罪を犯した」

「そうかもしれませんが……」

とりあえず番組は音楽を流しているので私が話しても問題無い。

イヤホンからは文さんの声が聞こえる。

「君には伝えたいことがあるかい？」

「……わかりません」

本当に分からない。

前はあったような気がする。

「私にはある。いつも自分の思いを完全に伝えたいと思っている」

「……」

「それとは反対に本当に伝えたいことは言葉に出したくは無いつて気持ちもある」

「……」

「でも、私はパーソナリティだ。それをあえて言葉にする仕事」

「私は」

「そして、君も……パーソナリティなんだろ？」

「……」

「話さなければ何も始まらない」

『言葉を繋ぐことができないパーソナリティは存在する価値が無い』

そう言われた気がした。

そつだよね……私は席を立った。

しかし、百合音さんが私の腕をつかむ。

「ここを出たら、貴方はここから居なくなるんでしょ？」

「……………」
私に向ける表情は笑顔だけど、腕をつかむ手は力強い。

「行かせないし、逃がさない」

「……………」

私は動けなくなってしまった。

そんな時、ドアが開く音がして振り向くと丈さんがブースに入ってきた。

とつとつ追い出されるのかと覚悟した。

私の前に立った丈さんは一枚の紙を差し出す。

「今日はFAXを募集して無いのだが、何故か送られてきてね……………」
私は紙を受取る。

紙には書かれた文字は見覚えがあり、確実に私の隙間に入り込んだ

『僕も独りです。貴方だけじゃない。だから声をください』

「……………」

私の中で何かがはじける。

初めてメインで番組を任されたあの日。

そりゃ、ちつぽけな地方のラジオ局だったけど……………毎週が楽しくて仕方なかった。

『私は自分の部屋で独り居る人のために送ります』

見つけた。

私の伝えたいこと……………

今にも泣き出しそうな私に丈さんは声をかけた。

「差出人は誰か知らないが……………君のことを本当に好きなようだね」

「……………はい。こんな事するのは一人しかいませんから……………」

私は再び席に戻る。

百合音さんと向き合い、言葉を搾り出す。

「百合音さん。曲終わったら私に喋らせてください」
「わかった、好きなことを話さない」

曲が終わりに近づく。私は大きく息を吸い込んだ。
自分に欠けていたものは幾つもあった。
それに対して焦りも感じていた。

丈さんから曲が終わる合図があり、私は吸い込んだ空気をゆっくり吐く。

目の前にマイクもあるし、手元には番組進行表やハガキがある。
何をどうしたって今現在、私はラジオパーソナリティなんだ。
焦ってもしょうがない。

だから私は深呼吸で行く。

『ラジオを聞いている場所はそれぞれ。車で、仕事場で、友達の家
で、もしかしたら恋人の家でこの放送を聞いている人がいるかも知れ
ません……』

ファクスを送り、コンビニを出るとその場にしゃがみこんだ。

これが華富さんをさらに追い詰めるかもしれない。

でも……考えて、考えて、出た結論が結局これだった。

玲子さんに一番伝えたかったこと……

『私は自分の部屋で独り居る人のために送ります』と書いてくれ
た、あの時の答え。

自分勝手だよな。わかってるそんな事。

しばらく、興奮と後悔でしゃがんでいた。

不意に僕の視界へ影がかかる。

「やっぱり貴方は危険な存在ですね」

「ん？ アンタは……ペンシル祭」

彼女は長い髪をかきあげ僕を見下ろしていた。
その目からは何の感情も読み取れない。

「玲子さんにまで影響を及ぼすなんて」

「それじゃあ、玲子さんは……」

彼女は表情を変えず、僕の質問には答えない。

それが十分な答えなんだろう。玲子さんの声は戻ったのだ。

僕がホツとしたのもつかの間、ペンシル祭は話を続けた。

「私、今まで投稿数をわざと制限してました」

「……でしょうね。ペンシル祭さんのネタを聞けば分かります。あきらかにMVP狙いのネタだってね」

「……さすがと言えがいいのでしょうか？ 貴方は考えてた以上の人です。だったら話は早い。これからは読まれることを前提としてハガキを書きます」

「なりふり構わず僕達を倒しに来ると？」

「ええ。もともと私が力を制限してきたのは、前に本気を出したら1コーナーすべてが自分のハガキになった事があったからです」

「……」

普通の番組ではあり得ない。

ただ、噂では波乗丈はネタを選ぶ時に名前を隠すらしいのであり得ない話ではない。

「そんなことはもうどうでもいい。私は少なくとも……人生において負けたと感じたことは一度もなかった」

「……負け？」

「私は勝ち続けなければいけないんです」

僕を見る眼差しはあくまでも上から見下ろすものだった。

自分の勝利を疑わない余裕を感じる。

こういうのを王者の風格というのだろうか？

「僕だって負けませんよ。勝たせたい人がいるんでね」

「現実は今みたいに上手くいくとは限りませんよ」
彼女はそれ以上何もいわず、僕の横を通り過ぎる。
口元がうつすら笑っていたように思えた。
一人取り残された僕はなぜか震えていた。これが武者震いってやつか。

今は悩んでる暇は無い。サーファーキングを獲得するという目標に向かっていくしかない。

気合十分で波乗家へ向かった僕だったけど、川上の一言で肩透かしを食らった。

「皆で旅行に行こう!!」

「賛成っ!!」

どうしてお前等、勝手に決めてんだよ。

「玲子さん、お疲れ様でした」

「アナタは」

「我々も新番組は認めることにしましたよ」

「………そうですか。ありがとうございます」

「ジョニーが決めたことですから。私達はそれに従うのみです」

「………」

「ですが………幾つかなの変化に対しては許容範囲を超えています」

「え？」

「………宝条リンです」

「!?!」

第21話 「心情waver」（前書き）

<今までのあらすじ>

学校を休んだ波乗澄音はのりすずみねの家へ学校のプリントを届けるために行く多記透たきとおる。

そこで見たものは木造二階建ての家がラジオ局となつた波乗家だった。

彼女の兄は家出、他の家族はラジオ放送に夢中で誰も放送施設から出てこない。

澄音自身なんとか頑張るが家族は誰も相手にしてくれない。

ただ一つ家族と会う方法はラジオ番組「ラジオデイズ」で行われるハガキ職人グランプリで優勝してサーファークィングの称号を得た後、副賞であるラジオブースご招待権を獲得する事。

早速、澄音はハガキを書くが、一向にハガキは番組で読まれない。能天気な澄音もさすがに落ち込んで学校も休みがちになった。

そんな時、多記透が来た。彼が元ハガキ職人と知つた澄音は協力してくれと頼む。

が、多記はあまり乗り気ではない。

しかし、波乗家で多記は華富玲子と再会する。その事で澄音に協力することを約束する。

多記の協力で学校へ行く余裕ができた澄音は学校へ行くようになる。

少しずつハガキは読まれたしたが、ネタハガキのレベルの高さに多記は愕然とする。

自分がハガキ職人をしていたときに憧れていた人たちがシノギを

削っている世界だった。

このままではサーファードキングになる事は無理と悟り、他の仲間を集めハガキ作成集団「宝条リン」を作る事を提案する。そこで見つけたのが波乗澄音の友達、工藤佳代くどうかよだった。

彼女はもともと関西出身でお笑いにも詳しい。

だが、家族というコンプレックスからなかなか協力しようとしてくれない。

そこで多記は家族を意識しすぎる佳代に自分の生い立ちを話す。

多記に比べ自分の悩みは両親が生きてこそその悩みだった事に気付く。

多記を信用し「宝条リン」に参加する事にする。

成実を入れたことで順調に採用ハガキを増やす「宝条リン」。

ある程度読まれるようにはなったが、頭打ちになる。その原因は下ネタに弱いことだった。

そんな時、多記は友人の川上直人を思い出す。

直人の下ネタは他の追隨を許さない、強力なテコ入れになる。

しかし、直人とは琴和リンとの事でわだかまりがあり、会うこともままならない。

それでも多記は直人に頼んでみた。

すると直人はハガキを書く条件に波乗澄音と自分が付き合えるように協力しろと提示する。

成実は反対するが、多記の判断で条件を了承する。

そして4人揃った「宝条リン」は他のハガキ職人と渡り合えるようになり快進撃を続ける。

しかし、波乗だけはなかなかハガキが読まれない。悩む波乗。心配するほかのメンバー。

そこへ直人の提案から波乗のサポート役としてイラストの上手な

琴和リンを呼ぶことにする。

波乗も最初は意固地になって拒否するが、多記の説得で琴和リンとコンビを組むことに納得する。

徐々にではあるが五人にもチームワークが生まれ、一体感が出てきた。

ハガキ職人グランプリ、中間発表。見事、一位を獲得する。喜ぶ五人。

気の緩んだ五人は一位を取った記念に海へ遊びに行く。

第21話 「心情waver」

心地よい揺れでウトウトしていた僕は誰かの声で目が覚めた。

「多記君、食べる？」

目を開け正面を見ると、波乗がお菓子を差し出している。

僕がぼんやりしながら受け取るうとすると横から手が伸びた。

「あっ、川上」

「澄音ちゃん、ありがと」

「それは僕がもらったお菓……」

「そんなに澄音のお菓子が欲しいんか？」

僕の抗議に横に座っている工藤からツッコミが入る。

「え？ いや、そういうわけじゃあ……」

僕は誤魔化すように窓を見る。

景色がどんどん流れていく。

「外はいい眺めだなあ」

「何誤魔化してるん？ ……まあ、ええわ。これでも食べて」

工藤の差し出したサンドイッチを口にする。

僕達は今電車に乗っていた。

川上の提案で中間発表1位記念、一泊二日の旅行へ行くことになったのだ。

「残念だね、琴和さん来れなくて……」

「しょうがないさ、直子さんの手伝いなんだから」

リンはこの旅行には参加していない。

直子さんの仕事がお盆休み進行のため、手伝う約束をしていたのだ。

「でも、琴和がこういう計画に参加せえへんなんておかしいなあ」

「直子さんはリンにとって神様みたいなものだからな。絶対服従」

「やっぱり、漫画家になりたいんかなあ」

波乗が僕の服の袖を引っ張り、もじもじしながら僕に尋ねる。

「あの……琴和さんはよく多記君の家へ手伝いに来るの？」

「そうだな。前は入り浸りの時期があった」

「そうか、その時二人は色々……あつたんやな」

工藤は何度も頷き、波乗は下を向いた。

「……お前達、リンに何を聞いた」

「さあ、なんやろな？」

「波乗答える」

波乗は顔を真っ赤にしてボソボソと何かいつている。僕は聞き耳を立てた。

「えっ！？ 言えないよ……そんなこと。恥ずかしい……」

「なるほど。多記はリンとそんなことをしてたわけか」

「川上、それ以上口を開くな！！」

電車は揺れながら僕達を運んでくれる。

目的地に到着した僕達はさっそく宿泊場所へ向かった。

「この旅館が俺達の宿泊場所です。もちろん男女別々に部屋は予約してあるから」

電車の切符から旅館の手配まで全て川上が用意した。

こういうことに関しては気が利く男である。

「じゃあ、とりあえずここで別れて海岸で会おう」

「うん、それじゃあ」

僕達はそれぞれの部屋に入った。

「川上、ホントにこういうことは手回しがいいな」

「当たり前だ！！ これもすべて澄音ちゃんをゲットするため」

「……」

なんで僕はこの言葉に何も返せないのだろうか？

そんな僕の考えをよそに川上は真剣な面持ちで話し続ける。

「多記、澄音ちゃんをお前に渡す気はないからな」

「何言ってるんだ。僕は別に……」

「だったらいいんだ。お前はただ俺と澄音ちゃんとの仲を取り持てばいいんだから」
「……………そうだな」

海水浴場で待っていると波乗と工藤が水着姿で現れた。

「多記、変なところ見るなや!!」

「見てねえよ!!」

「澄音ちゃんは何着ても似合う!! 最高!!」

波乗は川上に褒められ、恥ずかしいのか少しうつむく。

「……………ありがとう、川上さん……………あの……………多記君は……………どう?」

波乗は小花柄のスカート付きワンピースだった。

まあ、なんとも波乗らしくて無難な感じだ。

「似合ってるぞ」

「……………ありがとう」

後で誰かが僕の腕を引っ張る。

僕が振り向くと工藤が恥ずかしそうにしていた。

「なんだよ」

「私のはどうや?」

「え?」

「その……………み、水着」

工藤を改めてみる。

デニムパンツに青と白のストライプのセパレート水着。

活発そうで悪くない。

「いいんじゃないの?」

「それだけ?」

「は? うん。それだけだが……………」

「はあ……………」

なんだか工藤がっかりしたように思えたけど気のせいかな?

「澄音ちゃん、泳ぎに行こ!!」

大きな声に振り向くと、波乗は川上に手を引かれ海へ入っていった。

僕はとりあえずその場に座る。工藤も僕に合わせて隣に座った。

「荷物は僕が見てるから工藤は遊びに行つていいぞ」

「ええわ。多記があるんやったらここにおる」

「なんだそりゃ？」

「日焼けするぞ」

「ええよ。どこにいても同じやし」

「はあ……」

しばらく、楽しそうに遊ぶ川上と波乗を見ていると工藤がポツリと言った。

「楽しそうやな」

「そうだな」

「……あの二人は何やかんや言つても両親がすぐそばにおる。頼りになる人がそばにおるんや……だからあんなに楽しそうに出来るのかもしれないな……私達とあの二人は違う」

「……どうしたんだ急に」

「でも、一番偉いのはアンタやな。両親死んだのにこんなにも元気に生きとる」

「別に僕はもうそんな事気にして無い。家に帰れば直子さんが居るし、学校へ行けば波乗や工藤、川上がいるじゃないか」

僕は工藤を励まそうとしたのだが、彼女は寂しそうな笑顔を僕に向けた。

「なんだか気まずい雰囲気だ。」

「やっぱり澄音の名前が一番初めに出るんや……」

「順番なんてどうでも言いたいと思うけど」

「女の子は……うっん、違うな。私はすぐく気になる。その順番……」

「……」

「えっ……」

「さあ、私達も泳ごか」

「あ、ああ……」

「あつ、そや、そや。夜さあ、女の子の部屋で遊ばへん？ 川上も連れて来てな」

「うん、そうしよ」

僕はその時この気まずい雰囲気但至少でも良くなればと思い気安く返事をした。

そして夜。

僕たちは昼間の約束どおり、女の子たちの部屋へ向かうことにした。

「おい、川上行くぞ」

「おお。先に行ってくれないか？ 色々と準備があるし」

川上はカバンの中身をあさって何かを探してる。

準備のいい川上のことだから遊び道具でも探しているんだろう。

「じゃあ先に行ってるから」

「そうそう、多記。一階の売店へ行つてジュースを買っていってくれ頼む」

「わかった」

僕は部屋を出て一階へ降りた。（僕達が泊まっているのは三階）特に急ぐ必要もないとのんびり売店でジュースを買つと波乗たちの部屋へ向かった。

部屋の前に到着しノックする。

するとドア越しに返事がしたのでドアを開けて部屋へ入ることにした。

「あつ、いらつしやい」

すると室内には工藤の姿しか見えない。

「あれ、波乗は？」

「家の人へ電話かけに行ってる」

「ったくしょうがないなあ。たった一泊二日だろ」

僕はとりあえず座ることにした。

「ふう……」

「……」

しかし、何時までたっても波乗は帰ってこない。

昼間のこともあって工藤と二人きりの部屋はどうも落ち着かない。

僕がそわそわしていると工藤が話しかけてきた。

「どうしたん？ 何か落ち着き無いけど」

「えっ！？ いや、二人とも遅いなあ〜とか思っちゃって……」

「……そう」

「うん……」

会話が続かない。こんなこと学校でも波乗の家でもなかった。

珍しく僕は緊張している。

すると沈黙を破るように工藤が呟くように話し出した。

「あんな。本当はな……澄音……今、あんた達の部屋に行っとる」

「はあ！？」

「多分、川上と二人きりやと思う」

「えええっ！？」

波乗が危ない！ 直感的にそう思う。

僕は立ち上がった。合わせて工藤も立ち上がる。

「なあ、そんなに澄音が気になる？」

「気になるだろ、相手はあの川上だぞ！！」

僕の返答に工藤は進路をふさぐように手を広げた。

表情は真剣で僕をにらみつけていた。

「工藤、なんの真似だ」

「多記は川上に澄音の事、とられたくないんや？ いつから澄音は

アンタのモノになったん？」

「……波乗は波乗だ。僕のものじゃない」

「それやったらええやん。澄音だつて子供やないんやから嫌やったら戻ってくるやろ」

「だ、だけど……」

いつもにない工藤の冷たい態度に僕は面食らっていた。

確かに工藤の言つとおり波乗の自由だ。

だけど……でも……

さらに僕を悩ませるような工藤の発言は続く。

「それとも……私とここにおるの嫌？」

「!？」

「もし、川上のところへ行つたのが澄音やなくて私でも同じ」と言つてくれた？」

「く、工藤。お前何言つて」

「何言つてるかわからへんの？ それやったら分かるように言おか」

「っ……」

工藤はゆっくりと僕に近づいてきた。

なんだか妙な迫力に、よく分からず僕は後ずさりする。

「なんで逃げるの？」

「いや、なんとなく……」

この雰囲気能耐え切れなくなった僕は視線をそらした。

と同時に工藤が僕の視線の向いた方向へ移動する。

すると一瞬目が合ってしまう。

彼女の瞳からは今にも溢れそうになるぐらい潤んでいた。

工藤が泣いている？

「なあ、逃げやんといて。悲しくなるやん……」

「……」

僕はいつの間にか壁際に追い詰められていた。

そつと工藤の手が僕の肩に触れる。

さらに自然な流れのように彼女は僕に身を寄せた。

胸全体に工藤のわずかな重みを感じられ、香水のほのかな甘い匂いが僕を包んだ。

「く、工藤!？」

僕はすっかり混乱してしまい、動きが止まってしまった。

そして工藤は少しだけ顔を上げ、ささやくように僕に言った。

「私……多記のこと好きや」

第22話 「遠い浜辺」

オレはタイミングを計っていた。

それは波乗澄音をいつ押し倒すか。

「佳代ちゃんと多記君遅いね」

「そうだね……」

彼女は足を横にして座っている。前から押せば軽く倒れそうだが、いつもならもうとっくに押し倒しているところだけど……彼女は調子が狂う。

何故か慎重になってるオレがいた。

そんな気持ちを払拭すべく本題を切り出した。

「実はさ……今、多記は佳代の部屋へ言ってる」

「え？ どうしてですか？」

「分かるだろ？」

「え……」

それからしばらく無言の状態が続いた。

明らかに彼女は落ち着きがなくなっている。

もう待っている時間もない。

多記がこっちへ来る可能性もある。

オレは少々強引と思えるぐらい、一気に彼女へ近づいた。

すぐに彼女は怯えるように後へ下がる。

「どうしたの川上君！？ こんなこと止めようよ」

「止めない。だったらなんで多記がいないと分かったのにすぐに帰らなかったの？」

「えっ!？」

「部屋に帰るのが怖かったんだろ？」

「!？ ちが」

「違うない」

澄音は怖がっているのか瞳は潤んでいた。

これ以上言うことは彼女にとって酷な事に違いない。

でも、そこを突いてこそオレにもチャンスが巡って来る。

「今頃、多記は工藤とやることやってるさ」

「!!!」

一瞬の隙を突いてオレは彼女を押し倒した。

両手を押さえる。彼女は目を瞑り、横を向いて必死に抵抗した。

オレは唇を重ねようと顔を近づける。

「嫌っ 止め」

「止めない」

「嫌っ! ……嫌っ!!! ……くん……」

「っ!?!」

その時、オレは見てしまった。

彼女の口がかすかに動き、その動きは確かに『多記君』と言っていた。

「 なんてだ?」

なんで多記なんだよ。

アイツとオレはどう違うっていうんだ?

そこでようやく理解した。

調子が狂ってるのも慎重になったのもすべて多記のせいだった。

アイツが絡むとオレはいつも必要以上に意識する。

数年前

『なあ、頼むよ。紹介してくれるだけでいいからさ』

多記からこう言われた時、オレは動揺した。

『だって、川上と彼女は友達なんだろ?』

「友達なんだろ?」って念を押してくる。

オレは頷くしかなかった。

今思えば何である時言わなかったんだろう。

『オレは彼女のことを好きだ』って……

今は彼女のことはもうなんとも思っていない。

ただ……心に残っているのは……言わなかったことに対する後悔だけ。

多記を見るごとに臆病になってた自分を思い出す。

今ならこうして押し倒してどうにかできるって言うのに……

一瞬の気の緩みが、澄音の反撃を生んでしまった。

彼女の両手がオレの体を一気に押しつける。

「……！」

オレは大げさに横に倒れこんだ。

彼女はそのまま部屋を逃げるように出て行った。

「くっ……」

また多記に邪魔をされた。

オレは倒れたまま動けない。

突然の告白に驚いた僕は工藤の体を支えきれずに倒れてしまった。

彼女が上になる格好で間近に向かい合う。

彼女の息づかいを感じる。

それだけじゃない、工藤から良い匂いがして僕の判断力を鈍らせた。

「ぼ、僕は……」

「今夜だけでええから……私と一緒に居てくれへん？」

「……」

今、心の中で『うん』と言ってしまった。

心のたがが緩む。自制出来ない。

おかしい。絶対におかしい。

こんなの僕じゃない。呼吸がだんだん荒くなっていく。

僕は……興奮してるのか？

「なあ、多記い……」

なんだか頭の中で靄がかかったように思考が不鮮明になってくる。

まあ、良いか。

すると自然に僕から変な言葉が口をついた。

「僕も男だからこんな状況になった以上、後には引かない」

「えっ！？ ……うん……うん」

工藤を寝かせて今度は僕が上になる。

上から見る彼女の表情はほんのり上気していて艶っぽい。

不覚にも工藤を初めて女性と認識した瞬間だった。

彼女は目を瞑り、事の始まりを期待して待っているようだ。

かすかに工藤は震えている。

僕は彼女に顔を近づけた。

ブルブルルッ

「！？」

突然、部屋に備え付けてあった電話が鳴った。

我に帰り、電話のほうを見ると工藤は目を開けて僕に言った。

「……放っておいたらええ」

「そういうわけにもいかないだろ？」

上にいる分、僕のほうがすぐに電話に出ることが出来た。

受話器をとると男性の声が聞こえた。

「フロントですが、多記透様でございますか？」

「えっ！？ はい、僕ですが……」

どうしてこの部屋へ僕宛の電話がかかってくるんだ？

「先ほどお連れ様から電話するように言われたものですか」

「お連れ様？」

「はい。女性の方でしたが……お心当たりはありませんか？」
「……」

頭に浮かんだのは……小柄でツインテール。

僕に対して妙に丁寧な言葉使ったり、すぐに顔を真っ赤にする女の子……波乗だった。

「……ありがとうございます。そう言えば電話するように頼んであったんですよ。わざわざありがとうございます」

僕はフロントにというか波乗に礼を言った。

受話器を置き振り返った僕に工藤が不安そうな視線を向ける。

「誰？」

「フロントからだった」

「そう……」

「僕、もう行くよ」

「ちょっと待って!!」

「待てないよ」

立ち上がり、帰ろうとした僕に工藤が大声で言う。

「やっぱり、多記は澄音のことが好きなんやろ!!」

すっかり僕は冷めた気持ちになっていて、工藤の挑発も気にならなかった。

「今はそんなこと言ってる場合じゃないだろ？」

「多記……」

「それじゃあ、おやすみ」

「多記いい!!」

僕はドアを開け部屋を出た。

「私は本気なのに……」

僕は自分の部屋に戻ろうかと思ったけど止めた。

何となく川上に悪い気がしたのだ。

で、結局こうやって外に出て海岸をブラブラしている。

あのまま電話がかかってこなかったらどうなっていたのだろうか？

勢いって怖いなあ……と思ったりした。

まあ、勢いのせいにしてる僕も僕だけ……

しばらく歩いていると前方に小さな人影が砂浜に座っているのを見つけた。

期待してたわけじゃないといえば嘘になるが、急いで人影に近づ

く。
影形がハッキリすると……やはり波乗だった。

「おい、波乗」

「近づかないで!!」

「ん？」

「……今は男の人には近づいて欲しくないんです」

「どうした？ ……まさか、川上に何かされたのか!!」

波乗は首を横に振る。

「大丈夫、何とか逃げたから」

「そうか。良かった……」

「良くないよ!!」

「え？」

立ち上がった波乗はこつちを睨む。その瞳は少し赤く腫れていた。

「なんで部屋に戻って来てくれなかったの？」

「それは……」

説明するには工藤とこのことを話さなきゃいけないのだが、余計な誤解を与えるような気がした。

僕が答えられないでいると波乗は話を続けた。

「多記君の名前……呼んだのに来てくれなかった……」

「そんな無茶言っつなよ。僕は正義の味方でもなんでもないんだから」

「わかってる。わかってるけど……怖かった……」

波乗が近づいてくる。

その進度にあわせて僕は後退した。

「どうしたの？」

「だってお前『近づくな』って言っただろ？」

「……………」

「それに僕も今は近づいて欲しくないんだ」

「佳代ちゃんとかあった？」

痛いところを突かれた僕は口ごもる。

「べ…………別に…………な、何もないけど」

明らかに何かあったような僕の受け応えに波乗は黙ってしまった。僕は何か言葉を探そうと必死になった。

そして思いついた言葉は

「電話ありがとな」

すると波乗は俯いた。言葉の選択を誤ったらしい。

「止めて…………今、そのことで自棄になってたんだから……………」

「……………」

「佳代ちゃんと多記君がどうなっても、関係ないことなのに…………邪魔しちゃって……………」

「邪魔じゃない!! お陰で助かった」

僕の言葉を聞いた波乗は俯いていた顔をすごい勢いで上げ、僕を見た。

「やっぱり、佳代ちゃんとかあったんだ!!」

「何もない! なりそうになっただけだ!」

「それでも駄目です!」

「うつ…………でも、あれだぞ、あんな状況になったら大抵の男はだなあ……………」

「言い訳ですつ!」

「だって、向こうから迫って……………」

「責任転嫁だよ!!」

「……ごめん」

なぜ僕が波乗に謝らなくちゃいけないんだよ。しかし、自然に謝ってしまった。彼女に対して後ろ暗い気持ちがあるからなのか？

謝った僕を見て波乗は顔をそらし、横を向いた。

「……なんで私、多記君を責めてるんだろ」

「波乗……」

「皆と仲良くしたいだけなのに……」

「……」

「ハガキ書いて騒いで楽しく過ごしたいのに……どうしてこうなったの？」

なんとなく波乗の気持ちは分かった。

でも、なぜかそれを聞き流すことはできなかった。

「波乗、それは違うぞ」

「え？」

自分でも良く分からないうちに波乗へ反論していた。

「すぐ波乗の言葉が綺麗事に思えたからだ。」

「いつまでも同じままというわけにはいかない。だから、波乗だって家族を取り戻すべく頑張ってるんだろ？」

「……」

「アイツ等だつて抱えてる気持ちをそのままにしておけなかったんだろ？……人はいつか決断しなくちゃいけない」

反論した僕の言葉も十分綺麗事だ。自分でも嫌になる。

「だから明日からまたハガキを頑張ろう。最終発表がある日まで」

「……うん」

僕は何だかんだ言って結論を先送りにしただけなのかもしれない。その後、僕達はそれぞれの部屋へと帰った。部屋に帰ると川上はすでに寝てた。

次の日。帰りの電車の中ではもちろん無言だった。

傍目からは旅行帰りの疲れた4人組にしか見えないけど、実情はそんな理由で話さないわけじゃない。

気まずさだけが残った旅行だった。

さらに翌日、川上と工藤は波乗の家に来ることはなくなった。

第23話 「逃亡者」

「ふう、何とか撒いたみたいだな……それにしてもしつこい奴だ」
僕は波乗家の玄関前で一息つく。

さつきまである人物に追われていたのだが、何度も迂回して逃げおおせたわけだ。

玄関を開け、ラジオブース前を通る。

相変わらず波乗丈ことジョニーはせわしなく動き、夜の番組に向けて準備をしていた。

それを横目に波乗の部屋へ行く。ドアを開けると室内には波乗とリンがいた。

二人は一瞬、こつちを見たけど入ってきたのが僕だと分かるとため息をつく。

「今日も来てないのか……」

「……うん。多記君も遅かったね」

「ああ、ちよつとした奴に追われてな……」

「誰？ 怪しい人？」

波乗が不安そうな表情を見せる。

基本的に独りであることが多い彼女にとっては不安に違いない。だから、少し説明してやることにした。

「いや、親戚だ」

「親戚？」

「正確に言つと『直子さんの親戚』だ」

「もし、この家へノートパソコンを持った変な奴が現れても絶対に入れないな」

「うん」

僕らの話に得意げな顔をしてリンが口を挟む。

「直子先生の親戚って……リンちゃん知ってる…… えっとね、う」

「んと、た」

「言うなっ!! 名前も聞きたくない」

「お断りリンっ!! っ て んぐっ」

リンがあんまりうるさいので口を塞いでやった。

リンが落ち着くと僕達はハガキを書き始める。

二人がいなくなって二週間が経つ。

これだけ時間が経てば、アイツ等が書いたハガキのストックはとっくに無くなっている。

で、宝条リンの状態はといえば……以前の水準をかるうじて保っていた。

それは僕が二人の分のカバーをしているからだ。

この数ヶ月間、ただ過ごしてきたわけじゃない。

自分にはないものを二人のネタハガキを読んで探していたのだ。

だから、二人の書くネタの傾向はすでに把握している。

あとはそれを真似て書けばいい。場当たりの方法だが今は仕方ない。

しかし、長期的に見ればいずれかは破綻するだろう。

それに加えペンシル祭の読まれる量が爆発的に上がってきた。

今や各コーナーで読まれるハガキは宝条リンとペンシル祭の二強に、気まぐれサーファーがかるうじてついてくるといった展開になっている。

「リンちゃん、つまんなーい!!」

「うるさいぞ!! リン」

こうやってリンが言い出すのは毎度のことなので僕はとりあえず突っ込んだ。

だが、今日のリンは一味違い、不満を爆発させた。

「つまんない!! つまんない!! つまんな~~~~~」

「~~~~いっ!!!!」

「なんなんだよ、お前は!!」

さすがに慣れているとはいえ僕は腹を立てた。
すると、リンは急に静かになり俯いた。

「リンちゃん、皆がいらないとつまんない……」

「……」

僕と波乗は黙ったまま答えることが出来ない。

「ねー、二人を迎えにいこうよ」

「それはできない……」

「……琴和さん、ごめんなさい」

「何で？ リンちゃん、わかんない」

「……」

リンは僕に近づき顔をじっと見る。

僕はまともに目を合わせる事が出来ずに顔を逸らした。

するとリンは大げさにため息をつく腕組みをした。

「あゝあ。また、恋愛沙汰か……リンちゃん、つまんない」

「!!!!」

バレてる?!

こいつの直感は馬鹿に出来ない。

明らかに失望した表情を見せてリンは立ち上がった。

「おい、どこへ行くんだよ」

「……リンちゃん、帰る」

「待てよ、話を聞けよ」

僕はリンの腕をつかもうと手を伸ばすが、あっさり彼女にかわされる。
れる。

リンの僕を見つめる瞳がもの凄く冷たい。

何も受け付けないような印象を受けた。

「お断リン。久しぶりにタツくんが面白いことやってるなあ〜っ
て思ったけど、結局はこんなもんだよね〜」

文字にしてみればいつも通りだが、声のトーンが明らかに違う。

こんなリンを見たのは二度目だった。

一度目は……いつだった？

「リン……」

「くだらない恋愛したけりや勝手にやっててね。それじゃあ」

捨てゼリフを残し、リンはドアを開け出て行く。誰も止められない。

あつ。あの表情は……思い出した。

初めて見たのは……別れたときだ。

こうしてリンもいなくなった。

静かな部屋で僕と波乗は固まっていた。

しばらくして、波乗が僕に話しかける。

「琴和さん、なんだかいつもと性格が違ってたような……」

「アイツはテンション高いときと低いときの差が激しいだけだ」

「付き合ってたから良く知ってるんだね」

「まあな」

僕が否定することなくアツサリ言ったのが原因なのか波乗は俯いてしまった。

そのまま何も言えずに時間が過ぎる。

しばらくして波乗はゆっくり僕へ話しかけた。

「多記君、前から聞いたかったんだけど、どうして二人は別れたの？」

「……」

「あつ、ゴメン。聞いていいことと悪いことがあるよね」

「いいさ別に……」

「実は玲子さんがラジオ界からいなくなってからもハガキは書いてた。いつアノ人が帰ってきてもいいように僕が頑張ろうって思ってた」

「……うん」

「でもアイツと……リンと付き合うようになってから全然ハガキを

書かなくなつたんだ」「……」

「アイツは絵を一生懸命書く。描いている間は何者も寄せ付けない。僕もハガキを書く。それが二人を結びつけるモノだった。オレだけ恋愛に夢中になってアイツはそれを冷めた目で見てた」

波乗は僕の目をじつと見て話を聞いている。

「断っておくけどバカなアイツも冷たいアイツもどっちも本当のアイツだ。あいつの家はしつけが厳しい。それに加え通っている学校も由緒正しい学校だ。あんなバカがやれるのは僕達の前だけなんだよ」

「……」

「きつと……バカやれる場所が大切だつたんだ」

今、考えてみれば付き合ってたなんて思っていたのは僕だけだったのかもしれない。

そう思うとあいつのことを何も知らなかったのだと思う。

「それなのに僕はまた恋愛沙汰でアイツを冷めさせてしまった……それだけじゃないあの二人が来ないのも僕のせいだ……変な意地張らないで迎えにいくべきなんだよ……駄目だな……リーダー失格だ」

「それは違うよ！ 多記君は頑張ってると思う！」

「……そうかな」

「だって、今もここにいてくれるでしょ？」

「……」

瞳が潤んで見えるのは気のせいだろうか？

波乗は僕に微笑みかける。

ただそれだけのことなのに少し救われた。

「それに琴和さんが言うようなことは無いと思う」

「え？」

「恋愛はくだらなくない」

「波乗？」

「ただ…… バランスをとるのが難しいんだよね」

「そうだな……」

「…… やっぱり言うね、私」

胸に手を当て顔下へ傾ける。

少しして決心したのか顔を上げた。

「佳代ちゃん和多記君が二人きりなんて…… すごく嫌だった」

「!?!」

「好き…… ってハッキリとは言えないかもしれないけど……」

「言わなくていいよ」

僕は手を伸ばし波乗を引き寄せていた。

波乗は何の抵抗もなく僕の中へ包まれる。

しばらく抱き合っ たまま時間が過ぎた。

やがて僕は波乗から少し離れ、向き合った。

波乗は目を瞑り、呟く様に言った。

「多記君は私のこと……」

僕はそれに答えることなく彼女と唇を重ねた。

また一つ、僕は答えから逃げた。

第24話 「不協和音」

「まったく……いつまでいるつもりだ？ この場所が見付かるのも時間の問題かもな」

今日も僕は波乗家の玄関へ人目を気にしながら入る。

別にやましい事してるわけじゃないから気にすることないのだが、直子さんの親戚はこういう波乗家の事情を知ったら面白がって色々やるに違いない。

それだけは阻止しなければ……

舗装された坂道を登る。いつも思うのだが、波乗の家は変だ。

まず、僕の身長より大きな門。次に門から家に着くまで10分かかるし、周りは木に囲まれている。

これだけ前フリがあるにもかかわらず、波乗の家はこじんまりとした木造二階建て。

放送電波もそう遠くへ飛んでいない。

せいぜい半径500メートル。(波乗家近くのコンビニへ行つたときにラジオを聞くことが出来なかった)

波乗丈が自己満足で放送しているなら問題ないが、リスナーがいる。

放送中、一切CMは入らないし……どうやって運営してるんだ？
何なんだろう。

……って言うか僕は今、現実逃避をしてるのだろうか？
だって、とっくに波乗家の玄関にたどり着いてるのに入ろうともしないで考え事をしている。

正直、入りづらい。

あんなことがあって、どんな顔をして入れれば良いのだろうか？

普通が一番だということは分かっているが、上手くやれるだろう

か？

変に意識したりしないかな？

僕ではなくて波乗が。

「るの？」

「っ!？」

何か後ろから声がする。

とりあえず無視。

「ってるの？」

「うるさい、今考え事を……」

「多記君、何やってるの？」

「うわあああっ!! ……波乗っ」

慌てて振り向くとそこには波乗が立っていた。

笑顔で僕を見る。

「今日は少し遅いね」

「えっ？ ああ……ちよつと、尾行を撒いてた」

「そうなんだ。じゃあ、中へ入る」

「……ああ」

あれ？ 普通だ。

昨日の事、気にしてない？

……なんだ、僕の考え過ぎか。アホらし。

部屋に入り、いつものようにラジオの放送を聞きながらメモを取ったりネタハガキを書いたりする。

特に何も変わらない。僕は次第にいつものベースに戻ってきた。

工藤と川上がいなくなった今、ハガキを稼げるのは僕しかない。ペンの乗りも良くなってハガキ量産体制になった、その時、波乗が僕に話しかけてきた。

「多記君、あのさ……」

「何だよ」

「あの……」

「だから、何だよ。ネタに困ったか？」

「うっん、そうじゃなくて……」

波乗は何だか僕のほうをチラチラと伺いながらタイミングを計っている。

「じゃあ、何だよ」

「あのさ……多記君のこと……これから名前で読んでいい？」

「えっ!？」

「駄目かな？」

「いや、別に構わんが……」

「多記く……じゃなくて……と……透君、ありがとう!！」

って言うか、そんな事言われて、駄目と言えるはずがない。すごく嬉しそうな彼女の顔の前では多少の事は気にしないことにした。

いいよな、名前ぐらい。まったく知らない他人でもないし。

しかし、この事がきっかけで波乗は変わっていった。

次の日波乗家へ行くと波乗が玄関先で僕を待っていた。

手を振り近寄ってくる彼女に僕は違和感を覚えた。

「透君、待ってたよ」

「……」

「どうしたの？」

「いや、いつもと雰囲気違うなあって思ったから……」

「分かる？ 分かる？ 今日は軽くお化粧したの」

「なんで急に？ 今まではしてなかっただろ？」

「えっ!？ だって、私も女の子だし……」

「……ああ、そうだな。ごめん」

さらに次の日。

「せっかくの夏休みなんだから明日、どこか行かない？」

「何言ってるんだよ。明日はネタハガキの傾向を考える日だろ？」

「いいじゃない。たまには」
「こういうネタの傾向を修正することを怠っては駄目だ」
「……どうせ私は読まれないし」
「だから努力するんだろ？」
「いい。だって、透君がいてくれるじゃない？ それで十分」
「なに言ってるんだよ……」
「こんなことがもう何日も続いている。」

明らかに波乗のモチベーションが下がってる。
最初のようなハガキ職人への情熱がなくなった気がする。
放送中、それ以外でもネタ帳に書き込みする回数が減ったし、放送を聞いているときより僕と話をしている時間のほうが多い。
今や波乗が宝条リンなのか僕がそうなのか分からない。
読まれるハガキの9割がたは僕のものだ。
このままではペンシル祭だけじゃなく、気まぐれサーファーにも追いつかれてしまう。
正直、僕のネタが読まれる採用率は高い。
しかし、書ける枚数は限られている。
ペンシル祭は僕より書くスピードが明らかに速い。
だから、じりじり追い詰められていく。
波乗は僕が何とかしてくれると思って安心しきっている。

だから今日も僕がハガキ書く隣で、くつつく様に座り離れない。
何をやってるんだ波乗は……って何もしてないし、ただくつついてるだけ……

僕は我慢し切れなくなった。

「おい、ハガキ書けよ」

「でも、ネタ浮かばないし」

僕の言うことを聞いてくれる雰囲気じゃない。
それどころか余計にもたれかかってきた。

彼女の髪からいい感じの香りが……って言ってる場合じゃない。

「お前、家族を取り戻したいんじゃないのか？」

「……うん、そうだけど。今はこうしてるほうが……」

「おい、どうしたんだ？ 波乗らしくない」

「変？」

「明らかに変だ」

すると波乗は僕から離れ一定の距離を置き、こちらを真剣に見つめる。

「好きです」

「なっ……」

この前とは違いハッキリと言った。

正直、嫌な展開だ。

「透君は？」

「……ゴメン」

「え！？ それってどういう意味？」

波乗の表情がどんどん曇っていく。

だが、僕を見つめる目だけが力を失っていない。

「その…… なんとというか…… ハッキリ自分の気持ちが分からないというかな……」

正直、波乗はカワイイと思うし、向こうが好きだって言うんだから付き合えば良いのだが……

工藤の事もあるし、リンが言った『くだらない恋愛したけりゃ勝手にやっててね』という言葉も僕の中でストップをかける。

皆いなくなつて、二人だけになった部屋で、二人になったから僕はやってしまったのだろうか？

そこに波乗がいたから……

波乗の瞳が 涙が 唇が 言葉が さらに僕を追い詰める。

「好きじゃないのに……したの？」

「えっと……あの……勢い……」

「そんなのってないよー!!」

不覚にも僕は波乗の顔を見て失言したことに気が付いた。慌ててフオローしようにもすでに遅く、波乗はしゃがみこんで泣いてしまった。

「……っ……うっ……うっ……」

「……」

波乗は大声で非難するわけでもなく……声を殺して必死に悲しみに耐えている。

この前のようにわめき散らかされた方がまだましだ。

そして僕は彼女に近づくことも出来ずに立ち尽くしている。情けない。

でも……近づいて……慰めて……どうなるんだよ。

余計に傷つけるだけじゃないか……

色々なことが頭を巡り、不意にバランスを崩した僕は足を一歩だけ後ろに下げてしまった。

それは本当に意識したことじゃない。たまたまだ。

でも、彼女は敏感に反応した。

俯いて泣きながら言う。

「……どっいくの?」

「えっ!?!」

波乗は僕が帰ろうとしていると勘違いしている。

「どっへ……いくの?」

「いや……」

即答できない僕がいる。

「……明日」

「?」

「明日も……来てくれる?」

その瞬間、僕がホツとしたのは言うまでもなかった。

『逃げ道が見つかった』と。

「あ、当たり前だろ。明日も来る。じゃ……じゃあ今日はこの辺で帰るから」

僕は卑怯者だ。勘違いをキツカケにこの場を逃げ出した。

じゃがんだままの波乗を残して、独りの波乗のを残して……早足に波乗家を後にした。

玄関を開け庭へ出ると、誰かが僕の行く手を阻んだ。

「多記君、話があるの」

「玲子さん……すいませんが今日は勘弁してもらえませんか？」

玲子さんは真剣な面持ちで僕の前に立っている。

「重要な話なの」

「いや……」

そんな気分じゃない。

一刻も早くこの敷地から逃げ出したいんだ。

「内容は『ラジオデイズ』の事……それでも駄目？」

「今じゃなきやあ駄目な話なんですか？」

「ええ。お願い」

「……分かりました。手短にお願いします」

「ここだと澄音ちゃんに聞こえるかもしれないからこっちにきて」

僕は玲子さんの先導で歩き出した。

歩き始めてすぐ、玲子さんは僕がいつも通って来る山道とは違う道へ入った。

「玲子さん、何処へ行くつもりなんですか？」

「……」

僕の言葉を見無視して歩き続ける彼女に少しイライラしてきた。

この状態が10分ほど続き、完全に波乗家内にある森の中へ入っ

てしまう。

辺りは暗く、月明かりだけが頼りである。

「玲子さん、一体どういう」

「多記君は何で澄音ちゃんを手伝ってるの？」

玲子さんは僕の言葉に被せる様に言った。

しかも、質問内容が僕の心を逆撫でする。

「……僕に何を言わせたいんですか！？ わざと人を苛立たせたりして……」

すると玲子さんは立ち止まり、首を振った。

「違う、そんなつもりない……」

「じゃあ、なんで」

「苛立っているのは多分、私……」

僕へと振り返り、じつと伏せ目がちに見つめる玲子さんの視線に耐えられない。

思いつめた表情が波乗の表情と被る。

思わず、少し目を逸らしてしまう。

「こんなことしても時間の無駄。単刀直入に言うね。澄音ちゃんから手を引いて」

「はあ！？」

「このままじゃあ彼女……宝条リンが1位をとってしまう」
「……」

「お願い！！ もし彼女が一位をとってラジオブースに入ったら、丈さんはきつと家庭を顧みてしまう！！」

玲子さんは僕の両腕を掴み訴えかけた。

僕はただ揺さぶられながら答える。

「それはしょうがないでしょう。だいたい今迄が異常だったんだ」

「私は本気をお願いしてるの！！」

「波乗の気持ちだって本気でしょう！！」

思わず僕も声を上げる。

そつだ。僕は波乗の『家族を取り戻す』という夢を叶えるために
頑張つてるんだ。

このことだけはハッキリしてる。

どんなにギクシャクしても波乗を応援することには変わらない。

「お願い……私達の世界を壊さないで……」

玲子さんの肩が震えている、瞳からは涙が零れ落ちた。

「玲子さん？」

僕が玲子さんの異変に気付きを覗きこんだ瞬間だった。

背後から鈍い音とともに体中に痛みが走る。

「……」

その後立て続けに痛みが走り、僕はひざから崩れ落ちた。

「……悪く思わないでね……私達はもう負けられないの……」

薄れゆく意識の中、視界に入った人は……

鉄パイプを持った……

ペンシル祭！？

第25話 「それぞれの多記透」

息を弾ませて階段を駆け上がる。

今は少しでも一緒にいたい気分なので急いで帰りたい。

アパートの一室へとたどり着くと急いでドアを開けた。

「お父さん。お昼、買ってきた〜」

「おお。佳代、ありがとうな。そこ置いといて」

「うん」

父を見た。私にプレゼントすると言ってパズルを一生懸命に取り組んでいる。

8月も中旬。父がお盆休みだと言うので、一緒に過すため私はこちへ来た。

……というのが建前。

本当は皆との旅行以来、あの街に居るのがいやだったと言うのが本音。

でも、来て良かったと思う。

何気なく父の隣に座った。安心感が私を包む。

「変な奴やなあ、座るところならいっぱいあるやん。そんなにこの部屋狭いか？」

「そんなことあらへんよ。でも、ここに居たいの」

父はしばらく私の顔を見た後、再びパズルへ集中し始めた。

「お前みたいな年頃の子は皆、オッサンとか嫌いやと思ってたけど

……」

「そら、その辺に歩いてるオッサンは私だって嫌やけど、今隣にいるのって私のお父さんやん」

「……そやな。でも、同僚の娘さんなんか話もしてくれへんって言うってたで」

「その子はいつも近くにおるから気付かへんだけやと思う」

「……すまんな」

「ええよ、別に。もう慣れたし」

私が欲しかったのは安らぎ。欠けたモノが埋まる感覚。彼がそれを埋めてくれると思ってた。でも……現実には上手くない。ない。

「でも、良かった。佳代が元気になって」

「えっ？」

「3日前に玄関で会った時は今にも泣きそうな顔してたで」

「ああ……」

あの時が一番落ち込んだときだ。

どうしても心に開いた穴を埋める事が出来なくて私はここへ来た。そして、父はすっぽりとその穴へ埋まり、少しずつ私はバランスが取れるようになった。

やっぱり「私の何か」を埋めるのは父以外にいないのだと思う。

父はパズルをしながら話を続けた。

「あのさ……佳代」

「なに？」

「このパズルできたら……聞いて欲しいことがあるんやけど。ええかな？」

「ええけど……とりあえずお昼にしよ」

昼食をとり、一休みすると再び父はパズルに向かう。

私はその横顔を見てみると、少しだけ……ハガキを一生懸命書いている彼とタブらせていた。

西日がアパートの室内を染める頃、父はパズルを完成させた。

「やったやん！！ 完成や！！」

「……そうやな」

折角のパズルが完成したのに父の顔はいまいち冴えない。

「そういえばパズル出来たら聞いて欲しいことがあるって言ってやんなあ。何のこと？」

「ん？ ……あのな」

「？」

「お父さん……再婚しようと思っくんやけど……」

「は！？」

「え！？ 予定が詰まってる？」

『だって、直人、夏休み前にオレの予定は詰まってるって言ったでしょ？ そのつもりで私も予定立てたから』

受話器の向こうから楽しそうな話声が聞こえる。

「んだよ。予定が急に変更になってさ……聞いてんのか？ って、

おい！！ ……切りやがった」

ベッドに寝転びながら携帯の電話帳を眺めながら次に誰へ電話しようか思案している。

しばらく考えて、電話するのが面倒になった。

とりあえず手当たり次第にメールすることにする。

いつもなら事前連絡なんてせずに色々な場所へ行くのに……オレらしくもない。

あの旅行の以来、こんな調子だ。

他の奴らには予定があつてオレには……もうない。

全部、アイツのせいだ。アイツがハガキを書こうなんていわなかったら、こんなことにならなかった。

バカみたいな事を何度も考えながら過す夏休みなんて最悪だ。

考えが巡って元に戻った頃、部屋のドアがノックされた。

「直人、お客さん」

「誰？」

「長谷川さんって女の子だけど知らない？」

「え？」

誰か分からなかった。

かといって自分を訪ねてくれた貴重な人間をそのままにして置くはずも無く、とりあえず部屋を出る。

玄関へ向かうと一人の女の子が所在無さに立っていた。

まっすぐに伸びた長い黒髪。露出の少ない地味な服装。メガネをかけ、俯き加減で女の子は俺を見ていた。

っていつか未だに誰か分からない。

オレは彼女を眺めて何も言わないでいると、彼女は焦りだし、あくせくしながら持ってきたカバンから何かを取り出した。

「あつ、あの……これ……」

彼女が取り出したのは携帯電話だった。

液晶の画面からはオレが手当たりしだい送ったメールが表示されている。

「あつ、来てくれたんだ！！　うれしいなあ……まあ、ここじゃなんだから上がって上がって」

オレは携帯を見ると反射的に受け応えしていた。我ながらわざとらしい。

しかし、彼女は分かっているのか分かってないのか恥ずかしがりながらも靴を脱いだ。

とりあえず今は気を紛らわせる相手は誰でもいい。

部屋まで案内するとオレは小型冷蔵庫から飲み物を取り出し、隣においてあったお菓子を広げる。

色々な物をとりに部屋を空けると女は室内を物色するので必要なものは大抵ここにおいてあのだ。

「さあ、遠慮しないで飲んで」

「あ……はい」

彼女は警戒してるのかまったく出されたものを口にしようとしな
い。

「大丈夫、変な薬なんて入ってないから」

「は……はい」

「……」

「……」

気まずい。何だこの沈黙は。

「もしかして、緊張してる？」

オレの言葉に彼女は反応して、慌てだした。

意味無く何度もメガネをあげる仕草をしたりする。

「あの……ご、ごめんなさい！！ ……その……男の部屋に来るの

……初めてだから」

「マジで？」

何度も首を縦に振る彼女。確かに……男がいそうな感じではない。
それ以前にメールしてすぐにこの家に来れるところからして友達
も少ないのだろう。

まあ、いいや。何も知らないほうが下手な駆け引きをしなくても
良いからな。自分のペースに巻き込める。

「そんな緊張しなくていいよ……とって食うわけじゃないんだから」
とか言いながらオレは彼女へ近づき、肩へ手をまわす。
ちようど良い時に来てくれたもんだ……

私には心配事があります。それは妹……リンの事。

ドアをノックし、向こう側から返事があると私は室内へ入りまし
た。

物憂げにお庭の噴水を窓から眺めているリンの可愛さに私は卒倒しそうになりました。

何とか気を取り直しリンに話しかけます。

「今日は出かけないのですか？」

「お姉様……もういいんです。終わったことですから……」

「心配しなくともお父様とお母様には私が上手く言っておきます」

「……いいえ、もう行きません。いままで疎かにしていたお稽古事に精を出しますから」

久しく見ていなかった沈痛な面持ちに私の胸は張り裂けそう。

我が琴和家の跡取りは私達姉妹のみ。

長女の私はともかく、せめてリンには思う通りに生きて欲しいと願って止まないのです。

だから、戯画にいそしむのも、ラジヲ番組への投稿もお父様とお母様には内密に進めてまいりました。

しばらく黙り込んでいたリンは思いつめた顔をして私に話しかけます。

「何故に人は恋愛するのでしょうか？」

「どうしたのですか？」

「お姉さまには何度も申し上げた通り、私は漫画家になりたいという夢があるのです」

「幼き頃からの夢でしたね。世界中の子供達に感動を与えるのだと」

「はい。ですが……周りの者は違います。夢や希望を語るのにその一方で恋愛に現を抜かし、夢を平気で忘れるのです」

少し前も同じことを言っリンは悩んでおりました。

原因となった殿方と別れた事で解消されたとばかり思っていましたのに……

「……」

「夢は恋愛に勝てないのでしょうか？」

瞳を潤ませて、語るリンを私は思わず抱きしめてしまいました。
するとリンも私へ体をあずけます。

「自分達で勝手にしてくれれば良いのに……私まで巻き込もうとする……」

「もう、悩むことはありません。今は私に思いをぶつけなさい……」
一体、何がこの子の身に起きたのでしょうか。

今すぐその障害を取り除いてあげたい。

でも、もう少しこのままリンを抱きしめていたい……

しかし、リンの一言で状況は一変しました。

「私が多記透という男を買いかぶり過ぎていたようです」

「……！　今何と言いました？」

「お姉様、ごめんなさい。実は……今まで夜出かけて居たのは……
多記透と会っていました」

「なんですって……！」

その名前を忘れるはずがありません。

多記透、一時期リンを惑わせた憎き相手。

「多記透……この忌まわしき名を再び聞くことになるとは……」

私はいても立っても居られなくなりました。

「お姉様、どこへ行かれるのですか？」

「決まっています……！　今度こそ多記透の息の根を止めてみせます！

！　坂田、車の準備をしなさいっ……！　それと、長刀の準備もです

……！

「おやめください、お姉様……！」

私は今日も玄関に座り、彼の来るのを待っています。

彼とはもちろん多記君のこと。

もう、五日になります。やっぱり嫌われたのでしょうか？

多記君には私が重荷だったのでしょうか？

「澄音ちゃん、どうしたの？」

話しかけてきたのは玲子さんでした。

「そついえば最近、皆を見かけないわね」

「……はい。皆、色々あって……」

「でも澄音ちゃんは……皆の中でも多記君が気になるわけだ」

「……」

なにも答えない私に玲子さんは微笑みながら言います。

「彼のことが好き？」

「……はい」

好きだということを素直に認めることにしました。

そんな私に玲子さんは腕組みをして横を向き、言いました。

「……多記君も酷い奴ね。澄音ちゃんを見捨てるなんて……」

「見捨てる？」

「だって、今まで毎日のように来てたのに、もう五日も来ないんでしょ？」

「……」

「ち、違います！！ きつと何か用事があるんです。ご親戚の方に

ご不幸があつたとか」

「だったら連絡の一つもくれてもいいのにね」

「ああ……はい」

考えないでいようと思っていた『見捨てられた』という、どうしようもない現実を突きつけられた気がしました。

私が呆然としている間に玲子さんはブースの方へ行ってしまうました。

その後の私は頭の中はごちゃごちゃで、ラジオの放送も耳に入ってきてません。

何だか色々な事を考えてしまい、ハガキを書けなくなってしまいました。

多記君が来なくなって五日経ち、六日経ちが経ちました。

ラジオからはペンシル祭さんや気まぐれサーファーさんのハガキが次々読まれます。

でも私はそんな事もう、どうでもいいです。

多記君、多記君、多記君、何で来てくれないの？

……淋しい。

そして、とうとう一週間が過ぎました。

もう放送を聞くこともないです。

私は玄関の外で座りながら多記君をここで待っていることにしました。

多記君の家は知っています。何度も行こうと思いましたが。

でも、玲子さんの言葉が耳から離れません。

『澄音ちゃんを見捨てるなんて……』

私には待つことしかできません。

玄関に座りながら、今日も多記君のことを考えています。

存在が大きいです、とても。

あの日もこうやって、プリントもって来てくれた多記君を待っていました。

ハガキが全然読まれなくて落ち込んでいる私は、とにかく誰かに頼りたくて多記君に抱きつきました。

でも、今は違います。多記君だから触れたい。

そんな思いに駆られていると、前方に人影らしきものが見えま

た。
私は思わず立ち上がります。さらに影はだんだん近づき、大きくなります。

とうとう輪郭が整ってきました。私はいつも間にか走り出していました。

「多記君っ！！ えっ？」

しかし、途中で走るのを止めました。

多記君じゃなかったからです。

その人は多記君よりももっと小柄でスカートをはいていました。見るからに女の子です。

なぜかノートパソコンを首から提げて、何かを打ち込んでいます。私と彼女の距離がかなり近づいたところでようやく目があいました。

「多記透を出したまえ」

「え!?!」

「とぼけても無駄だ。調べは付いてる」

突然の詰問に私は戸惑ってしまいました。

でも、この人も多記君を探しているのだと思うとはっきり言った方がいい気がします。

「本当です。私だって……多記君に会いたいから……」

すると彼女は私をじっと見つめてきました。

「どうやら嘘はついてないみたいだな」

「あの……アナタは一体誰なんですか？」

「私の名は井端環^{いはたたまき}。多記透の親戚とでも言うっておこう」

第26話 「It's a heavy spear」

井端環と名乗った女の子は再びノートパソコンに向かいだしました。

「おかしいなあ。発信機が途絶えたのはここだから何か分かると思っただが……」

「あっ、あの……」

「うーん……」

ノートパソコン夢中で私の言葉が聞こえないみたいです。

「あのー、すみません」

「……」

無視ですか？ 無視なんですか？

……でも、今はこの人にすがるしかありません。

「私の話を聞いてくださいっ!!」

「……ん？」

ようやく私の声が聞こえたみたいです。

井端さんはこっちを向いて私を見つめて一言言いました。

「そういえば、お前はここで何をしているのだ？」

「あの、それ私が聞きたいんですけど……多記君は家にいるんじゃないんですか？」

私の言葉を聞くと井端さんは眉間にしわを寄せました。

「ここ一週間ばかり連絡もよこさず無断外泊だ。そこで、直子さんに頼まれてそれを調査しているのだが」

「そうなんですか……」

「……というかもとあの男に興味があつてな」

といった後、井端さんの目が異様なほど光りました。少し怖いです。

「えっ!?!」

「なに驚いている。ネタとして面白い男だからだ。くだらん邪推をするな」

「はい……」

「そういうお前は多記透の何なんだ？ 友達か？ 女か？ それとも奴隷か？」

「奴隷？」

「そうか……奴隷なのだ……」

「ち、違います」

「まあ、恥ずかしがるな。どんな人間関係でもSとMの関係は付きまとうものだ」

「だから違いますっ！！」

「そもそもSというのはサド伯爵がだなあ……（以下削除）」
「どんだん話を進めていく井端さんの変な誤解を解くのに少し時間を費やしてしまいました。」

「えっ！？ ……今なんて言った？」

「そやから……再婚……」

「なんで？」

「なんでって言われても……好きな人ができたんや」

照れくさそうに腕組みをして父は答えました。

少し嬉しそうな表情に私は腹が立ってしまいました。

「……裏切りや」

「は？」

「そんなの私に対する裏切りやつー！！」

すると父はさっきとは違い、すごく悲しそうな顔をした。

「……すまん、としか言えへん……」

「許さへん、絶対に許さへんからなっ!!」
「佳代……」

ちょうど私の怒りが頂点に達した時、玄関のチャイムがあった。父は玄関を気にしてるが、私は玄関を無視して父を睨んでる。

しばらくこう着状態が続いた後、勝手に玄関のドアは開かれた。

「おっす!! オッサンに言われた通りの時間に来てやったぞ……
…っであれ?」

突然、中学生ぐらいの男の子が家に上がりこんできた。

何のことが分からず呆然としてしていると父が説明した。

「この子は再婚相手の息子さんで……」

「……」
「新田輝にったあきりって言います!! よろしく。確か……オッサンの娘さん
やんな」

ニコニコ笑いながら手を差し出してきた。

どうやら握手を求めているみたいだ……冗談じゃない。

やたら明るい雰囲気には再び怒りがこみ上げてきて、私は彼を無視した。

「あのな、ちょうどええ機会やから……佳代と顔見知りになってもらって、再婚した後も気軽に家に来れるようにつて思ってな……」
「ふざけんなや!!」

父のフォローも余計に苛立たせるだけで……いたたまれなくなつた私はこの部屋を飛び出した。

どうして、好きな人は私の周りからいなくなるんだろ……欠けたパーツは一生埋まらない。

すると突然、走る私の腕を誰かが掴む。

振り向くとそこにはさっきの男の子がいた。

私の腕を掴みながら肩で息をしている。私も肩で息をしていた。

しばらく、お互いの乱れた呼吸しか聞こえない。

やがて時間が経つとお互いの息も整って来て、今度は気まずい沈黙が二人を取り巻く。

この状況を破ったのは新田輝とかいう男の子だった。

「あーあ、オッサンかわいそうや」

「!」

「アンタがおるせいで一生、好きな人と結婚も出来へんのやなあ」
あからさまな非難の言葉に私はむかついた。

「どういう意味や？ あの人は私の父親やろ！！ 娘の幸せ考えるのが当然ちゃうの!？」

勝手に離婚して、勝手に離れて行って、私に寂しい思いをさせてのは父だ。

その責任を負うのは当然じゃないか。

「そんなに自分が可愛い？」

「はあ？」

「自分が満たされれば他の人はその犠牲になってもええんや」

「そこまで言うてへんけど……」

明らかに年下の男の子に私は押されっぱなしだった。

言うこと一つ一つが私よりも遥かに大人で……言い返せない。

「とかいいながらホントは僕も結婚にはあんまり賛成できへんのかな」

「えっ!？」

「でもなあ……やっぱりオカンには幸せになって欲しいから」

自嘲的に話す彼の横顔を見ていると何だか腹が立ってきた。

「……アンタはそれでええの？」

「？」

「自分の気持ちもぶつけないで、そうやって分かったフリしてるわけ!？」

「……」

「私は嫌。自分の気持ちを伝える」
だから私は多記に告白したし、父にもはっきり言った。
男の子は私にきよとんとした顔を見せる。
少し時間が過ぎて、彼はため息をつき、私に言った。

「アンタ……『好き』ばかり言うタイプやる？」

「……！」

「自分の幸せが必ずしも大切な人の幸せとは限らへん……一人で頑張ってるオカン見たら分かる」

「……！」

私が返答できないしていると彼は頭を下げた。

「……お父さんを許してやってくれへん？」

「……！」

何故この子が頭を下げるのだろう？

再婚相手の子供だから？

「やっぱり僕が言うのも変やった？」

「……ごめん今はなんとも言えへんわ」

彼から離れ、街中を歩きながら考えた。

『「好き」ばかり言うタイプやる？』って言葉が胸に刺さる。

辺りを一回りして、アパートの近くに来た。

階段を上がりドアノブに手をかける。ドアが開くと同時に父が私

を見た。

部屋を見渡すとすでに父しくない。

「おかえり……あのなお父さん考えたんやけど」

「再婚したらええよ」

「……は？」

「再婚相手の息子、何かええ奴みたいやし……さつきはカツとなつたけど冷静に考えてみたら私がお父さんの幸せを妨害する権利はないしな」

「佳代……」

「んじゃあ、もうこの話し終わりな」

「……ありがとう」

私は返答できずに手を振って気にするなと伝えた。

父になら彼のことを話してもいい気がする。

「あのな、ここに来たのは理由があつて……実は好きな人がおつて……」

「えっ！？好きな人！！」

父は私の言葉を聞くと一瞬のうちに体の動きがストップした。

「好きな人おつたらあかんの？」

「えっ……いや……そうちゃうけど……やっぱり父親やから……どんな奴や？」

「もうええの」

「は？」

「……ふられたから」

父の止まっていた動きが再び動き出した。

何だか脱力したように天井をみあげる。

「え……あ……ふられた。はあ……そうか……そら残念やつたなあ……」

「何か顔がにやついてるで」

「うっ……」

私としては誰かにこのことを話して自分なりの決着を付けたかった。

そして、父は優しい笑みを浮かべながら私に尋ねた。

「で？ どうなんや。スッパリ諦めるんか？」

「そうしようかな」

「そうか……でもな、お父さん今度の再婚相手の人にプロポーズ三回断られてん。『もう結婚なんてこりごりや』ってな」

「それであきらめずにまたプロポーズした？」

すると、父はやたら自信ありげな様子で話してくれた。

「違うなあ。最後に『結婚しよ』って言ったのはあっちゃん」

「えー!? どうやってそうなったん?」

「フフフ、そこが駆け引きってやつやなあ……」

「ふうん、一回離婚してんのやから駆け引き上手いとは思えへんけど」

「うっ……お前、痛いところ突くなあ」

話にオチも付いて二人で笑う。

「でも、何となく分かる……ただ『好き』って言うだけの恋愛はもうしゃへんから」

「……なんやようわからんけど大人な意見やなあ」

「へへへ……そしたら、私も帰るわ」

「早っ!! もうちよつとおつてもええんちゃうん?」

「そういうわけにはいかへん。助けやなあかん友達がおるから」

「そうか。じゃあ、これもってけ」

父が私に渡したものはさっきまで作っていたパズル。しっかりとリ付けされて額に入れてある……綺麗な綺麗な色とりどりのチュールリップの絵。

何となく思い出した事……

確かチュールリップの花言葉は……「思いやり」

第27話 「手を繋ごう」

「なるほど。お前が多記の奴隷でないことは分かった。では、何なのだ？」

「……友達です」

「『友達です』の前に付いている『……』について説明してもらおうか」

「なんだかこの人鋭いです。」

「私も一人で抱えるのが辛くなってきたところでした。」

「それは多記君が……」

「と私が説明をしようとする彼女から携帯電話のメロディーが聞こえてきました。」

「しかし、彼女は一向に反応しません。」

「あの……電話にでないのですか？」

「でない」

「なんで？」

「うるさい奴だなあ、出ればいいんだろ出れば」

「別にそこまで強く言っていないですが……」

「どうやら電話に出るキツカケが欲しかったようです。」

「彼女が電話に出ると、近くににいる私にも分かるような大声で向こうの声が聞こえてきました。」

「やたら『タマちゃん』を連呼しています。」

「うるさい！！ そんなこと自分で解決しろ！！ お前達自身のことだろ！！」

「と一言怒鳴ると電話を切ってしまいました。」

「……」

「あの……大丈夫なんですか？」

「大丈夫だ。アイツはあんなことではくじげない」

「はあ……良く分かりませんが……」

何のことだか分からないですが、自信たっぷりと言つところを見ると電話の相手とは信頼関係が出来ているみたいです。

「で？ お前の話の続きを聞こう」

「はい。あの……多記君が……」

「すまん。その前に聞いていいか？」

「はい？」

「あんな電話の切り方して、怒ってないかなあ？」

「……気になるんなら電話したらどうですか？」

「選択に迷うところだが……とりあえず電話してみるか」

この人は一体、何をしに来たのでしょうか？

「あの……私のこと覚えてました？」

オレの手が彼女の肩にかかるうとした時、話しかけられた。

動きを止め、オレは言い訳を考えた……が、そんな簡単に思いつ

くわけもない。

「えっ！？ あ、当たり前やろ！！ ……メチャメチャ覚えてるち

ゅーねん！！」

「……」

へ……返事がない。やっぱりバレた？ 彼女の表情を伺う。

真剣な顔をしている。怒らせたか……

「……プツ」

「は？」

「あははは……何で、関西弁なんですか？ しかも、発音変だし」

彼女は口に手を当て笑っている。バレてないんだ……少し安心。

だが、問題は解決したわけではない。

この部屋にいる以上、会話を続けなければいけない。
とすれば何処かでボロが出るに違いない。

そこで出した結論は……

「外へ出ない？」

何かと他の話題を振りやすい外に出て、少しずつこの子の事を思い出そう。

ただ近所を歩いてもしようがないので、街中を歩くことにする。

今、金無えからウインドウショッピングでもしながら時間を過せばいい。

「川上さん、これカワイイですね」

「ああ、そうだな」

この子が物をねだるような子じゃなくて良かったと思ったりする。いつもいるのはあれ欲しいこれ欲しいとねだるうるさい奴ばかりだったもんなあ……

「いつも他の女の子とこんな風にして過してるんですか？」

「まあね」

しまったっ！！ ついつい答えてしまった。

そう思ったところすでに遅く、彼女の表情は曇っていった。

「そうですか……女の子がよりどりみどりでですか……」

「そこまで言っただけよ」

彼女は少し俯きメガネを上げると、顔を上げ、笑顔を見せながら言った。

「なんか良いですね。自由で……」

「自由？」

「私、こんなだから……周りに真面目だって思われてるし……自分でもはみ出したことが出来ないし。その点、川上君ははみ出し過ぎって言うか……」

「それは……ほめ言葉なのか？」

「うん。だって行動に嘘はないでしょ？」

「！？」

「私は嘘だらけ……本当の自分は違うの。だらしないし、損得をすぐ考えるし、そそっかしいし……」

「……」

なにかこの子は勘違いをしているのではないだろうか？

オレはいつもに思うままに行動してるわけじゃない。

むしろ出来なかったことに後悔し、それが原因でこの前も失敗したばかりだ。

……くそ、なんでこんなときに多記や澄音のことを思い出さなきゃいけないんだよ。

「上辺だけだから何でもいえる友達も居なくて、夏休みも特に予定も無いし……でも、メール来て……私を忘れてない人も居るんだなって……川上君良い人です」

何だかペースが掴めない。いつもならこんな辛気臭い話は聞かない。

早く話を打ち切って楽しいことしたい所だが、なぜか言いたいのが頭から離れなかった。

「……オレはそんな良い奴じゃない」

「え？」

オレがさらに言葉を繋ごうとしたその時。

「あれ？ 直人じゃないの？」

聞き覚えのある声に振り向く。

とそこにはさっき電話でオレの誘いを断った女とその知り合いらしき数人の男女がいた。

ジロジロとオレではなくオレの隣を見ている。

「ふん、直人って女の趣味変わったんだ」

「はあ？」

「ちょっとはセンスあると思ってたんだけどなあ。残念」

センスってなんだ？ だったらお前はあるのか？

お前の連れは何なんだよケバすぎなんだよ！！

……と言いたいところだが我慢した。

「お前には関係ないだろさっさと行けよ」

「結局、昔と何も変わってないんだ」

とか、いくつが悪態について集団は去っていた。

自分ひとりだったらとつくに喧嘩になってたかもしれない。

「私のせいでごめんなさい」

「別にいいよ。あいつらの言ったことは本当だし」

「女の趣味？」

「なんでそこに喰らい付くかな……昔と変わらないって所だよ」

「え？」

「オレも昔は君と同じようなメガネかけてた」

「本当ですか？」

「ああ。カッコ悪くてコンタクトに変えたけど」

「そうですか……」

髪も真っ黒で性格も大人しく真面目で引つ込み思案……自分の意見も上手くいえない奴……

結局、言いたいことがハッキリ言える多記に琴和を奪われたわけだ。

「オレはひがみつぼくて、人一倍自分だけが得になるセコイ方法を考えてる。自分の失敗や後悔をすぐ多記って奴のせいにして棚上げにする……ホントはそういう奴なんだ」

「それでも川上さんは良い人です」

「……違う。今日もこうして誰も居ないから君の相手をしている。

悪いが手当り次第にメールを送ったし、実は未だに君とどうやって知り合ったのか憶えてない」

「そうなんですか……」

さすがにこの一言はショックのようだ。彼女は黙ったまま俯いてしまった。

今頃になって何でこんなこと言ったんだらうと後悔する。

「だとしても……」

「？」

「やっぱり……川上さんは良い人です」

無理やり笑ってるのがみえみえ。

オレは何となく自分のペースに乗れない理由が分かった気がした。

「……君はオレの知ってる人に似てるな」

「えー！？」

「最近、その人に振られたけど」

「……川上さん、私のとっておきの場所へ案内します」

「どうしたの突然？」

「目を瞑ってください」

いきなりの事でよく分からないけど彼女に従うことにした。

目を瞑ると彼女はオレの腕を掴み引く張る。

連れて行かれる途中、何だか味気なかったのでオレの腕を掴んで彼女の手を離し、オレの手を握らせた。

少し、ためらいもあったようだけど彼女は手をつないだままオレを先導する。

何処かの建物に入った気配がすると、すぐにエレベーターに乗った。

何階まで行ったのかは知らないけど、ドアが開く音がして風がオレの顔に当たる。

その直後、彼女の手がオレから離れた。

「まだ、目を瞑ってください」

彼女はそれだけ言い残すと、オレから遠ざかった気がした。

「良いですよ」

遠くから聞こえる声に目を開けるとそこは何処かの屋上だった。
見晴らしは確かに良い。

オレはその景色をしばらく眺めていたが、視界の端に彼女が見えてのんきに眺めている場合ではないことを理解する。

気が付けば彼女は柵を飛び越えていた。

「おい、お前なにやってるんだ」

「飛び降りです」

「んな事は分かってるっ！！」

「だって、私は今の自分が嫌いだから」

「バカ！！ 待て！！ 誰だって多少自分の嫌いな部分はあるもんだ！！」

「さようなら」

その瞬間、オレの視界から彼女は消えた。

「冗談だろ？ おいつ！！」

オレは今起きたことに対応できずに呆然としていた。

いくら嫌なことがあっても死ぬことはないだろ……

ゆっくりと柵に駆け寄ると、恐る恐る下を覗いた。

「はあく怖かった」

「……どうということだ？」

覗いたオレの顔と彼女の顔がもの凄く接近していた。

「ここって自殺者が多いので防護ネットが張ってあるの知ってます？」

「なんてことだ……」

やっと状況が飲み込めたオレは腹がってきた。

「アホかつ！！ そういう問題じゃねえだろ！！」

しかし、彼女は笑顔で答える。

「これで私のみ出した行動ができたでしょうか？」

「はみ出し過ぎだっ！！」

「……自分を変えようと思って」

「っ！？」

「私も変わりますから川上さんも変わりましたよ？」

「え……」

「その、多記っていう人……誰だかわかりませんが、きっと川上さんが気にするような人でもないですよ」

「お前……」

「少なくとも私はそう思います」

「それが言いたくてこんな事したのか？」

「はい」

……オレはいい加減、多記から離れなければいけない。

そんな事言っても絶対無理だと思ってた。

だが……彼女の言葉が……笑顔が……今までのことをどうでもい
いことだと思わせてくれる。

これからは失敗を後悔を一人で引き受けよう。

「自立」なんて考えるのは恥ずかしいが、誰かにせいにしながら
生きるよりましだ。

「あの、そろそろ引き上げてくれませんか？ ……すごく怖いんで
すけど」

「じゃあ引き上げたら……君とオレがどこで知り合ったか教えてく
れよ」

「良いですよ。でも、結構長い話になると思いますよ」

「お互い、時間なら有り余ってるだろ？」

オレは彼女の手を掴んだ。

第28話 「ドリームキャッチャー」

多記君と出会ってから今までの色んなことを話してしまいました。誰かに今の思いをぶつけたかったのです。

私の話を聞き終えた環さんは顎に手を当て考え込んでいました。

「ふむ……だいたいのあらましは分かった。問題はいくつがある」

「まずは結局、多記がどこにいるのかさっぱりだということ」

「はい」

「次に多記及び他の連中はどうしようもなくバカだという事」

「……」

環さんに話して本当に良かったなと思うと同時に何だかスッキリしました。

そんな私を見て、彼女は咳払いを一つしました。

「まだ続きがある。最後になぜお前はそんなことを私に話すのか？
だ」

「だって、アナタが話せって……」

「違うな。誰かに話したかったのだから？」

「え？」

「すごく痛いところを突いてきます。」

私の心を見透かすように環さんは言いました。

「お前の話を聞いているとずっと誰かに頼ってばかりじゃないか」

「……」

「助けられ癖が付いてるんじゃないのか？ だから、たまたま来た

私にさえ助けを求めてしまう」

「そんな」

「多記以前にお前を何とかしないと」

もうあの男を捨て置くわけには行きません。

二度とリンに近づけさせないには行かない！！

怒り心頭で扉を開け出て行こうとする私にリンがすがりつきます。

「離しなさいっ！！ あの男どこまでリンを侮辱すれば……」

「おやめください、お姉様……」

「……リン」

ああ、目を潤ませ懇願する姿も……何て愛らしいのでしょうか。

このまま私のお部屋へ連れて行きたい……と、耽ってる場合ではありませんでした。

今度こそあの者の息の根を……

長刀を持ち、リンを引きずったまま玄関ホールまで来てしまいました。

私達の周りでは執事の坂田がオロオロしています。……うっとうしい。

「ラン、お止めなさい」

そんな時、私の名前を呼んだのはお母様でした。

「お母様」

「……マミィ」

大広間から出てきたお母様は威厳を漂わせ、私達姉妹を交互に見ます。

「ラン。妹のことで興奮するのは結構ですが、ご自分の将来についてもっと考えなさい。一体、いつになったら見合いをするのですか？」

「はい……」

「それに、リン。何があったかは詳しく聞きませんが、野良犬にでも噛まれたらと思って忘れなさい」

「はい……」

反論が出来ず、その場は収まってしまいました。

自室に戻り、考えをめぐらせませす。

……私は断じて納得いきません。

だいたいお母様は昔からのお嬢様で世間を知りません（私もそうですが……）いえ、あの人は知りたいたとも思わないのです。

私は違います。

お母様は早く見合いをして婿養子をとり、このお屋敷で優雅に暮らすのが勤めだといいますが、私はもつと世の中を見たい。

ですが……私は二人姉妹の長女なのです。

長子としての責務というものを放棄できるほど無責任ではないし、この家を簡単に捨てて自由の身になるという身勝手さも持ち合わせていません。

だからこそ、リンにはこの家なんかにはいないで世間を見て欲しかった。

……でも、彼女はこれから家を出るが少なくなるでしょう。

これでは何のために私がこの家にいるのか……

え？ よく考えてみると……これはチャンスなのかも。

『私にだって自由に羽ばたける権利がある』

そう考えると思いを抑えることが出来なくなってきました。

私は衣裳部屋へ忍び込み、トランクに洋服を詰め込みます。

お金は次の日に朝一番で銀行へ行っておろせばいい。

単調な屋敷の生活から抜けせるかもしれない。私の胸は躍りました。

……後は暗くなるのを待つだけ。

そして、夜。世間ではすでに深夜と呼ばれる時間帯。

私はベッドのシーツをつなぎ合わせ、ロープを作りました。

誰にも見付からないようにテラスからの脱出です。そつとテラスに出て、手すりにシーツを括り付けます。

このアイデアは本を読んで思いつきました。

「お姉様、何をしているのですか？」

「あ……」

忘れていました。テラスはリンの部屋と繋がっていたのでした。

「リ……リン、いつからそこに？」

「ずっといました……お姉様がお部屋から出てきたときから」

「な、なんてことでしょう！」

私は赤面し、それ以上は何も言えなくなりました。

妹を放っておいて自分だけ逃げようとするなんて……

それにしても……月明かりに照らされるリンは素敵です。

ポーツとしている場合ではないのです。

とつさに私はリンへ言い訳をします。

「あ、アナタが外へ出られるように用意をしていたのです」

「え？……ですが、私はもう……」

「……そうですね」

「申し訳ございません」

リンの可愛さを必死に我慢して私は自分の気持ちを……

今まで誰にも黙っていた気持ちを言いました。

「でしたら……アナタはもう世の中の表舞台から姿を消しなさい」

「お姉様？」

不思議そうな顔をしたリンをよそに私は決壊したダムのように一気に言葉が出てきます。

目の奥が熱くなり、感情が高まってくるのが自分でも分かりました。

「私は今から旅に出ます、行きたいところへ行くのです」

「はい？」

「アナタがこの家にいるというならば、私がこの家を守る義理はありません」

「何をおっしゃるのですか」

普段、あまり意識していないようなことが口からでてきます。次に言った言葉は自分にとっては意外でした。

「私には夢がありません」

「？」

「だから夢を探しに行くのです」

「そんな無茶苦茶な……」

「無茶苦茶でいいのです。夢とはデタラメで途方も無く荒唐無稽なものではないのですか？」

「……」

今まで私は夢などと言うものに関して考えもしませんでした。

「多記透」ごときで薄れる夢など捨ててしまいなさい。お稽古事をして、花嫁修業をして……この屋敷に婿を呼ぶのです」

「……ランお姉さま」

「主役……交代です」

私は言いたいことを言い終わると肩で息をしていました。息継ぎを考えることなく話したせいでしょう。

私の言葉を聞いたリンはしばらく黙っていました。

やがて、決意したようにリンは私を見つめて口を開きました。

「それは……嫌です」

これに対する答えは決まっています。

「でしたら……私と戦いなさい」

「はい？」

私は部屋へ戻り、木の長刀を二本持ってきました。

一つをリンに渡すと私は一定の距離をとって離れました。

「自由を賭けていざ勝負!!」

「お待ちください、お姉様!!」

「問答無用!!」

長刀を床に対し45度、正中線に構えます。

一方、リンは事情が読めないのかまったく構える様子がありません。

「私は本気です」

「意味が分かりません……」

今までまったくした事がない姉妹喧嘩。戸惑うのはしょうがないでしょう。

ですが、私は本気です。彼女にやる気を出してもらわなければなりません。

私は揺さぶりをかけることにしました。

「怖いですか？」

「え？」

「自分の夢への思いが多記によってなくなっていくのが怖いのですか？」

「断じてそんなことはありません!! あの男のことなどもうどうでも良いっ!!」

私の予想どおり多記という言葉にリンは敏感に反応します。

ですがそれがいけなかった。

やはり、多記がリンの心に住み着いてるのだと分かったら、私もついつい興奮してしまっただけです。

「だったらなぜ私に対してもそのような話し方をするのです!!」

「!」

「貴方が家と外では話し方を変えていることを知らないとも思っているのですか？」

「お姉さま……」

「壁を作った話し方をして……怖いのでしょうか!!」

「怖くないです」

「嘘」

「怖くない!!」

「嘘ですっ!!」

ここまできたらただの子供の口げんかのようになって来ました。

「リ……リンちゃん、怖くないもんっ!!」

とうとうリンはぎこちないながらも構えます。

長刀の実力からいえば私のほうが圧倒的に上。それなのにリンは構えました。

彼女なりの決心なのか……私の酔狂に構ってくれているだけなのか……

でも、うれしい。

何かを賭けて誰かと競えることがこれほど興奮できるとはっ!!

「……そう、それでいいのです!! では、行きますよ!!」

「よしっ!! 来いっ!! リンちゃん、絶対勝つから!!」

しかしというか予想どおりと言うか……リンは隙だらけでした。

ですが……打ち込めません。

良く考えてみれば……私が可愛いリンを打ち据えることが出来るはずないっっ!!

じっとリンを見つめます……それにしても……寝巻に長刀を構える彼女は可愛い。

いや、作法に則りきちんとした服装でさせたほうが……可愛さに凛々しさが加わっていいかも知れない……戦う女はすばらしい……

ボカッ!!

「え?」

我に帰り、上方を見ると長刀が頭の上に乗っていました。

遅れて、頭に少しだけ……じゃなくてかなりの激痛が走ります。

そのまま私は倒れこんでしまいました。

「リンちゃんの勝ちい~~~~っ~~~~っ~~~~っ!!……!!」

気が付くと、私はベッドに寝ていました。

額には濡れタオルがあり、右横へ目をやるとリンが心配そうに覗き込んでいます。

「お姉様、ごめんなさい。リンちゃんのためにこんな芝居を打ってくれて……」

「え？ ……ええ。まあ、これもあなたのためと思い……」

……とっさのことに嘘をついてしまいました。かなり自己嫌悪。

覗き込むリンを見て、大人っぽい彼女も悪くないですが、やはりリンは無邪気でいて欲しい。

昼間言おうと思っていたことを思い出し、私はリンの頭へ手を乗せました。

「リン、あなたは『夢は恋愛に勝てないのでしょうか？』と言いましたね」

「……うん」

「夢のない私が言うのは変かもしれませんが……勝つ必要などないので」

「勝つ必要がない？」

「……夢とは自分に向ければ情熱になり、人に向ければ愛情になるものだと思います。元をたどれば同じ物。比べるものではないのです」

リンは何度も頷くと私の胸へ顔をうずめます。

「さつきは夢など無いと言いましたが……リン、あなたが私の夢そのものなのです」

「……お姉様」

「好きなことをおやりなさい。たまには殿方に現を抜かすのも良いでしょう。人生、真っ直ぐ一本道ではないのですから」

「……」

「私もアナタが心配ですが……お見合いすることにします」

リンは泣き顔を見られたくないのか、私にくっついて離れようと

しません。

そんな彼女の髪を何度も優しく撫でました。

本気で私は自由になろうと思っていました。今でも少しそんな気持ちもあります。

でも、結局リンに譲ってしまいました。

自由になるにはあまりにも理由が無さ過ぎました。

やりたいことも無ければ……好きな殿方もいない。

その全てをリンは持っていました。彼女には資格があると思います。

やりたいことがない代わりに私はやらなければならないことがあります。

それを一つ一つ解決していきましょう。

……この屋敷も悪くない。

第29話 「sunlit」

「だって私じゃあ何も出来ないんだよ？ 皆が来るまでハガキだって全然読まれないし……」

何を言っても環さんの表情は変わりませんでした。

ありつたけの言い訳を言い終え、私が黙ってしまうと彼女はそれを待っていたかのように口を開きます。

「お前の覚悟とはそんなものなのか？」

「えっ？」

「ここはお前にとっての戦場じゃないのか？」

「そうだけ……」

「お前の戦いだろ？ だったらハガキを書け。動け！！ 行動しろ！！ 今、お前に必要なのは多記透でも誰かの助けでもない。自身で戦い抜く力だ！！」

「え……」

ハッキリ言われるとやっぱりショックです。

多記君は以前、『ハガキのネタの事はオレ達に任せる』と言ってくれました。

私もそれを頼りに頑張ってきたのです。

それなのに環さんは私に自分自身で戦えと言います。

どちらが正しいのでしょうか？

……と、考えることはないです。

結局、今私は一人で……皆が帰ってくる保証も無くて……ふさぎ込んでいるだけなんだから……

まとまらない気持ちがあんまり一つに集約されていきます。

そして言葉に出しました。

「……私、やる」

「おお！！ その意気だ！！」

環さんは私の肩をたたきながら言いました。

「よし、今ここで宣言しろ『多記透なんて必要ない』と」

「そんなこと出来ないよぉ……」

彼女は少し困ったような表情を浮かべ、考え込みます。

「嘘で構わん」

「え？」

「今は嘘でもいい。あとから本当に変われば問題なしだ」

「それも困る……」

「まあ、生まれ変わる儀式だと思ってやってみる……ってゆーか、
言えー!!」

「うう、分かったよう……多記君なんて必要なくい」

「声が小さい。これぐらい声を出せ『立浪裕人なんて死んじまえ』

~~~~~!!~~~~~」

「誰なんですかそれ？」

「声を出す大きさの例なのだから気にするな」

「……多記君なんて必要なくいつ!!」

「『君』をとれ」

「え~~~~~っ、嫌だよ」

大きな声を出して少し元気になりました。

今はこの嘘にしがみついて頑張ろうと思います。

夜、私は久しぶりにラジオを聴きました。

数日聴いてないだけなのにかなり時間が流れている気がします。

「何にもしないのに、なぜここに居るんですか？」

「気にするな。暇つぶしだ……ふんっ、こんなレスで私が釣られる

とでも？ と言いつつ釣られてみるか……」

環さんは机にノートパソコンを置き、ディスプレイと格闘して  
います。

ブツブツ言いながらなので少し怖いです。

「あの……いつもノートパソコン持つてるんですか？」

「んなこと言って暇があるなら、ハガキを書け！！ 存在感を出すのだー！！」

「え？ う……うん」

「そしてネタを示せ！！ 読まれるように！！」

「はい！！」

「それがハガキ職人の誇りだ！！ …… っと1さんも言っておられる」

「おっつ！！ …… って1さんって誰ですか？」

彼女の言うことはたまに意味不明です。

その原因はいつも眺めているノートパソコンにあるようですが、細かい突っ込みはしません。

お父さんは今日もテンション高めの放送です。

私も負けないようラジオを聴きます。

『今日は夏休み企画としてFAXの一発ネタ募集だ！！ 今からスタート！！』

これはチャンスです。

今ハガキを書いても読まれるのは何日か後ですが、FAXなら今すぐ読まれます。

「早速、おあつらえ向きな企画じゃないか。とっととネタを考えろ」  
「うん」

私がネタを書こうと紙に向かうと環さんは立ち上がりました。

「どこ行くの？」

「……どこ行こうが私の勝手だ。お前はまた誰かに助けて欲しいのか？」

それだけ言い残すと部屋を出て行きました。

静かになった部屋で黙々とハガキを書きます。

この部屋に一人いるとやっぱり淋しいです。でも……

『お前の戦いだろ？』

と環さんは言いました。その通りです。これは私の戦い。私は周りを見渡し、誰もいないことを改めて確認すると白い紙へペンを走らせました。

前に多記君がFAXは前半勝負だと言っていました。だとすると、ここである程度の数を書いてコンビ二へ持っていく方法しかありません。

とか考えていると机に置いてあった携帯電話が鳴ります。表示を見ると見たことない電話番号でした。

恐る恐る電話に出ると、聞き覚えのある声が聞こえます。

「よし、思いついたネタを言え」

「環さん？ なぜ電話を？」

「さっき確かめたのだが、お前のうちはFAX無いだろ？ だから、近くのコンビ二へ行つてネタを送るしか方法がないと判断したのだ」

「それは分かりますが……」

私が聞きたいのは『なんで電話番号を知っているのか』ということなんですけど……

「ネタはそこでお前が考えればいい。番組の流れとか考えてネタを携帯で伝える。そして私がFAXを送る。完璧な作戦ではないか」  
電話番号のことはさておき、環さんの優しさに私は少し泣きそうになってしまいました。

手伝わないと言っておいて、ちゃんと手を差し伸べてくれる。環さんはいい人です。

でも、ここで泣いたら彼女は怒るに違いありません。

「環さん……」

「何だ？」

「あの……ありがとう」

「気にするな好きでやったこと。それにお前は私の友人に似ているからついつい肩入れしてしまうのだ」

「……うん。わかったよ……じゃあネタ言っね」

「おうー!!」

私は今思いついた、とっておきのネタを叫びました。

「ジャガイもん!!」

「は……?」

すると環さんは少しの間黙っていました。

きつと用紙にネタを書いているに違いありません。

「あの……一つ聞いて言いか?」

「うん!!」

「それは……『ドラもん』と『じゃがいも』をかけているのだな?」

「うん、そうだけど……面白いでしょ?」

「いや……まあ……お笑いの基準は人それぞれだからな……」

さつきと比べて話すトーンが下がった気がするのは気のせいでしょうか?

とにかく私は一生懸命にネタを作るだけ。

頑張ればきつとなんとかなるはずです。

努力はきつと報われるはず……

一時間後……まったく読まれません。

多記君のFAXネタの法則から行けばもう時間がありません。

でも、ネタが読まれない理由が良く分からないです。

……書き方が悪いのかなあ……と考えていると環さんから電話がかかってきました。

「なあ、もう少し他の奴らの書き方を参考にしたら?」

「え? ……うん」

他の人と私の違いって何だろう?

確か……佳代ちゃん……芸人さん達のネタを上手く使ってたよね……そうだ!!

最初に教えてもらった前田なんとかさんのネタを書こう!!



ええ〜と、前田何さんだっけ……

この芸人さんの名前を思い出すのに少し時間がかかってしまいました。

でも、これで一つネタが書けました。

そのネタを元にくっつか作って早速、電話して伝えます。

「……なんでお前が前田 郎を知ってるんだ？」

「ええ！！ 環さん知ってたの？」

「基本だ」

環さんは侮れません。

次に川上君のネタを思い出します。

……下ネタですが一人でやっていくためには書かねばなりません。

確か……『下ネタで重要なのはダブルミーニングだ！一つの言葉で二つの意味を持たせる』とか言っていたような……少し難しいですが考えます。

なんと言うかエッチなネタを書いていると言うよりは、言葉遊びをしている気分です

こうしてその人たちのネタをやってみると、ただ外で見ているのと実情は違うのだと分かりました。

いくつか書くことができたで電話します。

少し恥ずかしいです。

「……どう？」

「お前、古い下ネタテクニク使ってるなあ。直接書けばいいと思ってるバカよりはましだな。実際、私が紙に書くわけだし。よし、送ってみる」

環さんにも良い印象を与えたみたいです。

最後に多記君は確か……

『まずはネタにさりげなく八十年代のネタを入れる。お前の父さんに「懐かしい」とか「こんなの聞いて分かるヤツはいるのか？」と

「かわせれば成功だ」

「と言っていた気がします。」

早速、前に買った80年代特集の雑誌を開きネタを考えます。

こうして考えると皆に教えられたことは大きいです。

自分でやると言っても結局は自分の力でない気がします。

そのことを環さんに電話で、ネタを伝えるついでに話してしまいました。

「人は一人では何も出来ない。本やテレビ、周りの人間等から影響されたモノを自分の力に変え、大きくなる。これをなんと云うか知ってるか？」

「え？ 何だろう？」

「それを人は成長と言った」

「……成長」

「成長して独り立ちをしていく。振り向けば、いろいろな人を通り過ぎたことを実感する」

「環さん……すごいです」

「気にするな。ただの受け売りだ。これで一枚でも読まれれば成功と言えるだろう」

「うん」

その後も二時間半の間、ネタを書き続けました。

しかし、読まれることはありませんでした。

とうとうFAX受付が締め切られます。

残りも後30分、お決まりのコーナーがあるだけ。

電話でFAXが終了したことを伝えます。

「そうか……残念だったな。今からそっちに戻る」

「うん」

「諦めるな。この放送が最後の放送ではないのだから」

「……ありがとう」

電話を切ると私は脱力して、大の字に寝転びました。

今でも、どんどん番組は進んでいます。

それを耳にしながら、涙が出てきました。

凄く悔しい……次はもつと良いネタ書いてやる……

これまでは読まれなくて悲しいとか皆と比べて悔しいとかはありません。

でも、今は素直に誰のせいでもなく、落ち込むことも無く……自分の中で何かがつぶっています。

きっとこの悔しさがあればまた明日も書ける……いや、今からでも書ける……

そう思うと居てもたつてもいらなくなりました。再び起き上がり私は机に向かいます。

「私はまだ負けないっ!!」

番組はエンディングに差し掛かりました。

しかし、私はハガキを書くことを止めません!!

その時でした。

『番組最後にお別れの一ネタを……ペンネームは……』

\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*

私は突然訪ねた波乗澄音という子の家に戻ることにした。

それにしても……何でこう私は人がいいのだろう?

放っておけばいいのにかまってしまふ。きっと、藍子のせいだ。

そうだ、アイツのせいにしておこう。

ゆっくりと波乗家の坂道を登りきり、家の玄関に向かうと怪しい人影が三人うごめいていた。

そんなことを恐れる必要もないので私はドンドン突き進む。

すると奴らは私に関わらず何かを喜んでいるみたいだった。

「やったやん!! 最後の最後で読まれたしっ!!」

「おおおおおっ！！ 澄音ちゃん、アンタすげえよ！！」

「あゝあ、リンちゃんも参加したかったあゝ。二人ともリンちゃんが迎えに行つて、ここまで来たのに、なんで玄関に入らなかったの？」

「……それを言うなよ……つてお前も入らなかつただろ！！」

「何にしても勇気が要るなあ……」

私はこいつらに一言言つてやることにした。

「お前等、揃いも揃つてバカかっ！！」

\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*

奇跡でした。最後の最後に宝条リンのネタが読まれたのです！！

私は立ち上がり飛び跳ねて喜ぼうとしました。

でも、飛び跳ねるのは止め、静に拳を握り、ジツとそれを見て実感を噛み締めます。

もう私は一人なのです。手放しでは喜びません。

その時、ノックの後、部屋のドアが開けられます。

入ってきたのは環さんでした。

「あつ、環さん。ありがとうございます」

「ふん、私は何もしていない。どうだ？ 一人で成し遂げた気分は」

「なんと言うか……嬉しいです。でも、まだこれからだつて思うとワクワクします」

「一人でやつて行けそうか？」

「はいっ！！」

すると環さんは不敵な笑みを浮かべ、後ろを向きました。

「おい、お前らはもう要らないつてさ！！」

「え！？ 環さん、今なんて言つたんですか？」

環さんは何も言わずにドアを開けました。

「 あっ!!! 」

そこには佳代ちゃん、川上さん、琴和さんが立っていました。

「 も、申し訳ございません!!! 」

真っ先に川上さんが私の前で土下座を始めました。

さらに後ろから佳代ちゃんが恥ずかしそうに私へ話しかけます。

「 あっ、あのな……澄音 」

「 わ~~~~んっ!!! は~~~~ちゃん、ごめんね~~~~!!! 」

佳代ちゃんが何か言う前に琴和さんが私に飛びついてきました。

いきなり私で私も何がなんだか分かりません。

少なくとも確かなのは良いことが起こったのだということです。

何と言うか……一人でもやれるぞと決心した途端、皆が戻ってきてくれました。

私にとっては奇跡だと思いますが、環さんは必然だと言います。

理由はわかりませんが、そういう事にしておこうと思いました。

次の日からは再び琴和リンの開始です。

佳代ちゃんが元気良く気合を入れます。

「 よしっ!!! 夏休みも残り少ないけど頑張るで!!! 」

「 ……で、何でこいつは居るんだよ。さっきからパソコンばかりや

りやがって 」

「 気にするな、空気だと思え 」

隣では川上さんと環さんが喧嘩をしています。

「 思えねえよ、寝転びながらパソコンつくづくろぎすぎだっ!!! 」

「 だまれ!!! この厨が!!! 私がいなかったら一生この家に入れ

なかつたくせに!!! 」

「 うっ…… 」

私の後ろでは琴和さんが機嫌よく絵を描いています。

なんだか昔に戻った気がします、気にしません。

皆それぞれ何かを掴んだかのようにすっきりした表情でハガキを書いているから。

後は多記君だけです。彼が来るまで私達で頑張ることにしました。

そして、今日も「ラジオデイズ」は放送されています。

『よし、じゃあ次のハガキだ。えーっとこれはペンネーム、マツチヨ石松君からのネタ……』

「え~~~~~~~~っ!!!!!!!!」

環さん以外の皆が『マツチヨ石松』という言葉を聞いて驚きます。

ど……どういうこと!?!?

多記君なの?!

### 第30話 「永遠シエルトー」

一週間以上前。

まぶたを閉じていても伝わってくる光。

日の出が差し込んでくることで僕は目が覚めた。

まず見えたのは木で出来た床。ゆっくり起き上がる。

やたら後頭部が痛い。頭をさすりながら周りを見渡す。

何も無い。

出入り口を見るとやたら頑丈なドアがついていた。

覗き窓があつて、ガラスではなく鉄格子になっている。

なんだか……これじゃあ牢屋みたいだな……

「なっ!？」

何だここは!？」

僕は必死に一番新しい記憶を探る。

確か、波乗と喧嘩して

「波乗……」

今はそのことについて深く考えるのは止めよう。

それから玄関を出たところで玲子さんに会って……ペンシル祭に

殴られた。

すごく間が端折られているが気にしてはいけない。

とりあえず立ち上がることにした。

手足を何度か軽く振り、体が動くことを確認するとドアへ向かっ

て一直線に走る。

そのまま体ごとぶつかった。

ドアは何のダメージも受けずに僕は派手に跳ね返った。

何回ぶつかっても結果は同じ。

とりあえず諦めた僕は床に寝転んだ。

携帯も財布も抜き取られてる。とにかく、誰かがここへ来るまで

待つしかないだろう。

どれぐらい時間が経ったか分からない。僕は微かに足音が近づいてくるのを感じた。

ドア付近に身を潜める。ドアが開いた瞬間に飛び出す作戦だ。

ドア側の壁に張り付いていると覗き窓から誰かの視線を感じる。

緊張状態が続く中、ドアの向こうから聞き覚えがある声が聞こえた。

「多記君、そんなことをしても無駄。早くドアから離れなさい」

「その声は玲子さん……こんなところへ連れて来てどういっつもりだ……！」

「理由を話すためにここへきたの……それにお腹空いてるでしょ？言われてみればすごくお腹が空いている。

とりあえずドアから離れることにした。

けっしてお腹が空いていたからじゃない、今の状況を把握するためだ。

ドアを開けて入って来た玲子は僕に微笑みかけるように近づいてくる。

僕は玲子さんをじっと睨みつける……いや、玲子さんだけじゃない。

彼女の隣にはペンシル祭がいたのだ。

「多記君、お腹空いたでしょ？ これ食べて」

差し出されたのはおにぎり三個と大根の漬物。

食べたいのは山々だけど我慢して横を向く。

それをみてペンシル祭がため息をついた。

「無理しないでくれる？ 貴方の涎など見たくもない」

僕は慌てて、口元をぬぐう。

「んなこと、お前に言われたくないっ！！ 人の頭をおもいつきり殴りやがってっ！！ っっていうか何でお前がここに居るんだよ！！」

「言葉遣いに気をつけなさい。貴方の命運は私が握っているんだか



ら

「じゃあ、やってみろよ!! お前ぐらい道連れにしてやる!!」

「ふ、二人とも喧嘩は止めて。多記君も無理しないで……ね、おねがい」

「ふん……」

「……やれやれ」

僕は返事をせずにおにぎりへ手をつける。

玲子さんはニッコリしてペンシル祭はそっぽを向いた。

お腹が空いていたこともあって、すぐに全部食べた。

食べ終えた僕を見て玲子さんは優しく話しかけた。

「美味しいでしょ? それね、ここで作られた無農薬野菜なんだよ」

「ここで作られた? どういうことですか?」

「では、ついて来てもらおうか」

ペンシル祭が僕と玲子さんの会話を打ち切り、合図すると数人の男が入ってきた。

男達は僕の腕を掴むと手錠をはめ、体には紐をくくり付け逃亡できないようにする。

僕も抵抗はしたけれど、数人に押さえつけられれば身動きは取れない。

状況がつかめないまま外へ連れて行かれる。

ドアを出ると、ここが大きな建物の一部だという事が分かった。

大きな建物とはいえ、作りはかなり粗末なプレハブ建築。

ドアに体当たりするより壁に体当たりしたほうが簡単に脱出できたのかもしれない。

大きな建物を出ると、ここが周りを木に囲まれた森の中だということが分かった。

皆、黙ったまま淡々と進む。とりあえず、玲子さんに尋ねてみた。

「一体、ここはどこなんですか?」

「波乗家の敷地内よ」

「……え？」

人工的に作られた小道を進むと少し開けた場所に出た。

そこにはテレビなんかでよく見た、災害時に建てられる粗末なプレハブの仮設住宅と呼ばれるような建物がたくさん建てられていた。僕らはそれを横目にどんどん進んでいく。

「何なんだよここは……」

「……楽園」

今まで黙っていたペンシル祭がポツリとつぶやいた。

それに呼応するかのように男達も頷く。

玲子さんも心なしか微笑んだ気がする。

しばらくするとまた開けた場所に出た。さつきよりも広い場所だ。辺りを見渡すと一面の野菜畑だった。数人の男女がせつせと畑仕事に精を出している。

この光景に呆然としてみると玲子さんが僕に話しかけてきた。

「さっきの大根の漬物もここで作られたんだよ」

「そうなんですか……」

「驚いた？」

「ここ本当に波乗家の敷地なんですよ？ こんな場所があったなんて……」

僕と玲子さんの会話をペンシル祭も加わる。

「波乗家の敷地のほとんどが木々に囲まれているからな」

「そろそろ教えてくれてもいいんじゃないのか？」

玲子さんは頷き、僕の問いに答えてくれた。

「ええ、私達は貴方に分かって欲しくて、閉じ込めたというのも理由の一つだから。まず、この場所は波乗家の敷地内。広い敷地を利用して、こうした家（というより小屋）がいくつもあるの。そこで皆、野菜なんかを作って自給自足してるの」

「皆？」

「そう、『ラジオデイズ』のリスナー達」

「はあ!？」

今まで木々が邪魔をして見えなかったけど、この敷地内にはリスナーが生活していたのか……どうりで電波が敷地以上に飛ばなくても皆ハガキを出せるわけだ。

でも……

「何のためにそんな事を？」

僕の問いに答えようとする玲子さんを制するようにペンシル祭が僕の前に立つ。

「終わらないラジオのため」

「終わらないラジオ？」

ペンシル祭はうなずく。

「ラジオにしろテレビにしろ、聴取率や視聴率、スポンサーの意向なんかの外の圧力にいつも泣かされてきた。良い内容なのに終わる番組があとを絶たない。結局、残るのは大衆に媚びた最大公約的な低脳で下品な番組ばかり」

「……」

「波乗丈も自分のスタイルを貫いたためにそうした流れに乗り切れず、落ちぶれていくラジオパーソナリティーの一人だった。普通ならそのまま消えて終わり。何処かの地方で細々と仕事をこなすだけだったかもしれない。でも、波乗丈は諦めなかった。彼の番組は人気は無かったが、熱狂的な信者によって支えられていたのだ。彼らがお金を出し合い、ラジオ局を作ろうと提案したのだ」

にわかに信じられない話だ。そこまですることに何の意味がある？

「リスナーはこうやって野菜を作って売ったり、この町でアルバイトをしたりして運営費を稼ぐ。そして、波乗丈……ジョニーは我々に最高の放送をする……永遠に……」

「え……永遠……」

ここで『永遠はあるよ』とか言うてはいけない。

そもそも永遠の定義が違うようだ。

「どう？ すばらしいでしょ？」

「……これじゃあ……まるで新興宗教だな」

僕はかなり皮肉を込めていったつもりだった。

しかし、ペンシル祭はまんざらでもない顔をする。

「そうね、近いかも。ジョニーが教祖で私達は信者とも言えは良  
い？」

「マジかよ……」

玲子さんは僕の表情が変わっていくのを敏感に察知したのか、慌  
てて話しに加わる。

「勘違いしないで。この人たちは本当に丈さんのラジオが本当に  
好きなの。彼が普通の放送局で番組をやった時代、このラジオだ  
けが唯一の楽しみで辛い仕事や環境に耐えてた人達なの」

「……」

「丈さんは読まれないハガキにも目を通して、返信の必要がある人  
にはきちんと返事を書いて励ましていた……ホントにすごい人。だ  
から、これからも守っていききたい。大切な時間を私達の手で……」

それは所謂シエルターだ。

現実の流れから身を守る場所。

その中に入れば変わらないものが存在する。

ラジオを続けたい波乗丈と番組が終わって欲しくないリスナー達。  
両者の意見は合致したわけだ。

確かに、僕も玲子さんの番組が終わったとき夢見た『終わらない  
時間』。

なくならない抛り所。それは、甘美で温かい誘惑。

でも。

「波乗澄音は関係ないだろ！ アンタ達の勝手な現実逃避に巻き込  
まれる筋合いはない！」

「そうね。でも……澄音ちゃんには悪いけど、これは譲れない。そ

のためには手段を選ばない。多記君なら分かってもらえらると思っただけだ……」

玲子さんは下唇をかねて僕を睨みつける。

このやり取りを見たペンシル祭は玲子さんに冷たく言った。

「もういいでしょう。これ以上、リスナー部門に口出しするのは止めてもらいましょうか？」

「……」

「製作部はジョニーを中心としたリスナーを喜ばせる番組作りをすればいいのです」

「……わかった」

玲子さんはそれ以上は何も言わずに立ち去っていった。

組織作りはある程度出来ているらしい。

ますます怪しい宗教だ。

「わかっただろ？ 君達が優勝して波乗丈と会うことによつて『番組を止める』なんて言い出せば、私達の生活が根底から覆される。

私達にとって波乗丈の言葉は絶対なんだ」

「……だつたら尚更止められないな。僕がいなくなつたぐらいで宝条リンの勢いが止まるとでも思つたか？」

「多記君……貴方、本当に自分の重要性がわかっていないようね」  
「……」

ペンシル祭の顔が薄笑いに変わった。

僕は信じてる。波乗は一人でも上手くやっついていけるはずだ。

### 第31話 「なにしてんの？」

朝。何もせずに寝転んでいる。

することがないから当たり前なのだけれど……

覗き窓から誰かの視線を感じる。

しかし、僕はそれを無視した。

するとしばらくしてドアが開けられると小太りの男が入ってきた。

「ご飯の時間だよ」

「……」

「あれね？ 元気ないね。初めの勢いはどうしたのかな？ ウヒヒ」

「……」

「もう、答える元気もないのかい？」

ここへ来て、もう一週間になる。

最初の3日間は僕のハガキのストックがあつたせいでいつも通り読まれたが、それ以降はさっぱりだ。

なぜそんなことが分かるのかと言えば、この部屋にも「ラジオデイズ」だけは流れるようになっていてからだ。

僕に失望感を与えようとするペンシル祭のアイデアらしい。

今のところその作戦は上手くいっている。

やっぱり、波乗に期待するのが無理だというものだ。

「最近、宝条リンのハガキ全然読まれなないね、良い事だよ。ウヒヒ」  
「食事を持ってきた男はタオルで自分の汗を拭きながら、頼みもしないのに話しかけてくる。」

「食事をしながらこいつの話聞き流す。『ウヒヒ』ってなんだよ。」

「おかげでボクのハガキが読まれるんで助かってるよ、ウヒヒ」

「……黙れ、クックルドウー」

「もお、冷たいなあ、同じハガキ職人仲間じゃないか」

「一緒にすんな」

「ウヒヒ」

三度の食事を運んでくるのも皆、「ラジオデイズ」にはがきを送っているハガキ職人だ。

クックルドゥーをはじめ、100g98円なんかにも会った。

どうやらこの住人は宝条リンのメンバーである僕に興味があるようだ。

普通にしているも覗き窓から何人かの視線を感じる。

特に変なのが気まぐれサーファー。

僕らやペンシル祭とわたりあえるハガキ職人なので興味があった。そして、2日目にドアをノックして食事を運んできたのはニット帽をかぶり、スキーのゴーグル、白いマスクをして、服装は半そでにジーパンというわけの分からないいでたちの男だった。

「僕に顔を隠す意味あるのか？ っていうか暑くない？」

「……」

僕の言うことをまったく無視して淡々と仕事を済ますと。帰っていった。

気まぐれサーファーだと知ったのは、その後に運んできたハガキ職人に聞いたからだ。

今現在、クックルドゥーは相変わらず喋り続けている。

他の人の愚痴がほとんどだ。コイツは畑仕事ではなく、町でパソコンショップを経営しているらしい。

「まったく……ペンシル祭さんは畑仕事してもうける金より、拙者のパソコンショップの方が稼ぎが良いっていうことをまったく分かってないんだよね……ホント、アイツ等無駄働き……ウヒヒ」

「お前、嫌われてるだろ？」

「っ！……失敬なっ！！ 小生は一人が一番落ち着くんだよ！

！」

「ふーん」

「何にしるペンシル祭さんはもうちょっと愚生を優遇して欲しいものだ」

「……頼むから一人称を固定してくれ」

この「ラジオデイズ」のリスナー達を作るコミュニティでは現サーファーキングのペンシル祭が一番偉いらしい。

皆が二言目には「ペンシル祭が……」とか言っていることから分かる。

ということは、リーダーは代々サーファーキングになるところか。

「きつとサーファーキングになれば拙僧の時代が来るはず……ウヒヒ……」

「多分、一生来ねえよ」

「し、失敬なっ！！」

そう考えてみれば、まったくの部外者である宝条リンが優勝すると秩序が乱れるのは必至だ。

なんとかしなければと思うのも当然か。

クツクルドゥーが食器を持って帰った後は暇になる……訳ではない。

食後に一服をしているとドアをノックする音が聞こえる。

僕が返事をする数人の男女が入ってきた。

「今日もネタを見てもらえますか？」

「ああ、いいですよ。見せて」

目の前には大量のハガキが置かれる。

いつのまにか、それに目を通すのが僕の仕事になった。

キツカケは食事を持ってきた子が僕に話しかけてきたことから始まった。

最初は口頭だけだったのだけれど、今では実際にハガキを持ってきて直接アドバイスしている。

なぜこんなことをしているかと言えば、僕が考えた少なからずの



抵抗はこうやってハガキ職人の底上げをして、ペンシル祭の採用率を下げるのだと思っただからだ。

「別にこれでも悪くないけど……最後にもう一ひねりしたらどうかな？」

「そうですね……私もそう思っていました」

「僕ならキツイ下ネタの名詞で締めるけど。体言止ってヤツ？ あれやるとネタに加速力が付くんだよ。上手くいけばウケる」

「……なるほど」

ハガキを持つてくる人は皆、僕より年上だ。

だけど、丁寧な言葉遣いで話しかけてくる。何だかすぐつたいし、気持ち悪い。

ネタを通して色々な話をして分かったことがあった。

それは皆が社会や学校をドロップアウトした人ばかりなのだ。

理由はさまざまで、職場や学校のいじめにあつたり、仕事で大きな失敗をしたとか、ずっと引きこもってた等。ほとんどの人が、人との距離を取るのがあまり上手くない。

だから、丁寧な言葉遣いで壁を作っているのだと思う。

この人達が失意のどん底に落ちたとき思い出すのが、楽しかった時期に聴いていたラジオのこと。

ジョニーのラジオを聴いている時だけ学生時代に戻ったりして楽しいらしい。

実際にハガキのネタ、ラジオの内容の話になるとホントに楽しそうに話す。

こういう人たちと話していると自分が玲子さんのラジオを聞いていた時期を思い出して、同情してしまいそうになる。

宝条リンは復活の兆しもないし、このままでいいのかもしれない。僕がネタを見るといふ話は色々な人の耳に入ったらしく、ドアをノックする音が絶えなかった。

彼らからすれば、ハガキを書くことが全てで、それだけに必至だ。

こんなことをしながら今日も一日が終わる。

「ラジオデイズ」の時間になると皆は各自の部屋でラジオを聴く。僕も一人何もない部屋でスピーカーから流れる放送を聴いている。やたら廊下が騒がしいな。どうやら「ラジオデイズ」でFAX募集の告知があつたらしい。

もう、どうでもいい話だけれどな。波乗一人じゃ何も出来やしない。

いつまでここに居るんだろ？

もう直子さんや環あたりが騒いでもおかしくないはずだ。警察沙汰になつてないだろうか？

もし、なつてたらこの場所も壊滅してしまう。

……って、それでいいじゃないか。何の心配をしているんだよ。ネタのことを考えていれば暮らしてられる生活……悪くないかもな。

ここから出たつて波乗との問題も解決しなきゃいけないし、二期が始まれば工藤や川上とも顔をあわせなくちゃあならない。

面倒だな……今日もまったく宝条リンはハガキを読まれないし。

考え事をしている間に番組は終わりを迎える。

何も起こらないまま今日が終わる。

そう思つてた……

しかし

『番組最後にお別れのネタを……ペンネームは……久しぶりだぞ

っ！！宝条リンからだ！！』

「なんだって！！」

僕は思わず立ち上がる。正直、信じられなかったし、諦めたいだ。波乗のネタのレベルを知っているだけに読まれるはずがないと思つていたので。

でも、波乗は諦めていなかった。

あんな程度の実力で……誰かに頼らなくちゃあどうしようもなかったのに……

それでも彼女はネタを書いていたのか。  
意味も無く体が震えてくる。

……諦めたらそこで負けじゃないか。何やってるんだ？  
僕も……何かしなきゃ。

震えが武者震いだと理解するまで時間はかからなかった。

次の朝。朝食を運んでくるクツクルドゥーにペンシル祭を呼ぶように頼む。

半ば脅すように頼んだのですっ飛んでいった。

数分して何人かの取り巻きをつれてペンシル祭が現れた。

僕は怯むことなくペンシル祭と対峙する。

「悪いが、この暮らしにも飽きた。帰らせてもらおう」

「そんなことができるとも思っているの？」

「出来るさ……ペンシル祭、勝負しろっ！！ここではお前がリーダーなんだろ？」

僕の言葉にペンシル祭は薄笑いを浮かべる。

「……私がそんな無駄な事をするとも思ってた？」

「怖いのか？」

「挑発には乗らない」

「……確かコンビニで言ったよな『人生において負けたと感じたことは一度もなかった』って。あの言葉は嘘か？ それとも負け戦は避けてきたっていう意味か？ この住人は皆そうだよなっ！！  
負けたくせに……それを認めたくなくて、ここに逃げ込んでるだけだ！！」

明らかにペンシル祭の表情が変わっていくのが分かった。

メガネの奥にある瞳が鋭く僕を射抜く。

「黙りなさいっ！！……そこまで言うなら良いでしょう。身の程

を知るといい。今まで貴方は数人がかりで私と互角だったことをお忘れなく」

「甘く見るなよ。少し前は僕が宝条リンのハガキをほとんど書いていたんだ」

「……よろしい。では、勝負は3日間読まれたハガキの枚数で勝負しましょう」

「分かった。公平を期すために僕はペンネームを変えてハガキを出す」

「いいでしょう。で？ 名前は？」

「マツチヨ石松」

……とっさに言ってしまった。

もっとカッコイイ名前にすれば……

ああ……気のせいかな失笑が聞こえるんですけど……

### 第32話 「絶対、負けられない」

静かな部屋。床にはハガキが散乱している。

窓から差し込む光がペンを走らせる手を照らすことで朝になったと気付く。

僕は黙々とハガキを書いていた。

しばらく、ネタハガキを書いていなかったせいもあって溜まっていたものが一気に流れ出した気がする。

正直、ペンシル祭に勝てる確率は低い。

自分の力は信じてるが、相手は元プロだ。

ハガキを書きながら頑張ろうと気持ち盛り上がったり、駄目かもと沈んだ気持ちになったりを繰り返している。

「あのー、入っていいですか？」

ドア越しに声が聞こえた。どうやら朝食を持ってきてくれたみたいだ。

僕が中に入るように促すと、数人の男女が朝食を持って入ってきた。

彼らは僕がネタのアドバイスをした人達だった。

「あれ？ クツクルドゥーは？」

「あの人が『拙者はペンシル祭派だからアイツの朝食は持っていかない』って……」

「よく言うよ。いつも文句ばかり言ってるくせに」

とりあえずハガキを書くのをやめ、朝食をとることにした。

食べながら彼らの持ってきたネタハガキに目を通し、アドバイスを送る。

一人の男性が嬉々として僕に話しかけてきた。

「この前、アドバイスを参考にネタを練り直したら読まれましたよ

！！ ありがとうございます！！」

「ああ、ラジオ聴いてました。良いネタハガキだと思います。ホントにこのネタ好きなんだなあ〜って」

「自分の書くネタですからね!! あの……」

「？」

「オレ達、マツチヨさんを応援してますから」

「……すみません。マツチヨさんは止めてください。多記透って名前があるんで……」

ここでは本名ではなくペンネームで呼ばれる。

本名で呼ばれるのは現実感を呼び起こしてしまうかららしい。

だから、本名なんて誰も名乗らないし、お互いの本名も知らないということだ。

「でも、そんな事言っただ大丈夫なんですか？ ペンシル祭は皆さんのリーダーでしょ」

僕の言葉に誰も答えることが出来ず、室内は静まる。

黙っていることが十分な答えになっていた。

ペンシル祭って人望がないのかもしれない。

しばらくして、女性が僕にポツリと言った。

「なんだかペンシル祭さんって近づきにくいんですね」

「……」

「なんていうか……あの人、自分のネタが好きだとは思えないんです」

「どういうことですか？」

「だって、ハガキ読まれても全然喜ばないし……だいたい前に私のネタハガキを見てもらったことがあったんです。それで……ハガキを一瞥した後、こう言ったんです。『好きなことをネタにしているよっじゃあ、一生ハガキは読まれない』って」

「なるほどね」

外がやたら騒がしくなった。ここの生活も動き出したらしい。

「もう、仕事の時間なんじゃないですか？」

「あつ、そうですね……じゃあ、頑張ってください」

慌てて食器を片付け、彼らは出て行った。一人になった部屋でさっきの話を思い出す。

ペンシル祭の言いたいことは分からないでもない。

ハガキを読んでもらおうと思えば、自分の好みより選者の好みを優先させるというのはありうる話だ。

実際、僕も波乗にもそうアドバイスした。

しかし、それだけじゃあハガキは読まれない。

方法論ばかりを追って本質を見失ってはいけないと思う。

例えば宝条リンは工藤が笑いを担当している。

これは彼女がお笑いについて詳しいし、好きだからだ。

個人の「好き」という要素から生み出されるパワーを侮ってはいけない。

ペンシル祭は元プロだから、好きなことをしているだけでは通用しない世界を知りすぎているのだ。

少なくともここはそういう世界ではないだろう。

……これで、ますます負けられなくなった。

そして……勝負の三日間が始まる。

僕は三日目のネタを書いていた。辺りは静まり返っている。

皆、自室でラジオを聴いているのだろう。

そんな中「ラジオデイズ」が開始する頃、数人の足音がした。

足音は僕の部屋の前で止まり、ドアが開く。

入って来たのはペンシル祭とその取り巻きだった。

「何だよ」

僕の言葉にペンシル祭は答えず取り巻きの中の一人、10089

8円が答えた。

「今日から3日間は君の敗北する姿を見ながらここで放送を聴こう  
と思ってるね」

「……勝手にしろ」  
ペンシル祭を見ると僕を睨んでいた。  
てつきり余裕の笑みでも浮かべているのかと思ったので意外だ。  
とうとう放送が始まった。

『さあ、今からの時間はみんな手を止める！！そんなに考え込んで落ち込んでても意味が無いぞ！今からの3時間は全てを忘れて“だらだら”するんだ！』

お決まりのセリフだが、今日ばかりはだらだらしていられない。

フリートークの後、番組はハガキのコーナーに移る。

コーナーが始まって早々、ペンシル祭のハガキが読まれた。

取り巻きは拍手をして喜ぶ。ペンシル祭は喜ぶ様子がまったくない。  
い。

少しして、僕のハガキが読まれた。

あからさまに舌打ちや「つまんねー」などの言葉がでる。かなりムカつく。

『このハガキはペンネームペンシル祭から……』

『次のハガキは……ペンネームマツチヨ石松から……』

最初はあまり読まれることは無かったのだが、徐々にお互いの名前が交互に読まれるという展開になってきた。

「ラジオデイズ」はポイント制だけど、今回は枚数勝負なのでMVP等を気にすることはない。

それにしても……こうしてペンシル祭のネタを改めて聴くと何だか違和感を感じる。

確かに凄いのだが……何処か商品めいている。

コーナーの狙いどりのネタなのだが……悪い見方をすればあざとい。

はつきり言えば、綺麗だけど中身がないのだ。

「ペンシル祭」



「……………」  
ペンシル祭は黙ったまま答えない。それでも構わず僕は話し続ける。

「何が楽しくてハガキを書いているんだ？」

「わずかに彼女の眉が動く。」

「やがて、ため息を一つして答えた。」

「くだらない質問。禅問答でもしようっていうの？ それとも人生相談？ 『何故人は生きているの？』っていう具合に」

「誤魔化すなよ。答えられないのか？」

「少なくとも、ここではサーファーキングがリーダーなの。ハガキを書くことが自分の存在理由を証明するものになる。好きも嫌いないでしょ？ じゃあ貴方に聞くけど何故貴方は学校に行って勉強するの？ 好きだから？ そういう人も少なからずいるでしょうけど……ほとんどの人は違うでしょ？ 学校では勉強しなくちゃ存在理由をくれない。だから好き嫌いに関わらず貴方達は勉強する」  
「別に勉強だけじゃない。他の好きな事を見つけて頑張るヤツだっているだろ」

僕の受け応えに明らかかな嫌悪感を示すように顔を歪ませてペンシル祭は反論した。

「『他の好きなこと』？ ……負け犬の遠吠えね。学校の勉強なんてのはある程度の方法論をもって、それを確実に実践すればどうにかなるものなのに、それさえも出来ない落伍者の言い訳よ。だってから学校を辞めればいい。……話は逸れたけど、ハガキを書くことだつて同じ」

「おい……」

「ここはハガキを書くことが全て。いわば、ハガキを書くプロが集う場所。結果を出すことが第一で気持ちなんて二の次なの」

「ちよつと……」

「『好きだからハガキ書いてる』なんて虫唾が走る。そんな人はこ

「ここら出て行って欲しい!!」

僕を無視して畳み掛けるように話すペンシル際に冷静さは無かった。

まるで、口げんかをする子供のようだった。

「ちよつと待てよ!! なんてそんなにムキなってるんだ?」

「っ!!」

自分の状態に気付き、ペンシル祭は僕から目を逸らした。

眼鏡を指で上げ、手で髪を何度か撫で、時間を置くと彼女は呟いた。

「……別に。生理的に貴方を受け付けないだけ。私は絶対に負けな

い

「……」

再び室内は静かになった。

番組は後半に差し掛かるとある変化が訪れた。

それは僕がペンシル祭と互角に渡り合う上で重視していた要素が現れた証拠だった。

『続いてはペンネームマッチョ石松から』

「おいおいこれで3枚連続で読まれてるぞ」

さすがにペンシル祭の取り巻き立ちもざわめき出した。

僕が考慮した要素。それは……新人は優遇されるという要素。

はつきり言つて凄くセコイ。しかし、これもテクニク。ペンシル祭も分かっているはず。

ネタ自体は確かに名前を隠して選ばれるのだろう。

しかし、放送の場合はどうだろう?

放送時間には限りがある。あるハガキのネタに引っかけかり、ジョーが話を始めたら?

自然に読まれるハガキが制限されるはず。

そんな限られた時に優先されて読まれるのは常連か新人か? 答えは簡単だ。

「卑怯だぞ！！ マツチヨ石松っ！！」

取り巻きの誰かが僕を非難した。

しかし、完全に落ち着きを取り戻したペンシル祭がそれを静止する。

「落ち着きなさい。こんなことは初日だけです」

確かにその通り。だが、これで初日は僕の八ガキが勝るだろう。

そして番組は終わり、改めて集計した枚数を考える。

ペンシル祭        8枚

マツチヨ石松    11枚

予想以上の勝利だった。

この結果にペンシル祭は動揺した様子は無かった。

二日目。この日から真剣勝負といえる。

今日もペンシル祭とその取り巻きはここへ来て放送を聴いていた。ある程度覚悟はしていた。

自分の計算では初日のアドバンテージでなんとかしのげればと思っていた。

しかし、放送が始まると考えてもみない展開になった。

今まで鳴りを潜めていた宝条リンが読まれたのだ。

ネタの内容を聞いてみると波乗が書いたものではないと分かる。

僕の想像が正しければ工藤と川上が戻って来たに違いない。

どうして戻ってきたのかは分からないけど良い事には違いなかった。

そのアオリを受けて僕とペンシル際の八ガキが読まれにくくなった。

つまり、あまり差が付かないということ。

思わぬ援護射撃を受けて番組は終了した。

今日読まれた二人の八ガキは

ペンシル祭        5枚

マツチヨ石松 5枚

合計すると

ペンシル祭 13枚

マツチヨ石松 16枚となった。

この結果にこの状況に言葉を無くす取り巻き。

ペンシル祭さえも下唇をかんで悔しさを我慢していた。

僕は余裕を持ってペンシル祭に話しかける。

「明日で最終日だが御感想は？」

すると、ペンシル祭は今までにないぐらいの怒りに満ちた目つきで僕を見据える。

「……私は間違っていない……絶対に負けない……絶対に……絶対に……絶対……」

彼女は取り付かれたように『絶対に負けない』と何度もつぶやき、取り巻きと共に部屋を出て行った。

一人になった部屋で僕は思わずつぶやいた。

「……これってハガキの勝負だよ……そこまでこだわるの必要あるのか……」

正直、この勝負に勝ったところで、ここを出られるとは思わない。

目的はペンシル祭に一泡吹かせられればと思っただけのことだ。

次の日のこの時間には結果が出ている。

その時、ペンシル祭はどうするのだろうか。心配になってきた。

### 第33話 「好きになれない」

私は番組が終わった後、本部を出る。

辺りは夜なのに月明かりによって見通しはかなり良い。

反対に私の心は見通しが悪く、言い知れない焦燥感に襲われていた。

周りを歩く者も私の気持ちが伝染したかのように押し黙っている。しばらくして、100g98円がおずおずと私に話しかけた。

「ペンシル祭さん……」

しかし、呼びかけを無視をする。今は誰とも話したくないからだ。私が答えないので彼は再び黙ったが、やがて意を決したのか話を続けた。

「どうしたのですか？　いくら宝条リンが復活したからって5枚は少なすぎる」

「……」

「宝条リンとネタが被りやすいのはマッチョ石松の方じゃ……」

「黙りなさい」

「はい……」

変だ。いつもと違う。それは一番自分が良く分かっている。

原因は……必要以上に意識しているせいだ。

分かっているにもアイツを意識してしまう。

『何が楽しくてハガキを書いているんだ？』

くだらない。本当にくだらない。

\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*

数年前、私は高校を卒業してすぐ放送作家としてデビューした。投稿していた番組へ放送作家になりたいという趣旨のハガキを送ったところ、番組のプロデューサーさんがいくつか仕事を紹介してくれたのが最初だった。

大学へいくという選択肢は無かった。

勉強ができないとかお金に困っている等の理由ではない。

ただ、4年間無駄に過してしまいそうなのが嫌だった。

実際にそういう学生を何人も見て、その思いは固くなったのだ。

ハガキを書き始めたのは……強いて理由を挙げるなら番組の狙った傾向にハガキを書いて投稿するという戦略性が自分としては面白かったのだと思う。

放送作家を選んだのもハガキ職人の延長線上にあったからという理由からだ。

最初は見習いからだが、徐々に私の出す企画書が採用されるようになり、1年経つとラジオ・テレビ問わず週に10を超える番組を掛け持ちしていた。

番組を視聴する年齢層、狙い、それに加えて今の流行や番組を見ている人の好みなどを自分の中でデータベース化し番組へ反映させる。

私にとってはハガキを書いたり、番組の構成を考えることは自分の好き嫌いに関わらず、機械的に決まるものだった。

実際に高確率で良い数字（視聴率、聴取率）を取れる番組ができる。

そんな時に出会ったのが由部渡ゆべわたるという男だった。

いつものようにラジオ番組の打ち合わせに行くとプロデューサーから彼を紹介された。

大学を出たばかりの見習い放送作家だという。

「コバちゃん、コイツ見習いなんだけさあ面倒見てやってよ」  
コバちゃんとは私の本名が古林涼こばやしひょうだかららしい。

「……と言われても、私だってまだ1年目の駆け出しですし」  
「またまた謙遜しちゃって、一体レギュラー何本持つてるだよ。ね、この番組だけで良いからさあ。意気込みは凄い奴なんだよ」  
「……分かりました」

安請け合いましたことを今でも後悔している。プロデューサーに促され私に前に立ち由部渡と紹介された男は開口一番こういった。

「これからのラジオは僕が変えますから」

「はあ？」

「とにかくお願いしますっ！！」

「はあ……」

とりあえず、彼が書いた企画書をいくつか読んでみた……典型的な独りよがりの企画書だ。

私はとりあえずもう少し客観性をもったものを書いたほうが良いという趣旨を伝えると彼はこう答えた。

「大事なのはまず自分がその企画を好きかどうかだと思います」

「……言いたい事は分かりますが、番組というのは見てくれる人がいないと意味がないんですよ」

「大丈夫」

「は？」

「まず僕がこの企画が好きで実際、番組で存在しても観ると思うし、『好き』って言う気持ちは必ず聞いている人に伝わる。少なくとも僕はそう信じてます」

さらに呆れる私を置いて、自分がいかにラジオのことが好きかを話しだし、最後には影響を受けた番組について語りだした。

正直、ウンザリだった。

その後も終始そんな感じで彼と私は対立した。

「古林さんの言いたい事は分かりました。それで、この番組に対する貴方のこだわりは何ですか？」

「もちろん人気ができることです。結果が重要ですから」

「そうじゃなくて、古林さんの譲れない部分や核になる部分ですよ」

「この企画に私の意見は特に入っていません。もちろんアイデアは自分のものですが、今の傾向を加味して考え出されたものです」

自分で言うのも偉そうな気もするけど、私は世の中の流れや特徴を捉えて反映させるのが上手いほうだと思う。

それが自分の武器であると思っていた。

だけど……

「それじゃあ駄目ですよ。もっと自分の気持ちをぶつけなきゃあ……そうですか」

由部渡という人物はいとも簡単に私の考えを否定する。

「好き」という気持ちがないだけで。

それに私のほうが一年先輩だけど彼のほうが年上なので、あまり彼自体も遠慮なく話しかけてくるのだ。

別の日。

「この企画なんですけど……これじゃあ、あまりにも今までの方向性と反対じゃないですか？」

「……リサーチでもこっちのほうが必要あるし、番組なんだからこれで良いとおもいますけど」

「古林さんには誇りがないんですか？」

「えっ？」

「好きじゃなくても人気があればそっちに移るんですか？」

「ええ」

「……一体、古林さんは何が楽しくて企画書いてるんですか？」

「楽しい……？」

「僕は自分が本当に好きなものしか書きません。それは譲れない」

「……そうですか。頑張ってください。楽しみにしています」



大抵は私が彼の口論をいなして終わる。  
正直、彼のことは好きになれない。ハッキリとした嫌悪感を覚え  
た。

……前からずっと不安になっていた事がある。  
確かに私は特徴を捉ええるのが上手いので、ある程度の企画なら  
出来る。

だが、その番組や企画に愛着はない。

今は通用しているけど……もし、本当にこの世界のことを好きな  
人と私が真剣勝負したら……負けてしまいかもしれない。

負ける……私が一番恐れている事。

「自分が本当に好きなものしか書きません」と彼は言った。  
私を少し不安にさせるには十分だった。

しかし、何度やっても彼の企画が通ることは無かった。  
いくつかは試しにやってみようと始めたコーナーがあったが人気  
が無くてすぐに終わってしまう。

当たり前だ。自分の好みばかり押し付ける番組など誰も聞きたく  
ない。

それ以前に彼の好きだった番組の企画そのものをこの番組に持ち  
込もうとしたこともあった。

自分の企画が通らず落ち込んでいる彼を私は冷ややか目で見てい  
た。

『「好き」って言う気持ちは必ず聞いてる人に伝わる』ですって  
？……笑わせないで。

それじゃあまるで『思ってたさえいれば夢は叶う』とか歌って悦に  
浸ってる三流ミュージシャンと同じじゃない。

方法論を無視して気持ちだけ進むことがどれだけバカなことかこ  
れで思い知ったでしょ？

心の中で私は蔑み笑う。

結局、私の「負ける」という不安は杞憂に終わった。

そうしている間にパーソナリティーの結婚による引退に伴い、番組自体が終了になってしまった。

よって彼の接点は消滅。

私は他の仕事があり、忙しく過していたし他の番組でも会う事が無かったので、彼のことはすぐに忘れたはずだった。

### 第34話 「紛い物でしかない」

それから2年経った。

私も業界でもそれなりのポジションにいます。

仕事は途切れることは無く、お金の困ることはない。一応の成功を収めていた。

その日も私は番組の打ち合わせで夜遅くなり、その後、番組スタッフ達と近くバーに入る。

私が騒がしい飲み屋を嫌なことをスタッフは知っているので、入った店内は落ち着いた雰囲気だった。

テーブル席に座り、注文して一息つくと周りのスタッフが次々と私に話しかける。

「いや、古林さんが担当してる番組って、毎日何所かやってますよね」

「ラジオ、テレビ。今度はドラマの脚本も挑戦するらしいじゃないですか」

「どうやったらそんな風になれるんですか？ ホント、教えてくださいさいよお」

「止めておけよ。お前じゃあセンスないから無理」  
「え、そんなあ」

自分では浮かれていないつもりだったが、こう持ち上げられると少しはいい気になってしまふ。

そこへ店員が注文したものを持ってきた。次々と頼んだものがテーブルに置かれる。

しかし、不意に店員の手が止まった。

初め、私は話し込んでいたので気付かなかったけど、店員から声をかけられて初めて気付いた。

「あの……もしかして、古林さん？」

声をかけられたほうに目を向ける。

「……あつ、貴方は……確か……」

「覚えててくれたんですね。由部……由部渡です」

彼の顔を見て2年前の記憶が戻る。

あの頃より若干、痩せた印象があるけど確かに由部渡だった。

彼は嬉しそうに笑みを浮かべて私を見ている。

「……」

嫌な奴に会った……という感情はもう無かった。

少なくとも放送局で会ったならそんな感情も浮かんだかもしれない。  
い。

でも、彼の姿を見てすぐに悟ってしまふ。

彼はもう業界にいないのだと。

スタッフと一通り飲んだ後、私だけ店内に残りつた。

カウンター席へ向かい、バーテンをやっている彼の前に座る。

「すみません。残ってもらっちゃって」

「いえ、構いませんが……」

彼が注文の品を置いて去ろうとした時「私に残ってくれないかと耳打ちしたのだ。

残る義理は無かったけど、彼の近況が少し気になったので付き合い合うことにした。

「相変わらずですね」

「え？」

「誰に対してもそっけない」

「そうですか？」

「……ええ。でも、実力があればそれでいいかもしれない」

「……」

私が何も答えずにいると彼は下を向いた。

「それに比べて僕は貰った仕事も満足にこなせず半年もしないうちに仕事は無くなり、今はこうやってバーテンダーをやっている」

「……………」  
再び私へ顔を向けると微笑む。2年前よりかなり疲れた笑いだった。

そんな顔を見れば彼の苦勞がうかがい知れる。  
しかし、同情する気は起きなかった。

私達の仕事は月給を貰って働くサラリーマンとは違う。何の保証もない。

確かにサラリーマンもリストラがあるが、仕事を失うリスクは比べようもない。

それを理解して……成功した者だけが続けられる仕事。私はそう思っている。

しばらく、私達は沈黙していた。

元々、落ち着いた雰囲気のお店なので特に違和感はない。

私はこれ以上話すこともない気がした。

「でも、僕は諦めてないですよ」

「え？」

唐突に彼は言う。私が顔を向けると、彼は私を見据えた。

目に力がある。言葉には嘘がないようだ。

「……………」  
ここは放送業界の人がよく来る店だっ  
て聞いていたから働くことにしたんだ。最後のチャンスを掴みに」

「最後？」

「うん。これ以上ないぐらいの企画が出来た」

「……………」

私は特に何も感じなかった。2年前もそんなセリフを彼は吐いていたから。

自信を持っているときほど彼のエゴが感じられる駄目な企画だった。

「そこで頼みごとがあるんだ。この企画書を君の知り合いのラジオ局プロデューサーに渡してくれないか？」

「……………私か？」

「なあ、頼むよ」

私が逡巡していると、彼はカウンターから出て土下座をした。

「ちょ……………ちょっと止めてください」

「止めない！！ 頼む！！ この通りだ！！ もう僕にはツテがないんだ！！」

「……………」

必死に土下座する彼を見て、驚きと同時に心地よさも感じていた。私は成功して彼は失敗している。これでハッキリしたはずだ。どちらが上か。

「分かったから、こういうことは止めて。その企画を書いた書類を貸して」

「……………本当？ ありがとう！！ ありがとう！！」

彼は何度も私の手を握り頭を下げる。そんな彼を私は上から見下ろした。

彼は準備良くその場で書類を私に渡した。

丁度、次の日にラジオの打ち合わせがあったので企画を渡すと私のやるべきことは終わった。

はずだった。

数週間後、いつものように打ち合わせのためラジオ局を訪れた。

私を見たプロデューサーは浮かない顔をしていた。

「どうしたんですか？」

「うん……………あのさ……………」

プロデューサーはなかなか答えようとしない。こういうときは大抵決まっている。

「……………打ち切りですか？」

「……………実はそうなんだ」

「レイティングの数字は悪くないと思いますが……………他に原因でも？」

終わることはしょうがない。私だっていつも成功したわけじゃない。1クールで終わった番組なんてざらにある。

それだけに原因をきちんと考えておかないと次へ生かせない。

「……確かに数字は悪くないけど……なんていうのかなあ……まったく違った指向の番組を始めたいなあと思って……」

「そうですか」

確かにバラエティー番組から情報系番組に変更するとかいうなら話は分かる。

私の専門外だ。どんな番組に変わるのだろうか？

気になったけど聞くことが出来なかった。

それはプロデューサーが言った次の言葉を聞いたから。

「一応、コバちゃんにも言っておいたほうがいいと思うんだけど……オレに企画持ってきてくれたし」

「次の番組に使う作家さあ……由部で行こうと思うんだ」

「……なんて言うかさあ。あいつの書く企画って凄く自分よがりなんだけど熱意が伝わってくるんだよね」

「……」  
「一つぐらい番組譲ってやってよ。コバちゃんの企画も凄く良いんだけどさあ……」

「分かりました。しょうがないです。今までありがとうございます……」

言葉を濁し言い淀むプロデューサーに挨拶をして私は早々に立ち去った。

他にも沢山の番組を抱えている。彼に番組を譲ることは別に構わない。

……構わない……構わないはずなのに……  
私は唇をかみ締めている……

「！！」

そこで私はようやく忘れ物をした事に気付いた。戻りたくは無かったが、次の仕事にどうしても必要なのでとりに行くことにした。

戻っている途中でさっきのプロデューサーがいることに気付く。

さっきの浮かない顔とは一転して満面の笑みを浮かべて、ディレクターと話をしている。

「古林さんを切ってホントに大丈夫なんですか？」

私に気付かないのか大声だった。嫌でも耳に入ってくる。

私は自然に身を屈め聞き耳を立てた。

「心配無い。この業界じゃあ、あの娘のことなんて呼んでるか知ってるか？」

「何なんですか？」

「送りバントのコバちゃんだよ」

「送りバント？」

「そう。大きい企画の準備をするために彼女の企画を採用するんだ。ランナーを進めるための送りバントの役目。いわば小物だよ」

「へえ」

身を屈めていた体が自然に床へ尻餅をつくように下がっていく。

頭が真っ白になり何も考えられない。目の奥が熱くなり、何かが溢れてくる。

少し視野が涙で歪む。

「由部の企画で大きな賭けに出ようと思ってな」

「そんなに良いんですか？」

「上手くいけばオレの名を広めることにもなる」

とうとうこの日が来た。

本当にこの世界のことを好きな人と私は真剣勝負して負けたのだ。

私は所詮紛い物でしかない。



ただ要領の良い二流の人間……

「……」

だが、逃げるわけには行かない。私は戦いをする決心をした。まず涙を拭き、力を振り絞って立ち上がった。

すると、私を見つけた二人は急に会話を止める。

二人に近づき交互に睨みつけた。

「あつ、あれ？ コバちゃんどうしたの？ わ、忘れ物？」

やたら慌てるプロデューサーに私は冷たく言い放つ。

「……こちらの局の番組を私は5つ持ってます。この番組が終わるので4つですが、全ての番組を降ろさせていただきます」

こんなことを言ってしまうと仕事を失うかもしれない。

でも、今はこれからの仕事より守らなくちゃいけないものがあった。

それは自分のプライド。

「そんな、急に困るよ！！ 2年続いている番組だってあるんだし」  
プロデューサーは慌てた。

関係ない局の仕事まで自分のせいにされ、潰れて責任を負わされることを恐れただの。

「私は所詮つなぎなのでしょう？」

「……ごめん。言いすぎた」

「別に私は構いませんが？」

あくまでも私は強気な態度を貫いた。というより、開き直った。

小物でも紛い物でも構わない。

ただどこは負けたくない……いや、絶対に負けない。

「……どうすれば許してもらえるんだ？」

プロデューサーも自分の非を認めたらしく、内々で処理しようとしている。

私は腕組みをして、見下すように彼を見る。今までにない不遜な態度で対応した。

「そうですね……由部さんの企画は無かったことにして欲しいです」

「！！それは……」

「出来ないのですか？」

「……」

観念したのかプロデューサーは頷いた。

「残念でしたね大きな賭けが出来なくて。私も良い送りバントを出  
来るように頑張りますね」

「……」

それ以上プロデューサーは何も言えず下を向いた。

私は爽快な気分出局を出た。あのプロデューサーと由部を一度に  
黙らせることが出来たのだ。

これで何もかも元どおり。仕事も私のプライドも。

その夜、私は良い気分で家路につこうとテレビ局を出た。

外は小雨が降っていて私は外で待たせてあったタクシーへと急い  
だ。

カバンを傘代わりにするため、頭に乘せ両手で支えて走る。

すると視界の端から何かが迫ってきた。

両手がふさがっている私はそのまま何かとぶつかって倒れてしま  
った。

「……最後だと思って書いた」

「？」

私は訳が分からず立ち上がろうとした。

しかし、上手く立ち上がれない。

そのまま倒れたまま動けなくなった。

「したい仕事も出来ずにバイトでつなぐような……あんな生活に疲  
れたんだよ……」

「……」

ゆっくり顔だけを上に向けた。私の瞳に移ったのは見覚えのある  
男性、由部渡だった。

彼の脇で何か光っている。良く見ると包丁だった。

そこでようやく私は事態を理解し、腹部に触れる。

ぬるっとした感触と共に手についたのは私の血だった。

「アンタにとってはただのクズ企画だったかもしれない……でも、あれは……僕の全てだったんだ」

「は……あつ……あ……」

お腹に力が入らないので上手く話せない。

次第に激痛が私を蝕む。

「僕だつて負けてばかりはいられないんだ」

その瞬間、私の意識は途切れた。

### 第35話 「知りたくない？」

ペンシル祭達が去り、室内は静かになった。

電気を消して僕は寝転び、二日目振り返った。

読まれた枚数は互角。一見、ペンシル祭と僕の実力が拮抗しているように見える。

しかし、僕の思いは違う。ペンシル祭りが手加減をしているように思えたのだ。

でも、今回は手を抜く理由もないと思う。

窓からの月明かりが室内を照らす。室内がぼんやり明るい。

僕の考えもぼんやりしてきた。それは考えても考えても答えが出ないからだ。

ペンシル祭の情報が少なすぎる。

……自然に独り言も出てしまう。

「ペンシル祭……一体、どうしてここにいるんだ？」

「教えてやろうか？」

「ああ、教えてくれよ……って、誰だ！！」

飛び起きた僕は声の方向とは反対に退き、様子を伺った。

すると薄暗い部屋の隅から見たことがある人物が現れる。

ニット帽をかぶり、スキーのゴーグル、白いマスクをして、服装は半そでにジーパンというわけの分からないいでたちの男……

「気まぐれサーファー？」

「……その顔は覚えてくれていたみたいだな」

「んな格好じゃあ望んでなくても覚えてしまうよ」

気まぐれサーファーはその場に胡坐をかいて座った。

意外に図々しい奴だなと思いつつ、僕も座ることにした。

「ペンシル祭は2年間で5期連続でサーファーキングだ」

「何だよいきなり……でも、それは聞いたことがあるぞ」

確か波乗が最初の頃そんなことを言っていた気がする。

「では、それ以前はどうしていたか知ってるか？」

「それ以前？」

「彼女はここに居なかった。いや、正確にはこの施設には居なかった」

「？」

「いいか、よく聞け……」

\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*

「古林さん、大丈夫？ はい、花とフルーツの盛り籠」

「はあ……ありがとうございます……」

あれから一週間。救急車で運ばれ、緊急手術。幸い命には別状は無く傷を縫合してもらった。

しかし、三週間入院することになり、現在私は病室でたくさんの花に囲まれている。

この花々はお見舞いに来てくれた人達がくれたもので、それだけ私が見えぬ人と仕事をしてきた証だろう。

少ししてノックの音が聞こえたので返事をすると、ゆっくりドアが開く。

申し訳なさそうに入って来たのはこの前のプロデューサーだった。

「この度は僕のせいでこんなことになって……」

「……」

花を私に渡そうとするが無視をした。

彼はしばらく渡したままの姿勢でいたが、諦めたのか隣にあった机へ花束を置く。

「ホント……あいつはバカだよ」

「……」  
由部渡の悪口を言えば謝罪になるとでも思っているのだろうか？  
私の気持ちは曇っていった。

「諦めなければ必ずチャンスはやってくるというのに……」

「……それをモノに出来るかは本人次第ですけどね」

「あいかわらずキツイことを言うなあ……コバちゃんは」

「私を刺した男に同情は必要ありません」

「……」

横目で伺うと『お前が原因だろ』、プロデューサーの顔はそう言っていた。

「ホントにいい企画だったんだ」

入院している私に言うセリフではないだろうと言いたかった。

しかし、この人の精一杯の抗議だと思い、聞いてやることにした。

「コバちゃんはこの企画見たかい？」

「いいえ。他人の企画を盗み見る趣味はないですから」

「まあ、アイツが捕まった今、この企画はお蔵入りだからね……だからコバちゃんにあげるよ」

プロデューサーはカバンから封筒を取り出し、私へ差し出す。

「いいません」

「そんなこと言わないで……」

「……」

「知りたくない？」

「何がですか？」

「君が負けた理由」

「……」

思わず振り向いて目があつと、彼は薄笑いを浮かべていた。

挑発に乗ってしまったと感じた私は慌てて視線を逸らす。

「……私は負けた覚えはないですが」

「そう……でも、僕自身はもう要らないからここへ置いておくよ。それじゃあ、お大事に」

彼は私の話を無視するように封筒を机の上に置いていった。よほどこの企画が潰れたのが悔しかったのだろう。

それから一週間経過した。

入院生活は暇だ。相部屋なら話し相手がいるかも知れないが、ここは個室。

放送局側が自分達の局の前で起こった作家同士の事件なので、体面を考えて個室に入れたのだ。

二週間たったことで、見舞いに来る人達も尽きた。

皆、それぞれの仕事に忙しくて私に構っている暇はない。私なんかいなくても仕事は回る。

しかし、そんなことは分かりきったこと。私も負けられないように次の企画の準備をしようと思う。

ノートを広げ、ラジオを付けながらペンを走らせた。私は『ながら作業』というのはラジオがとても合うと個人的には思っている。

…

…

…

…

それにしてもつまらない放送だ。煽りだけが良くて、内容はくだらない。

やたら騒がしいだけのパーソナリティーだな。この番組の作家はどうしているだろうか？

プロデューサーは何をやっているんだ？ 私ならどうするだろうか？ というようなことをつらつら思いながら番組は終盤を迎える。

『番組の最後に本番組放送作家古林さん、元気になってくださいな』  
それではこの辺で。さようなら』

「……」

愕然とした。

自分の番組を分からなかったなんて……さまざまな思いが次々と浮かぶ。

パーソナリティーのことなんて気にもしなかった。

実際一緒に働くが、あの人たちと適当に話をして合わせていただけだった。

パーソナリティーが誰でも私の台本どうりに進めれば面白いものが出来ると思ってたし、後で自分の放送を聴くことも無かった。

だって……数字だって結果も悪く無かったし、リスナーのハガキにだって批判めいたことは書いてなかった。

でも……

それでも……

私はつまらないと思っているっ！！

「くっ……」

手が震えて止まらない。背中に冷たいものが走る、冷や汗か？

俯きながらふと視界に入る一つの封筒。

その存在はだんだん大きくなっていった。

『知りたくない？』

『何がですか？』

『君が負けた理由』

「……知りたい」

自分でも気付かないうちに言葉に出てしまった。

一度思ってしまったら、もう止まらない。

私は飛びつくように封筒を手にとると企画書を読み出した。

「これは……」

第一印象は”突飛”だった。

企画書の最初に書かれた文字は『商業スポンサーを一切排除する』だった。



商業主義の観点から言えば大きく外れている。まず、CMが入らない。レコード会社とも関わりを持たず、かける曲も自分達の好きなものをかける。

では、番組の運営費は誰が出すのか？

それはリスナーだ。スポンサーの意向で行う番組ではなく、番組を好きでいてくれる人たちのための放送をしようという試みだ。

国营放送と違うのは聴きたい番組に投資する点。つまらない放送をすれば金を出す人も少なくなり、予算不足によって番組単位で潰れるというのだ。

由部渡は何を目指していたのだろうか？

「……楽園」

番組が好きな人たちと番組が好きで放送する人達。

両者の関係を企画書には「楽園」と明記されていた。

ラジオ好きなアイツらしい……

「はっ……ははは……」

笑いがこみ上げてきた。

せせせこと流行を追っていた私には到底発想できない……負けたの？

「っ……」

思わず壁に拳を打ちつけた。

何度も何度も……激しい動きに腹部の傷口が開きそうに痛い感じがしない。

これを止めたら……止めたら……私は泣いてしまつかもしれない。くそっ、くそっ、くそっ……

なぜ!?

私にはできない!?

……これがどうにも埋められない差なのか？

「はあ、はあ……はあ……はあ……」

数分後、私は床へ倒れた。もの凄く体は熱く、湯気が出ている。

自分とは対照的に床は冷たく、気持ちいい。視界がぼやけてくる。それが涙だと分かるのに時間はかからなかった。

病院の個室で独り床に倒れながら声を殺して泣いた。

一通り泣き終わると、黙って立ち上がる。企画書を手に持ち、引き裂こうとした。

「……………」  
しかし、どうしても破ることができない。

破って、何食わぬ顔して、この時のことも忘れて、私は逃げるのか……………」

違う！！

逃げるわけにはいかない。

じゃあどうすれば……………」

「！！！」

ふとした思い付き。

それは大した閃きではないが、確実に私の心をとらえていた。

アイツに勝つ方法……………この企画を私が実現すればいい。

由部渡がやりたくても出来ないことを私が成し遂げる。

それどころか全体を取り仕切り、自分のものにしてしまうのだ。

出来る、私には出来る……………いや、やらなきゃ負けじゃないか。

しかし、業界内では無理だ。企画の話を知っている人間がいる。

とすれば、地方の放送局か海賊放送か……………それに人を集められる

パーソナリティーも必要だ。

いつの間にか私はノートを取り出していた。

由部渡を……………ラジオ好きな人達を……………私がコントロールするんだ。

番組名は　そう、『ラジオデイズ』だ。

あんだ達リスナーの日々は所詮、作られたラジオの番組内での日々でしかない。

せいぜい私の手のひらで空騒ぎをすればいい。

10年ほど前の話。

\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*

気まぐれサーファーはひとしきり話し終わった後、ポツリと呟いた。

「……彼女は波乗家にいたのだよ」

「マジかよ!？」

「ああ。『ラジオデイズ』の放送作家をしていたのだ」

「でも、波乗は……あの家に住むジヨニーの娘は彼女を見ても知らなかったぞ」

「ペンシル祭はブースから出ることはなかったから彼女は気付かなかったんだろう。二年経って髪も伸びたし、眼鏡もしてたし」

「納得できるのかできないのか良く分からない話を聞いて僕は一つの疑問に至った。」

「というかお前は何でそこまで知ってるんだ?」

「……」

今まで誰も教えてくれなかったようなことをなぜこの男は知っているんだ。

「……調べた。そう言っても信じてもらえないかな」

「どうやって?」

「色々とな」

「その姿といいアンタちよつと謎が多すぎるぞ」

「確かに怪しい格好ではあるな……」

すると、気まぐれサーファーはマスクやゴーグルを取り外し、僕の目の前で素顔を晒した。

「これで少しは謎が解けたか?」

「……お前は……！」

### 第36話 「準備OK？」

文句の付けようもない夏の青空。遠く向こうでは入道雲なんかでてるし、夏だねえ。

そして……この瞬間はあっさり訪れた。

「多記君、おめでとう、見事な勝利だったね」

「波乗、当たり前だ!! 俺の実力を持ってすれば当然」

波乗が僕に飛び込むようにして抱きつく。くっ、苦しい……

だけど、本当にペンシル祭と勝負して勝ったんだな僕は。

「タツくん、やったね!!」

隣ではリンが一人で飛び跳ねている。

川上や工藤も手を取り合って喜びを噛み締めていた。

思った以上に周りはかなり盛り上がっている。

しかし、不思議と僕には勝利の実感や開放感はまったく起きない。それどころか体の心からジンワリと燃えくすぶるものがある。

「だったら、リンちゃんももっと燃やしてあげる」

「おう、サンキュ」

って、なんでお前が僕の思ったことを知ってるんだよ!!

僕にお構いなく、何処から持ってきたのか火炎放射器らしきものを肩にかけ、いそいそと用意している。

「リン、止める、そんなことしたら死ぬだろ!!」

「確かにそうね。あなたを殺せば宝条リンは壊滅だわ」

嫌な予感に振り返ると、そこにはペンシル祭が長い髪をかきあげながら、冷たい視線を眼鏡越しに僕へ送っていた。

「あなたを見てると嫌な事ばかり思い出すのよ!!」

いつの間にか、リンの火炎放射器をペンシル祭が持っていた。さらに狙いは俺に向けられている。



\*\*\*\*\*

「暑　　っ!!」

あまりの暑さに目が覚めてしまった。いや、覚めて良かったんだよ。

現実には背中が痛くなるような板間で監禁されて、空調設備もない場所にて蒸し暑い夜を過しているわけだ。

……セミの鳴き声がうるさいし。

「しかし、なんちゅー夢だ……」

軽く今までの総集編みたいな内容……いや、違うな。

僕を監禁してる部屋には鉄格子つきのけっして大きくは無い窓が東側についている。

寝起きであまりハッキリしない体を起き上がらせて、外を覗く。

ここだけは夢で見たような文句の付けようも無い青空だった。日差しも強いし、夏だな。

そして……とうとうペンシル祭との勝負も3日目を迎えたわけだ。

「マツチヨさん、入りますよ」

「はい、どうぞ」

ノックの後に声が聞こえ、ドアが開く。僕が感傷に浸る暇も無く朝食の時間が来たようだ。

朝食を運ぶ男性を先頭に数人の男女が室内に入ってきた。

この部屋、実は普段は集会みたいなものに使われるらしく、かなりの人数が入っても余裕がある。

運ばれた朝食に手をつけながら僕の周りを彼等が囲む。

彼、彼女たちのネタハガキヘアドバイスするのが日課になっているからだ。

今やこの集団は反ペンシル祭の集団へとなっているみたいで、彼女の良い話を彼等から聞いたことが無い。

まずは僕に初めてネタハガキを読んでくれと頼んだ男性が自分の書いたネタハガキを差し出す。

彼がこの集団をまとめているようだ。いつの間にか読む順番も決まっているし。

「ど、どうでしょうか？」

僕がハガキを読みながら彼を盗み見ると、頑張ったテストの結果を楽しみに待つ学生のように不安と期待の混じった表情を僕に向けていた。

「うん。かなり、良いんじゃないでしょうか？」

僕の評価を聞いて彼の表情が喜び一色へと変わる。

「ありがとうございます！！ このネタ、気まぐれサーファーさんのネタを参考にしたんですけどね」

「気まぐれサーファー……」

あっ、思い出した。

そうだよ、昨日は気まぐれサーファーがここへ来て、ペンシル祭の知らなくて良いような過去を知らされて……

それに、厄介な頼み事も受けなきゃいけなくなつたし。

「あの……僕の顔に何かついてます？」

僕はいつの間にかハガキを持ってきてくれた男性を見つめていた。慌てて、誤魔化す。

「いや、ホントにハガキ書くのが好きなんだなあと思ってさ」

「大好きですよ、当たり前じゃないですか」

これくらいペンシル祭が素直ならば良かったのに。

それにしても今夜からやらねばならない事を思うと身震いがした。ラジオデイズに巣食う元凶を退治しなければならぬ。

僕はただ波乗の手助けをしたいだけなのに。



そして……

嫌な時というのは時間が経つのが早い。来るなと思っててもアツサリ来る。

鉄格子の小窓からはもう光は差し込まない。

光を失った室内は蛍光灯が自己主張し始める……夜。

蒸し暑さは感じない。さらに涼しさが夏の終わりを少し思わせる。

『ラジオデイズ』の時間があと10分と迫っていた。

いつもはペンシル祭が来るのを一人で待っているのだが、今日は様子が違う。

「すみません、勝手にお邪魔しちゃって……」

「構わないですよ。今までペンシル祭派ばかりだったので丁度いい」

朝、ネタハガキを読んであげていた彼等が最終日ともあって、いても立つてもいられなくなり、この部屋へ押し寄せたのだ。実に結構な事だと思う。

しかし……

「それよりも、問題はアナタだよ」

「気にするな、オレは人に気を使わせないタイプだ」

「黙れ、気を使っつわっ!!」

僕がツツコミを入れた相手はニット帽をかぶり、スキーマのゴーグル、白いマスクをして、服装は半そでにジーパンというわけの分からないいでたちの男、気まぐれサーファーだ。

「気まぐれサーファーさんもマッチョ石松さんの味方だったんですね」

「……まあな、成り行きだ」

興奮気味に話す彼等を他所に、気まぐれサーファーは偉そうに胡坐をかき、悠然と構えている。

……なんかムカつく。

って状況説明してる場合じゃない。

「そんな事よりもアナタはここにいちやあマズイだろ」

僕の言葉にまったく動揺もなく、気まぐれサーファーは首をかしながら答える。

「なぜ？ マツチヨ派のオレがここにはマズイと？」

「そうですね、マツチヨさん。気まぐれサーファーさんはアナタの応援に駆けつけたんですから」

くそっ、彼等を良いように使いやがって。これも作戦のうちか？  
いや、それよりもマツチヨさんって呼ぶの止めてくれ。

「もう知らないからな」

ホントにもう知らん。例え番組が始まらなかったとしても僕の責任じゃないからな。

嫌な音も聞こえてきたし。

そして今日も時間どつりに数人の足音が近づいて来る。

数回のノック音が聞こえるとドアが開き、奴等がやってきた。

室内の人数の多さに気付き、一瞬だけ奴等が立ち止まる。

さらに彼女の取り巻きがにわかになざわつく。

しかし、それはホントに少しの間の事だった。

「覚悟は良いかしら？」

おいおい、挨拶もなしにいきなり挑発かよ。

他の面子は関係ないと言わんばかりに長いストレートの髪をゆっくりとかきあげながら、夢でも感じたあの冷たい視線を僕に向ける。

そんな視線に負けて堪るかよ。

「アンタこそどうなんだ？ 負けたときの言い訳でも考えたか？」

ペンシル祭」

「ごめんなさい、私はあなたと違って負けた事が無いから、そんな事考えた事も無いわ」

ペンシル祭の自信溢れたセリフを聞いた彼女の取り巻きも落ち着きを取り戻す。

よし、戦闘準備OK。これで室内には役者が揃ったな。

とうとう僕達は『ラジオデイズ』勝負三日目を迎えることになった。  
っていうか放送は大丈夫なのか？  
だって気まぐれサーファーは……

### 第37話 「会ってやらない！」

夜とはいえ、さすが夏だ、暑い。

とはいえ、暑いのは夏のせいだけじゃない。

ラジオ一台を挟んでペンシル祭派と反ペンシル祭派で真っ二つに分かれて放送開始をじっと待つ。

室内が狭いし、熱気で暑いのかも。

始まる前から両者の緊張はかなりのものだ。

しかし、この室内で一番緊張してるのはこの僕だろ。

やばい、もうすぐ放送が始まってしまう！！

もう知らん、とか言いつつソワソワする自分がいたりして何だか腹がたつ。

\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*

昨日、ゴーグル、マスクを外した気まぐれサーファーは僕の前にその正体を現した。

一つ一つ付属物を取ることに現われるその姿。

ほんの少し、白髪が混じったりしているけど、こざっぱりした頭髪。

太っているわけでも痩せているわけでもない整った顔。

そして頬や眉間に刻まれたシワには年季を感じる。どうみてもオッサンだ。

でも、僕を見つめる目だけは大きく鋭い。

「どうした、この顔が珍しいか？」

そして、この顔と声には確かに覚えている。

「波乗……丈……」

「ジョニーと呼んでくれ」

目の前に立っているのはいつもラジオブース越しに見ていた波乗丈だった。

驚きでしばらく何も言えない。

外から聞こえる無視の音が室内を包む。

なんだこの沈黙は。

オヤジなのにイタズラっぽく笑う波乗丈。口を開けたまま何も出  
来ない僕。

「驚いた？」

波乗丈は頭をかきながら気休めにもならない言葉を発する。  
それにつられて僕もようやく言葉が出た。

「んな……馬鹿なっ！！」

じゃあ、今までの苦労は何だったんだよっ！！

こんなに簡単に外へ出て来んな！！

「まあ、落ち着け。ウーロン茶でも飲む？」

「飲まんっ！！」

波乗丈は勝手に室内に置いてあったウーロン茶のペットボトルを  
湯飲みに注いで、一気飲みをした。

「ぶはあゝ、うめゝ」

このオッサン……メチャメチャ軽いぞ。

……っっていうかすんげゝム力つくんですけど。

そんな僕の視線に気付いたのか、波乗丈は湯飲みを床へ置き、僕  
へと顔を向ける。

「お前、どうせ『簡単に出てくんな』とか思ってるんだろ？」

少しふて腐れた顔で、僕の心を読むなっ！！

\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*

\*\*\*\*\*

んでもって今。

番組開始のカウントが心の中で始まる。

相変わらず気まぐれサーファーこと、波乗丈は涼しい顔をしている（マスクとゴーグルではっきりとは分からんが多分涼しい顔）。

放送が始まるにつれて周りは静まっていく。

3、2、1……ああ、始まってしまっつー！！

『OK！ ジョニーのラジオデイズ！！』

「なんでだよっ！！」

本人はここにいるのになぜ放送が出来るんだ！？

周りを見渡しても誰も驚いてないし……っつて

「……あっ」

ふと、視線が集まっている事に気付き我に返る。

当たり前だろ、皆は気まぐれサーファーの正体知らないんだから。

くそお、思わず立ち上がって叫んでいるじゃないか。

「おい、オープニングで突っ込むところは無いぞ」

後ろから冷静に突っ込みにツッコミを入れる気まぐれサーファー

の声。

「まったく、最終日だからとは言え、精神的には小学生並ね」

追い討ちをかけるようにさらに冷たいペンシル際の声が向かい側

から届く。

……僕が悪いのかよ。

\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*

またまた昨日の話。

波乗丈はオレの隣で胡坐をかいて茶を飲んでいる。

俺は居心地の悪さを感じながらも黙って座っていた。

二人が騒がなければ静かな室内はこんなに静なんだな。

そんな中、頃合を見計らって波乗丈は軽く笑みを浮かべながら話しかけてくる。

「落ち着いたか？」

「まあ、少しは」

すると波乗丈は表情を真面目に変え、話を続けた。

「しつかりしてくれよ明日は大事な使命があるんだから」

「はあ？ 使命？ 知るかつ、そんなもの。」

僕の期待していた話とは違っていたので軌道修正する。

「そんなことより、なぜ波乗にあつてあげないんですか？」

途端に視線を斜め上に動かし、波乗丈は顎に手を当て考え中みたいなジエスチャーをとる。

「波乗？ 誰の事かな、私も波乗だが？」

「誤魔化さないでください、澄音さんのことですよ」

澄音という言葉を聴くと、少し表情を硬くした。

腕を組んで視線を下げると黙り込んでしまう。

再び静かになる。ドア越しからも物音は聞こえない。

ラジオ放送が終わって結構時間が経つから、すでに皆は寝静まったのかもしれない。

「会わない」

一言うつとそっぽを向いた。子供かよ。

「なぜです？」

「私の決心が崩れる」

僕が言葉の真意を汲み取れずに入ると、波乗丈は僕から顔を逸らしたまま話を続けた。

「待っているのだよ。あの子が私に会いに来る日を」

「わざわざそんな事しなくても……」

千尋の谷へ突き落とすライオン親子じゃないんだから。

僕が少し呆れていた。

そんな中、波乗丈はポツリと呟いた。

「それにね、嫉妬もしているのだよ……」

「はあ？」

「今まではガラス越しに私を見る澄音の視線に安心していた。父親と娘のつながりを感じていたという事だろう。しかし……」

そこまで言うとは波乗丈は少し間を置いた。

波乗丈にとっては言いにくいことなのかもしれない。

「……ここ数ヶ月の間にガラス越しから見る澄音はどんどん変わっていった」

数ヶ月？ 宝条リンを始めた頃からだろうか？

心当たりがないか少し考えてみる。

「ラジオブース前にいても視線が私に向けられないのだよ」

「ん！？」

僕は刺す様な視線に気付いて隣を見ると、いつの間にか波乗丈はこちらに顔を向けていた。

なんで僕を睨むんだよ。

「だから会ってやらない！ 会いたければ、お前達力で私に会いに来ればいいじゃないか！！」

大の大人が頬を膨らましてすねるなよ。

これじゃあ波乗と同じじゃないか……って、親子か。

まさかとは思ったが波乗の視線や興味が自分から宝条リンに移って行った事が嫌なわけだ。

しかし、父親の嫉妬丸出しで僕達に対して挑戦状を突きつけてくるとはなあ……



「さてと……」

と前置きを置いた波乗丈の表情はいつの間にか先ほどの膨れ面ではなかった。

恐らくこれが本題なのだろう、表情が真剣そのものだ。

「今度は私の話を聞いてもらおう番だ」

波乗丈の声のトーンが一段下がった。

それだけでなんだか僕は覚悟を決めなくてはならない気持ちになった。

### 第38話 「お・ね・が・い」

真夏の深夜。

波乗家の広大な敷地の一角にある2階建てのプレハブ小屋。

その中でも一際人口密度の高い部屋にオレ達はいた。

窓側からいくつかの音が聞こえる。

「誰か窓を開けて」

「窓を開けると蚊が入ってくるぞ」

「蒸し暑いよりはましだよ」

まったくもってそのとおり。

ともかくこの部屋に人が多すぎ、かつ、夏ということもあり、真夜中とはいえ部屋中は蒸し風呂のようになっていた。

とうとうペンシル祭とのネタハガキ対決の最終日。

まず、状況の把握から。

オレ達のいる場所から。

ここは『ラジオデイズ』を永遠に楽しむために作られたリスナー達の棲家。

僕は現在ここへ軟禁されている。

そして脱出を試みるべく、ここの主とも言えるペンシル祭にネタはがき勝負を挑んでいた。

軟禁されている部屋は15畳ぐらいの大きさの部屋。集会なんかに使づらい。

廊下側から見た場合、部屋の中央で陣営が分かれていて、扉がついている右側がペンシル祭派、館内放送のスピーカーが着いている左側が我らマッチョ派だ。

誰が持ってきたのか部屋の中央にはバスケットで遣われるようなめくって点数表示されるスコアボードが陣取っていた。

ただいまの読まれた枚数 ペンシル祭13枚、マツチヨ石松16枚。残りコーナー数5。

枚数表示だけを見れば僕が勝っている。

しかし、ペンシル祭の実力からを考えると安心は出来なかった。

1コーナー全てのはがきを独占した実力ならまだまだ油断ならぬい。

と、状況判断しているうちに番組は着々と進んでいた。

ハガキが読まれることにどちらかの陣営が沸くので傍目から見てもすぐ分かる。

今のところ五分五分といったところだ。

それにしても番組のネタはがきのほとんどをペンシル祭、マツチヨ石松、宝条リンが占めている異常事態。

これで番組が成立しているところがすごい。

番組の成立といえば、ニット帽、スキーのゴーグル、マスクにTシャツ、ジーンズという姿で部屋の奥に陣取っている気まぐれサーファーこと波乗丈の存在が気になってしょうがない。

なんせ今、DJをしているのもジョニーこと波乗丈。

番組は生放送だし、ここにいるのは一体誰なんだ？

声だつてジョニーそっくりだし。うーん、謎。

さらに気まぐれサーファーから頼まれている事柄も遂行しなければならぬ。

非常に不本意だが人の命には変えられないのでなんとかするとしよう。

\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*

昨日。

波乗丈からペンシル祭の過去を聞いた。

「ラジオデイズ」誕生と密接に関係があった。

ペンシル祭とラジオデイズの生みの親とも言つべき由部渡との確執。

ついには刃傷沙汰にまで発展し、ペンシル祭が彼の企画を奪い取り、「ラジオデイズ」を立ち上げたこと。

それによって「ラジオデイズ」を支配して、彼に勝利をすると決めたらしい事を知った。

しかし、波乗丈の話はそれでは終わらなかった。

「由部渡は1年ほど前に出所し、この施設内に侵入して、ペンシル祭への復讐の機会をうかがっているらしい」

「じゃあ、さつさと追い出せばいいじゃないですか」

僕の答えに波乗丈は大袈裟な仕草で肩をすぼめる。

「だって、古林くん以外誰も顔知らないんだもん」

「……あやふやな情報ですね」

「聞き伝えなモノで」

くそつ、さらつと答えやがる。

この人嫌味とか通じないのかよ。

それにしても理解に苦しむ。ここへ潜入してまで殺したい相手なのかよ。

「彼にとつてはそれだけ人生賭けていた企画なんだよ」

やりきれないと言わんばかりの仕草で顔を左右に振りながら、ため息混じりに答える波乗丈。

なんだよそれって僕がまだ若造で、そこまでのめり込むようなものに出会ってないとも言いたいのかよ。

明らかに不服そうな僕の表情を察したのか波乗丈は「俺は彼らに同情してるだけさ」と付け加えた。

色々と言いたいこともあったが、僕はとりあえず言葉を飲み込ん

だ。

と、ここで波乗丈はかがみこみ、少し声のトーンを落として話し出した。

「そこでだ、多記君。君にお願いがある。実はペンシル祭の護衛をして欲しいんだ」

「はあ！？ 僕がアイツの護衛を？ んなことしなくてもアイツの周りには取り巻きが大勢いるじゃないですか」

「冗談じゃない、なぜ敵であるペンシル祭を守らなきゃいけないんだよ。」

波乗丈は僕の反応にあごへ手を当て「うーん」なんて言ってる。

「確かにそうだけど、彼らはボディーガードじゃない。イザというときに役に立つとは思えないんだ」

「でも……」

「明日は君との勝負の最終日だ。大勢の人が集まると思う。どちらかが勝利しても騒ぎになるだろう。皆にも油断が出来る。そんなときを彼が狙わないわけがないだろう」

「僕には関係な……」

「確かに関係ないかもしれない。だが、こうやって人の命が狙われていると知って黙っていられるほど君は無責任な男じゃないと見込んでいるのだから？」

躊躇する僕にどんどん言葉を浴びせかける波乗丈。だんだん断りづらくなってくるじゃないか。

確かに僕の勝利の後、ペンシル祭がごたごたに巻き込まれて死ぬのは夢見が悪い。

「今回の騒ぎでは何も起こらないかもしれない。それならそれでいいんだ。明日だけでいい、見張りを頼む！」

胡坐のまま頭を下げ、頼み込む波乗丈。

くそっ、卑怯だな。俺よりも何十歳も大人が頭を下げ、頼んでる

んだ、断れるわけないじゃないか！

ということでは僕はペンシル祭の警護を承諾した。

### 第39話 「勝負の行方」

とにかくペンシル祭は倒すべき敵であり、助けなきやいけない人。そう自分に言い聞かせる。

……にしてもなあ〜

ため息混じりに前を見るとそこには背筋を伸ばし、キチンと正座して僕を睨みつけるペンシル祭の姿があった。

ロングで真っ直ぐ髪。銀縁のメガネからのぞく瞳からは冷たい視線を感じた。

勝負最終日ともなれば真剣になるものだ。僕も負けじと睨み返した。

するとペンシル祭は軽く鼻で笑う。

む、ムカつく！

「マッチョ君、ずいぶんと挑発的になったものね」

「勝っているんだから当たり前だろ。……ってというかマッチョって呼ぶな！」

わずかにペンシル祭の瞳に力が入る。なんとなく今までにない気迫を感じた。

やはり今の状況が悔しいのだろう。

「そうやって私を直視できるのも今のうちだからしっかり見ておきなさい」

「ああ、そうだな。直視できなくなるのはもちろんペンシル祭、ア  
ンタだろう  
？」

「ぐっ……私が正しいことを証明して見せる」

「どうぞぞう勝手に」

この辺で余裕の笑みでもかましてやろうかと思ったが、ペンシル祭の目つきが一段と怖くなったので止めた。

そして、放送時間の二時間のうち半分の一時間が過ぎた。  
この時点で本日読まれた枚数は同数。

つまり僕とペンシル祭の差は一向に縮まっただけではなかった。

この結果は僕にかなりの余裕を与えることとなった。

後半戦最初のネタハガキのコーナー、ジョニーは最初のはがきを  
読んだ。

『えーっとこれはペンネーム、ペンシル祭から』

俺の背後から「ああ」と落胆の音が聞こえると同時に正面からは

「わっ」湧き上がる。

ペンシル祭自身からも喜びの笑みがあった。

なんだか腹が立ったので僕は横を向いた……直後。

「はあっ!？」

と、素っ頓狂な声が耳に入る。

なぜだか、ペンシル祭が正座を崩して両手を突いて前のめりにな  
っていた。

丁度ネタが読まれた時と声が被ったので、どんな内容のネタか良  
く分からなかったが、ペンシル祭が自分のネタに反応したのは間違  
いない。

ペンシル祭はすぐに正座を正すと、近くにいる100g98円を  
呼ぶとなにやら話し始めた。

いくつかのやり取りの後、急にペンシル祭の目つきが明らかに険  
しくなった。

何が起こっているんだろうと何うとたまたま彼女と目が合っ  
てしまっ

「ん？ なんだ？」

「あっ……」

何故だかペンシル祭は僕から一瞬目を逸らした。

そしてすぐさま僕に視線を合わせ睨みつける。



ほんの一瞬のやり取りだったけどすごく気になった。

このやり取りが合図となったかのようにペンシル祭のハガキが急に採用率を上げていった。

今まで完成度の高かったペンシル祭のハガキは時折、下世話とも言えるようなレベルの低いネタハガキになったりした。

しかし、そこにペンシル祭の底力を見たような気がした。格調を崩してもハガキが読まれることに特化したネタ。

野球で言うならヒットならいつでも打てると豪語した天才バッターのようだ。

もの凄い巻き返しに僕たちは、ただただ、呆然と事の成り行きを見守るしかなく、みるみるうちに僕のハガキへ近づき、残り1コーナーを迎えた時点でとうとう同点となってしまった。

「次のコーナーで雌雄が決する」

誰もがそう思っていた。自然に室内の緊張も高まってきた。

僕も雰囲気の流れされてソワソワしてくる。

落ち着け、落ち着け。

いよいよ番組は最後のネタハガキのコーナーへと突入した。

まず読まれたのは僕のハガキだった。

少し安堵する。

そうだ、この勝負の目的はこの建物から出ることなんだ。

そして、宝条リンに合流して波乗とこの気まぐれサーファーを引き合わせなくてはならないんだ。

ハガキ職人の力、見せ付けてやる！

……ってもうがんばりようがないけど。

と、意気込んだのはいいけど読まれたハガキはその後1枚だけ。

反対にペンシル祭は4枚ほど読まれた。

あまりにもあっさりとした敗北。

完全に意気消沈した僕たち。

反対に大騒ぎしているのがペンシル祭側だった。

#### 第40話 「勝手にしなさい」

勝負はあっさりと決着がついた。

僕は負けてしまったのだ。

がつくりと両手を床に突いてゆっくりと息を吐いた。

手のひら伝わる床の感触は固く、少しひんやりしてた。

それにしても伝説のハガキ職人相手に良くやったと思う。

しばらくはここから出られそうにもないが、新生宝条リンのネタを見る限り、大丈夫そうだ。

一息つくると大騒ぎするペンシル祭陣営に目をやった。

まるで自分たちの勝利であるかのように大喜びする彼ら。

ペンシル祭って嫌われてた割には支持者は多いんだなんて思う。

「あーあ、これでマツチヨ派は一週間畑仕事かあ」

「やっぱりペンシル祭側についておけば良かったよ……」

なんて言葉が聞こえてくる。

……そういうわけかよ。

いつのまにか賭けの対象となっていたとは。

少し馬鹿馬鹿しくなり、少し余裕が出る。

しょうがない、勝利者の顔でも拝んでやるか。

と、自分に言い聞かせてペンシル祭へ目をやる。

しかし、彼女はまったく喜びの輪に加わっていない。

それどころか正座のままピクリとも動かない。

じつとこつちを見つめていた。

どこかうつろな表情で。

明らかに様子がおかしい。

まさか！

一瞬のうちに敗北感が吹き飛んだ。

「ペンシル祭、無事か!？」

僕は勢いそのまま立ち上がりペンシル祭へ駆け寄る。すでに由部にやられたんじゃないだろうな!

ペンシル祭の目の前で立ち止まる。

彼女は僕が近づいたのに反応しない。

心配が的中か? という気持ちを抑えて、とりあえずしゃがみこみ、体の周りをチェックする。

ぺたぺたと手で確認しているとペンシル祭はわずかに肩を震わせた。

調べた結果、特に異常はなかった。

ふつつと安堵するとペンシル祭の顔が間近にあることに気づく。

なんだか急に照れくさくなって頬が熱くなる。

同時にペンシル祭の目も大きく開いた。

「た、多記透! ち、近づかないで!!」

「これは違うんだよ、わわ、押すな!」

ペンシル祭に押されて俺はしりもちをついてしまう。

「僕はお前を心配して……」

「心配? 私を? 何で?」

自分を抱くように両腕で上半身を隠すペンシル祭。

くそつ、無駄な心配だったようだ。

「なんだか、勝利したのに喜んでなかったからだよ。もう、いい!」

「私が勝利?」

「なんだよ僕の口から言わせたいのか? アンタの勝ちだよ。さすが元プロだな。まいったよ」

「……」

ペンシル祭は何も答えず、無然とした表情のまま僕を睨んでいる。まったく勝利者の顔ではない。

もっと差がつくとも思っていたのか?

まあとにかく、ペンシル祭が無事なのだからここは引き下がろう。

「じゃあな、仲間と喜び合えばいいだろ。たまにはそういう隙を見せた方がいいぜ」

ペンシル祭に背を向けると僕はトボトボと歩き出す。

なんだか急に敗北感が蘇ってきた。

「あつ、あの……ちょっと待って」

背後からペンシル祭の声が聞こえる。

少し、自信なさげな声だが、どうせ自慢話でもするつもりだろう。

僕は無視して歩き続けた。

「あれ？ だから、ちょっと待ってって言うてるのに」

それでも無視して歩き続ける。

すると足音が背後から聞こえる。

少ししてペンシル祭は僕へ歩み寄って肩を掴んだ。

「ちょっと待ちなさいって言うてるのに！」

「なんなんだよ！ そんなに僕のへこんだ顔が見たいのかよ！」

「そんな顔、べつに見たくもない」

なんか冷静に突っ込まれた。

確かに、ペンシル祭の顔は勝利に浮かれているような表情ではなかった。

「じゃあ、何だよ」

「あの……その……あれよ……」

「焦らしてなんの嫌がらせだよ」

ペンシル祭らしくなく、モジモジしてなかなか続きを言わない。

正直気味が悪い。メガネの奥の瞳がウロウロしている。

「違うの。その……私の負け」

「はあ？」

僕はよく聞こえなかったから聞き返したただけなのだが、それが気

に食わなかったらしい。

わずかに頬を膨らませ、目つきに力がこもる。

さらに肩を掴んだ手がギュッと握られ爪が食い込む。

「痛っ！！ 爪、詰め！」

「私の負けだって言ってるの！」

「はあ！？」

「ぐっ！」

ってまた肩に爪が食い込む！

痛い痛い痛い！

っていつか何言っただコイツは私の負けだなんて。

まさか、勝負に勝ったけど心で負けたわなんてアホらしいセリフをいうんじゃないだろうな。

「わかったから、理由を言えよ」

「後半に読まれた私のハガキ。半分は自分が書いたものじゃないの」  
突然の告白に僕は狐につままれた状態でペンシル祭の顔をマジマジと見つめる。

ペンシル祭のメガネの奥の瞳は少し潤んでいるように見えた。

感情的になっっているのだろうか？

「でも、誰が書いたの？」

「後ろで喜んでる奴ら」

ペンシル祭は目を瞑り後ろを指差す。

自分の仲間なのに奴ら扱いはどうだろう？ っって言ってる場合じゃない。

「ということとは……」

「一枚差でアタの勝ちよ」

ペンシル祭はぷいっと横を向いて、ぶっきらぼうに答える。  
僕の勝ちだって？

うっん、なかなか素直に喜べない。

「でも、一人で書かなくちゃいけないなんて決めなかったし」

「これはアナタと私の勝負。言わなくても一対一でしょうに」

「ほほう、つてことは喜んでいいんだよな？」

するとペンシル祭はあからさまに口を尖らせ、つぶやいた。

「勝手にしなさい」

「やった、ご都合主義バンザイ」

見事な予定調和だ。まさしく正義は勝つてね。

でも、ペンシル祭の向こうじゃあ馬鹿みたいに喜んでる人たちがいますよ？

しばらくこのまま生暖かく見物しますかな。

## 第41話 「認めるという」と

すぐに僕らの陣営にペンシル祭の不正を伝えたと、皆は一斉に立ち上がり喜んだ。

だけど、ペンシル祭側のぬか喜びを観察してたのもあって、少しの間、この部屋中の人々が皆喜んでいて奇妙な現象が起こる。もちろん、後で半分の人間が落ち込むことになるのだ。

よし、こうなったらあからさまに喜んでやろうと、ペンシル祭へと振り返る。

しかし、ペンシル祭の姿が見えなかった。

辺りを見回すと部屋の出入り口へと姿を消すペンシル祭を見つけた。

「待てよ、ペンシル祭！」

僕は逃すものかとペンシル祭を追いかけ肩を掴む。

「離しなさい！」

「逃げるつもりか、ペンシル祭」

ペンシル祭は僕の問いに耐えることなく、ただ一言呟くように吐き出した。

「離しなさいよ……」

今まで散々馬鹿にされてきたから少しはからかってやろう、と思っていた。

でも、そんな気はすっかりどこかへ消えてしまった。

いつのまにかペンシル祭はメガネを取り手で顔を覆っている。もしかして泣いているのか？

本気に落ち込んでいるかよ……

「ペンシル祭……」

ここで声をかけるのは良くないのかなと思いつつ、彼女へさらに



近づいた。

すると、僕が近づいたことを察知したのか、ペンシル祭は急にその場にしゃがみこんでしまった。

ひざを抱え顔をうずめた。肩がわずかに震えている。

僕から見て大人だったペンシル祭がただ泣いている。

むしろ、この光景は僕がコイツを一泡ふかせようと望んだものだったのかもしれない。

でも、何かが違っていた。実際に泣いているペンシル祭はすごく痛々しく、脆かった。

勝つことが大切だと言っていた彼女。負けることが許されないこの状況に怯えていたのかもしれない。

そして初めての敗北……いや、実際には二度目の敗北。

とうとう彼女は自分の負けを認めてしまったのだ。

大げさかもしれないが、ペンシル祭は存在意義を失ってしまったのだ。

僕はペンシル祭の前にしゃがみこみ声をかける。

これも気まぐれサーファーから言われていた事の一つだ。

『負けることの大切さを教えてやって欲しい』

ホントにあのおっさんはなんでも僕に任せようとするからうんざりだ。

僕はゆっくりペンシル祭の正面へ回り込む。

ひざに顔をうずめていたペンシル祭の頭が少し揺れた。

「あのさ、ペンシル祭」

「……」

ペンシル祭は僕の声が聞こえないかのように無言を通す。

しかし、わずかに肩を震わせ反応するところを見ると、聞こえているのだろう。

「そんなに負けたことを認めたくない？」

かなりストレートな問いかけ。というより、中途半端な慰めはペ

ンシル祭に失礼だと思ったからだ。

でも、相変わらず返事はなし。その代わりにペンシル祭はグツと力を込めてひざへ顔をうずめた。

もしかして、もつと追い詰めてしまったのか？

ただどこで怯むわけには行かない。

「勝負にこだわるのは構わないけどさ。他の人を巻き込むなよ。」

ラジオデイズ』のせいでバラバラになった家族もいるんだぜ」

これはもちろん波乗のことだ。

このことに関しても言いたいことはあるがここは我慢をする。

「それにここへは皆、勝つためにいるんじゃない。楽しく暮らしたいからここにいるんだろ？」

わずかに彼女の足の周りを掴んでいた手を緩む。少しは伝わっているのだろうか？

「あんだだつて放送作家を始めたときはそうだったろ？ 楽しかったよな？」

「……」

頭がわずかに動く。

あと少しだ。

「楽しいって気持ちを大切に……」

「それだけでやっていけるわけじゃないでしょ」

ペンシル祭はヒザと顔にわずかな隙間を作り、僕の言葉をさえぎった。

ふう、やっと答えてくれたな。

「勝つための戦略がなくちゃアプロでは生きていけないの。ただ、楽しむだけ、好きなだけの夢見る馬鹿はアマチュアでネタハガキでも書いていればいいのよ」

「キツイお言葉なこと」

ペンシル祭の手に持っていたメガネが強く握り締められる。

「高校生のアンタの尺度じゃあ測れないものは沢山あるの」

「さいですか」

今度は黙っていた反動か急に饒舌になったな。まあ悪い傾向ではないだろう。

しかし、その後、ペンシル祭は急に黙り込んでしまった。

どうしたのかとヒザと顔の隙間を覗き込みながら話しかける。

「ど、どうした？」

「……馬鹿みたい」

「なに？」

小さな声だったので、前半は聞こえなかったが、後半の『馬鹿』はハッキリ聞こえた。

僕の覗き込んでる行為が馬鹿みたいって事か？

「馬鹿」

「何なんだよ一体」

今度は結構力強い言葉で僕へ投げかける。

「馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿、アホ」

「はあ！？ なんなんだよ、お前は子供か」

「子供で悪かったわね」

「今度は開き直りかよ」

もう、わけが分からん。

僕が困惑しているとペンシル祭は再びヒザへ顔を埋めた。

少し開いていた足も閉じられ、腕がしっかりとその周りを抱いている。

そしてわずかに聞こえる彼女の声。

「多記君……」

「もう、何だよ！」

「ごめん」

「急に謝られても意味わからん」

「さっきの言葉撤回する。自分を賭けてやるんだもの、好きな事でありたいよね」

「……だろっな」

「負けを認めなきゃ、もう、前進できないや」

「ペンシル祭！？ お前……」

とうとう聞いたかった言葉が彼女の口から漏れ聞こえる。

するとペンシル祭は膝から顔を上げた。

「負けを認めるわ。多記透」

涙で目の周りを赤く晴らせた顔。なのに目を細め、口はわずかだが笑っている。

これをきつと笑顔というんだろう。

憑き物が落ちたようなさわやかな表情に見えたのは気のせいだろうか？

「それにしても結構あっさり負けを認めたものだな」

「まあね、実は昨日から覚悟してたの。そして今日一日中考えて……」

…本当は今日の放送始まる前から結論は出たのかもしれない」  
ペンシル祭は照れくさいのか、僕から少し視線を逸らして話し続ける。

ここでの僕は聞き役に回ることが役割だろうと思った。

「昔、まがい物の私が本物に負ける日を迎えることが怖かった」

だから必要以上に勝負にこだわったのだろう。結果だけを見て安心してるような日々。

「でも、考えてみたら本物に負けないよう、私も本物になればいいのよ」

必要以上に自分を卑下することはないことに気づけば多少は人間強くなれるものだ。

僕は世話になっている直子さんと初めて会ってしばらくしてから言ってくれた事を思い出した、

身寄りがなく、直子さんにしか頼れなくなつた俺は彼女に気に入られようと心にもないことをよく言つたものだ。

しかし。直子さんにはすぐにはばれてしまい、キツク怒られてしまった。

「私にはお世辞遣うな。ガキはくそ生意気なぐらいが丁度いい」  
僕は思わず泣き出してポカポカと直子さんと叩いたと記憶している。

その後、直子さんはニヤリと笑って「私もガキだけどね」と付け加える。なんだか目つきが怖かった。

って僕の思い出なんてどうでもいいんだよ。

この後、直子さんにしこたま殴られたなんてのはどうでもいいんだよ。

昔の思い出に浸っているところへペンシル際が話しかけてくる。

「多記君、なんだか息が上がってるみたいだけど大丈夫？」

「あはは、大丈夫、大丈夫」

とにかくペンシル祭は虚像の自分から等身大の自分へと変わった。これでひと段落に違いない。

勝負に勝ったのだからこれでこの部屋からも出られるようだしな。

「まあ、まずはアンタの後ろでぬか喜びしている馬鹿どもを静にさせないとな」

「そうね」

「一応確認しておくが、ペンシル祭、これで僕は自由でいいんだよな」

「……ええ」

「なんで『……』が入るんだよ。認めないって言うのか」

「……」  
なぜだかペンシル祭は答ええない。視線はこっちを見てるというのに。

「ん？ どうした、ペンシル祭」

よく見るとペンシル祭の視線がわずかに僕から外れていることに気づく。

不思議に思い、その視線をたどって、振り返る。  
するとそこには見覚えのある人物が立っていた。

「あれ？ アナタは確か……」

この人は確か最初に僕へ自分のネタハガキを見て欲しいって頼んできた人じゃないか。

なんだペンシル祭はこの人を見てたのか。

「ああ、ペンシル祭、この人はな……」

僕が説明しようとするペンシル祭の口からわずかに声が漏れる。

「……由部くん？」

「えっ！？」

この人が由部！？

ペンシル祭のいった言葉が信じられずにもう一度良く確かめる。

そこで僕は納得してしまふ。

なんで顔も知らないのに納得したのか？

その理由とは彼の手にナイフが握られていたからだ。

## 第42話 「老体に鞭打ってよく頑張った」

ぱつと見特に変わった様子もない、こいつが由部渡なのか……  
背丈は僕と変わらない175あるかないか、特に太っているわけでもない。

顔だつて、多少不精ヒゲはあるものの特徴がある人相でもない。  
ゆっくりだが確実に手に持ったナイフが蛍光灯に照らされて鈍い光を放ち揺らめきながら、近づいてきている。

「ペンシル祭。な、なんだよ、あの手に持っているのは」

「ナイフでしょうね」

「……見りゃわかるって」

ペンシル祭と実りのない会話を続けているうちに由部とおぼしき人物は無言でさらにこちらへ近づいてくる。

僕の背中に冷たいものが走る。きつと冷や汗だろう。

じりじりと高まる緊張感、いつの間にか周りの喧騒が良く分からなくなる。

すると彼の口がわずかに開いた。

「やつと……負けを認めたな」

さつきは普通の人に見えたけど、よく見れば、目は血走ってて、薄笑いなんか浮かべてやがる。

やっぱりおかしいよ、コイツ。

つていうか、やべえ！ 本気でピンチだ。

誰か助けをと思い、周りを見渡すがまだ馬鹿騒ぎしている。

それにしても今までなにもしなかったのに、なんで今回に限って襲って来るんだよ。

ってどンドン近づいてくるし。

「多記君、そこをどきなさい」

僕の腕を掴んで、体勢を入れ替えようとするペンシル祭に気づく。力強く引つ張るが僕の体が腕以外動くことはない。

「いや、それは無理」

「どうして？ 狙いはきつと私なのよ」

知ってるよ。アンタと由部の因縁はな。

でも、ここを動くことは出来ないんだ。

「ああ、きつとアンタ狙いだろうな」

「だったらどうして!？」

それはなあ……

理由は二つある。

まず一つは波乗文との約束があるから。

「どうしても無理」

二つ目の理由は

「そんな……」

怖くて動けねえんだよ！

分かってくれよ！

そして僕の二の腕がギュツと握られる感覚がした。

「多記君、ありがとう……」

うわっ、なにしおらしくなってるんだよ！

わわわっ、近づいてくる……!!!

僕はいつのまにか、とがった先から目が離せなくなっていた。

くそお、刃物が近づくと動けなくなるって本当だな。

あゝっ、もう、こうなったら自棄だ！

「てめえ、いつまでもくだらねえ、言いがかりつけてんじゃねえよ  
!」

「多記君!? アナタ何を!？」

「ホントに自分のやりたいことやりたかったら、自分で動けよ!

すくなくとも、この人は自分で動いて『ラジオデイズ』を作ったんだぞ!」



おおっ、なんだかわからんが相手の動きが止まったぞ。

無茶でも言ってみるもんだなあ！

「あの時もこの人に企画書を渡さず、自分で持っていけばよかったんだ！ 頭下げてでも読んでもらえばよかったんだよ！」

こつなつたら説き伏せるしかない。

見るよ、奴の肩が震えて感動して……

「うるさい！ 俺の気持ちがわかるかつ！！」

って逆効果！！

ナイフ握り直してこつちへダツシュしてきたしっ！！

目が本気だ！ 本当に刺すつもりだ！

「くっくっくっくっ！！」

僕は来るべき痛みと衝撃に備えて目を瞑り、身を硬くした。

痛いんだろっな、きつと痛んだ。

あああっ！

っっていうか腕が痛い！

痛い痛い痛い！

メチャクチャ痛え！

ペンシル祭、そんなに爪を食い込ませるなよ！

「くっくっ……」

……って、あれ？

いつまでたつても衝撃が来ないぞ。

しかも腕が痛いのは薄目開けて確認したらペンシル祭が腕を掴んでいた痛みだったし。

一瞬「？」が僕の頭を埋め尽くす

次の瞬間、何かが強烈に壁にぶつかる衝撃音がした。

「きやあああああっ！！」

さらに誰かの悲鳴が室内に響く。

反射的に衝撃音がした方向へと顔を向ける。

この部屋の壁側に人が二人重なるように倒れていた。  
その一人は由部渡、そしてもう一人は……  
「波乗……じゃなくて気まぐれサーファー！」

先ほどの喧騒はなくなり、すっかり静まり返った室内では時折気づいたように小さな悲鳴が上がる。

その原因は床に転がっている血がついたナイフによるものだった。状況から見て気まぐれサーファーが由部に体当たりを食らわせたのだ。

急いで僕は立ち上がり倒れている二人へと近づく。

その後にペンシル祭も駆け足でついてくる。

とりあえず、由部は放っておいて気まぐれサーファーからだぐったり横になって倒れている、肩を掴んで仰向けにさせる。

「おい死ぬな、しつかりしろ！」

「……大丈夫だ。こんなことで死ぬか」

案外、あっさりと目を開けむっくりと上半身を上げる。

見た感じ無傷のようだ。

とりあえず感謝の言葉を言わなくては。

「ありがとう、老体に鞭打ってよく頑張った」

「誰が老体だ。あんな親父と一緒にするな」

「親父？ アンタ、波乗丈じゃあ……」

「シーツ！ 静かにしろ、周りに聞こえるだろ」

確かに良く見ると昨日の姿よりガツシリしてる気がする。

じゃあ、お前誰なんだよ。

「昨日から体鍛えた？」

「そんなにすぐ効果は出ないだろう」

「そうだよなあ」

「多記君、なにに納得してるか私には分からないんだけど……」

ペンシル祭がかがみこんで僕たちをじっと見ていることに気づい

た。

なんだ、この人は気まぐれサーファーの正体を知らないのか。僕がどう答えていいかわからずあたふたしていると気まぐれサーファーが返答してくれた。

「心配するな、体当たりの瞬間、奴の鼻を思いっきり殴ってぶつかったから、由部の鼻血がナイフについただけだ」

「そうなの？」

あらためてペンシル祭は倒れている由部を見つめる。

倒れているが鼻血でもぬぐっているのだろうか、わずかに体が震えている。

そんな姿を見ていたペンシル際は拳を軽く口に当て、何か思案しているようで、眼鏡越しの視線はどこか悲しそうだった。

「由部君……」

ペンシル祭はゆっくりと由部へ歩み寄る。

「ちょっと待て、ペンシル祭」

ペンシル祭の身の危険を案じ、呼びかけようとしたが、気まぐれサーファーが僕の肩を掴んだ。

「なにするんだよ」

「いいから、見てろ。皆がいるんだ、もう由部は何も出来ないさ」  
本当にそんな樂觀的でいいのだろうか？

という不安を抱えつつ、ペンシル祭と由部の行くえを見守った。

### 第43話 「あきらめない」

ペンシル祭は由部に一言二言話しかけると、ゆっくり彼の半身を起こした。

さらにポケットからハンカチを取り出すと、丁寧に鼻血をふき取る。

由部は抵抗せず、どこを見るところというわけでもないまま呆然としている。

ほとんどの人が状況を把握できないままにその状況を見守った。

「あの……」

由部は無言でペンシル祭へと顔を向ける。

すると、ペンシル祭は立ち上がり、頭を下げた。

「ごめんなさい」

しっかりと直角に腰を曲げた丁寧な謝罪。

静まり返った室内が由部の反応を待つ。

由部はペンシル祭のハンカチを鼻に当て、しばらくペンシル祭の姿を上から下へじっくり観察するように見つめた。

ペンシル祭は頭を下げたまま動こうとはしない。

やがて、すっかり落ち着いた様子の由部はゆっくりと答える。

「そんなことで償えたとしても思っているのか？」

わずかにペンシル祭の肩がピクリと反応する。

おそらくこういった言葉が出ると思っていたが、いざそう言われると返答に困るものだ。

彼女はどうか答えるのだろうか？

そして少し間を空け、ペンシル祭は答えた。

「まあ、そこまでは思っていないけどね」

なんだあ？ 返答軽いなあ、開き直りか？

ペンシル祭の答えに由部の動きが一瞬止まる。

「俺は絶対に許さないぞ」

「それでいいよ」

「冗談じゃないぞ」

「わかってる」

明らかなペンシル祭の開き直ったような態度に腹が立ったのか、由部はすばやく立ち上がって、床に転がるナイフを手に取る。

「おい、また暴れようとしてるじゃないか！ どうするんだよ気まぐれサーファー！」

「ああ、すっかりナイフのこと忘れてたな」  
気楽に言うな！

由部はじりじりとペンシル祭との間を詰める。

「さあ、さっさと警察に通報しろよ。じゃないとアンタの身の安全は保障できないぜ」

由部の一言に室内に緊張が走る。

コイツ、やっぱりまだ暴れる気なんだな。

「由部君、周りを見なさい」

由部が目だけを動かし辺りを探る。

周りの男どもは緊張した面持ちで徐々に由部を取り囲もうとしていた。

「なんだ、脅しのつもりか？ 俺に近づいたら誰だろうと刺してやるぜ」

由部の脅しに僅かに包囲網が広がる。

まあ、たしかにビビる気持ちもわかるがな。

「脅しなんかじゃない。周りの人間はアナタの味方だよ」

「馬鹿馬鹿しい」

僕も由部と同じ事を思ったが、口にするのはやめた。

ペンシル祭は臆する様子もなく話を続ける。

「だって、この人たちはラジオデイズに賛同して集まった仲間だもの」

「なっ!？」

由部は目を大きく開き、ナイフを握っていた手が僅かに緩む。その言葉は確かにコイツに伝わったのだろう。

「騙されないぞ……」

「私の負け。アナタのラジオデイズに負けました」

再びペンシル祭は頭を下げた。

その行為に由部は一步、わずかに後退をする。

「アナタに足りなかったのは勝つこと。私に足りなかったのは負けること。そのどちらもラジオデイズが与えてくれた」

「でも、俺は……」

上手く言葉が繋がらない由部。

それに対し、ペンシル祭は頭を上げると気持ちの良い笑顔で答える。

「それでいいじゃない」

「っ……」

「お互い、0からのスタートっていうことで」

「か、勝手に決めるな!」

突然の敗北宣言に由部は明らかに動揺していた。

無理もない。自分の企画が知らないうちに進行し、いつの間にか勝者になっていらのだから。

それにしてもペンシル祭はさっきの敗北でここまで開き直れる人間になったというのか?

人ってというのは意外にたくましいな。

その時、部屋の隅で誰かが通報するために室内を出ようとする影が目に入る。

気づいたペンシル祭は頭を上げて、声をかけた。

「ちよつと待って、通報は止めて!」

ペンシル祭の言葉に由部は自分の使命を思い出したように再びナイフを握り締め、彼女へと刃先を向けた。

僕はペンシル祭の前へ思わず身を乗り出す。

口を出すなど言われたけど、ペンシル祭の身の危険がある以上、もう黙っているわけには行かない。

「通報しないなんてペンシル祭、お前を狙ってるんだぞ」

「構わない」

「はあ？ また刺されてもいいって言うのかよ」

するとペンシル祭は由部へと目をむけ、ゆっくりと答える。

「彼はもうしないよ」

「何言ってるんだ。現に今……」

「だって、刑務所に戻ったら、企画を考えてる暇がなくなるもの」

すつきりとした笑顔でペンシル祭はこともなげに言った。

由部はわずかに顔をゆがませ、ペンシル祭から視線を逸らす。

「そんな事で俺に恩を売ったつもりか？」

「別にそんなつもりはないわ」

わずかな沈黙が二人にあった。

お互い何か考えることがあったのかもしれない。

「俺はあきらめないからな」

「お前、まだペンシル祭を狙う気か！」

「勘違いするな。あきらめないのは放送作家をだよ」

「えっ!？」

そう言い放つと同時に持っていたナイフを床へ投げ捨てる。

僕はもう、危険な目に会うのは嫌なので、すぐにナイフを捨てた。

ナイフの柄の部分がかかなり湿っている。

きっと大量の汗をかきながら握っていたに違いない。

「必ず、復帰してみせる。そしてアンタを超える放送作家になるんだ」

由部の周りを男たちが囲むが、彼は抵抗することなく大人しくしていた。

よく分からない展開だがこれで良かったんだよな。

ペンシル祭は男たちをどかせ、由部へ歩み寄る。

「ええ、待つてる」

「ちっ、余裕だな」

自然に両者から手を差し出す。

なんだかよくあるような仲直りのシーンだ。

こんなことで簡単に解消されるものなのか？ と思いつつ、この

状況を微笑ましく見守った。

まあ、いいじゃないか二人がそれで納得していれば。

自然と室内が拍手に包まれていった。状況もわからないが、この雪解けムードはわかったようだ。

そしてお互いの手が触れようとした瞬間

大きな音を立てて入り口のドアが空けられる。

同時に皆の視線が集まった。

入り口に立っていたのはこの住人らしき男。倒れこむように室内に入る。

荒れる息を整えると皆に聞こえるよう、大声で叫んだ。

「たっ、大変です！！ 敵が、敵が攻めてきました！！」

「はあ！！！！？」

なんですと！？

敵だつて？

おいおい、お前たち今まで何と戦ってたんだよ。



シンと静まり返った室内。誰もが次の言葉を探していた。そして、わずかな雑音が耳に入る。

雑音は最初は小さく、やがて誰の耳にもハッキリとわかるような大きな音に変わっていった。

どんな音か例えるならヘリコプターのプロペラ音だな。

だが、こんな場所でそんなものは来るわけない。一体何なのだろう。

この異常な状況に誰もが動けずにいる中、ペンシル祭は大きな声で駆け込んできた男に質問する。

「何なの一体！ 敵って誰!？」

なんだよ、お前も知らないのかよ！ じゃあ、誰の敵なんだ？

ペンシル祭は男に耳を傾け、詳しい事情を聞いている。

するとペンシル祭が僕に顔を向けた。

「多記君、敵に心当たりは？」

「あるわけないだろ！」

「でも、この人は敵が『多記君』と叫んでいると答えているけど？」

「んな、馬鹿な……」

僕が思い当たる節がないか考える。

うーん、さっぱりわからん。

その間にも外から聞こえるヘリのような音はガラス窓を小刻みにやがて割れんばかりに揺れさせた。

そして、窓が不意に眩しく光る。

光に驚いた人達の小さな悲鳴が上がった。

っていつか何の光なんだ？

『タツく~~~~~~~~ん!~!』

今度は外からエコーがかつた拡声器からの声らしきものが聞こえた。

「は？ 今、『タツくん』っていったよな。自然に僕へと周りの視線が集まっている。

待て待て、「た」がつくあだ名なんて他にいくらでもいるだろ。とか思っているともた声が聞えた。

『多記く~~~~~ん!!!』

「ぼ、僕!？」

どう考えても僕を探している声じゃないか。しかも、この二人の声は聞き覚えがある。

この声の主は

次の瞬間、僕にライトが窓越しに直接照らされる。

「うわっ！ まぶしっ！！」

『いた~~~~っ!!!』

同時に二人合わせた声がこだまする。すると突然室内が暗くなった。

室内は軽いパニック状態に。

何が何だかわからんぞ！

「突入っ!!!」

なにか怒鳴り声が出た。

と同時に窓側からももの凄い破壊音。

数多くの悲鳴が室内に響く。

とてつもなくヤバイ予感がする!!!

窓ガラスが割れる音が出て、何か室内に放り込まれた。

ゴトリと床へ何か落ちる重い音がする。と、そこから煙が噴出した。

その煙をすった者は急に咳き込み出し、目を押さえる。

まさか、催涙ガス？

こうなると完全に室内は混乱の度を極め、右往左往とする人たち

で身動きが取れなくなる。

加えて周りが暗いので加速度的に恐怖心が膨らんでいく。

「落ち着きなさい！、落ち着いて皆、この部屋から逃げなさい」

必死のペンシル祭の声なんかも悲鳴にかき消されている。

しかし、脱出することだけは伝わったのか、出入り口へ人が群がる。

な、流される〜！ 押しつぶされる〜！

もう、これからどうなるんだ〜〜〜〜〜〜〜〜！

僕の混乱が頂点に達した時、タイミングよく拡声器から再び聞きなれた声が聞こえた。

『じゃじゃ〜ん、呼ばれなくてもいざ鎌倉。 琴和リンただ今参上！』

『リンちゃん、ここ鎌倉じゃないよお』

「琴和リンだと!？」

確かにでかい琴和リンの声と小さくツツコミを入れる声。 なんてここがわかったんだ!？

『煙いから、これなんとかして〜〜〜』

再び、琴和リンの声が聞えたと思えば、急に僕らに向かって強風が吹き始める。

暗くて状況が良くつかめん。 周りも混乱状態になっていて、どうにもならないし。

だが、リンがこの件に絡んでいる以上、ここを逃げるわけには行かない。

なんとか暗闇にも目が慣れてきた僕は流れにさからってわずかが室内へ戻る。

人の塊から何とか抜け出し、ヒザをついて息を整える。

後ろを振り返るとまだ出入り口には人が群がっていた。

その騒ぎを人事のようにつめる。

「多記君も抜け出せたようね」

声のする方へと顔を向けると、僕を覗き込んでいるペンシル祭が

いた。

「ペンシル祭、なにが起こったかわかる？」

すると、ペンシル祭は呆れ顔で鼻から軽く息を吐き出し、腰に手を当ててた。

「まったく、なにかと思えばやってくれるじゃない」

「なにが？」

「お迎えよ」

するとペンシル祭はこうなってしまった張本人へ顔を向ける。

つられて僕も目が動く。

『も、暗いのも嫌』

またもや拡声器の音が聞えると、無線機で交信しているような声が聞え、すぐに室内に明かりがつく。

ようやく室内の状態がハッキリした。

室内は多くの人が脱出し、残っているのは数人になっていた。

また、窓枠についていた鉄格子は取り外されていた。

さらに窓ガラスは割られ、すっかり跡形がなくなっている。

加えて、いつの間にか大きな扇風機のようなモノが数台こちらに向けられ置いてある。なるほど、さっきの強風はこれが。

そして窓の前には数人の屈強な男たち。

服装は上手く言えないが、よくテレビなんかでテロ対策の訓練なんかやっている自衛隊のような感じか？

その男たちの中央には見慣れた姿があった。

頭の高い位置で髪を二つに結んだツインテール。

華奢で背が高く、服装はピンクのヒラヒラが随所に付いたドレス。さつきからわがまま発言ばかり繰り返してるコイツは

「琴和リン！」

「やつほ、タツくん迎えに来たよ！」

僕をハッキリ見つけたリンは何度か飛び跳ね、自分がいることを

アピールした。

いや、アピールしなくても分かるから。

「まさか、お前たちから来るとは思わなかったよ」

「はっはっはっ、友情ばわーは無敵なのだ！」

「それにしても派手なお迎えだな」

おそらく僕は苦笑していたに違いない。

まあ、なんにしてもこれで帰ることが出来るわけで。よかった、よかった。

僕はヒザのほこりを払い立ち上がる。

ペンシル祭にも勝ったし、誇らしい気分で帰れそうだ。

「ちょっと待って」

ペンシル祭が僕の邪魔をするように立ちふさがる。

「どうしたんだよ」

するとペンシル祭のメガネのレンズがキラリと光った気がした。  
嫌な予感。

「こんな殴り込みまでかけられて簡単に返せるわけじゃない」

「そんなー、勝負に勝っただろ！」

「いや、なぐんかこのままだと”負けた感”がするのよね」

ペンシル祭の目つきが、おかしい。

この状況にとうとう変になってしまったのか？

「アンタ、負けを認めたんじゃないのかよ！」

「何でもかんでも負けを認めるほど落ちぶれちゃあいないわ」

ペンシル祭は「へへっ」と言いながら親指を突き出して自分の下唇をなぞった。

いつの間にか僕の周りを数人の男が囲んでいる。ペンシル祭の手  
下か？

余計なところで負けず嫌いを発揮するな！

「それに……」

「なんだよ」

わずかだがペンシル祭が口ごもる。

モゾモゾとした口調で僕にしか聞えないような声で話す。

「アナタにはもうちよっというて欲しいかも」

なんだそりゃ!?

「そう来なくっちゃ! でも、必ず悪は滅びるのです!」

うわあ、なんだかリンが嬉しそうだよ。

もしかして僕が素直に帰っていたら「つまんない」とかいつて追い返されたかもしれない。

と、考えている間にリンは背中にかけていた長くて黒い塊を頭上に挙げた。

「じゃじゃ〜ん、これな〜んだ」

皆の視線が長くて黒い塊に集まる。なんとなく銃身にみえるな。

先にはなんだか電球によってチカチカ光っている星が見える。

「魔法の・銃・だ・よ」

やっぱり銃かよ!!

リンは宣言してすぐに自分の右肩正面へ銃を当て、銃身を左右に振る。

軽い発射音の後、無数の玉がこちらへ飛んできた。

「キラキラリ」

ン

って乱射かーい!!

「きゃあああつ!」

「うあああああつ!」

玉が当たったと思しき人はみんな痛いと言つてのけぞったり倒れたりした。

ピンクのヒラヒラ付きドレス、星型がついた銃。

きわめて考えたくない結論だが、まさか、魔法少女のつもりか!?

無差別発砲とは、なんて邪悪な魔法少女なんだ!!

そしてその銃身はいつの間にか僕にまで向けられた。

「キラキラリ」

ン

「痛たたたただだだっ！！ あたってる！ 当たってる！ あだってる！」

「ほへ？」

「リン！！ お前、僕にまで撃つんじゃねえよ！」

「男は黙って銃・殺・刑！」

「ふざけんなっ！！！」

玉が当たった背中をさする。

どうやらBB弾が床に転がっていることから、あれはエアガンらしい。

でも、相当痛いぞ。皆も倒れながら当たった場所をさすったり、抑えたりしている。

ペンシル祭がうずくまって悶絶している！

一番至近距離にいたからな。そりゃ痛いわ。

っていうか、良い子は真似するなよ。

「リン、さすが。エアガンぶっ放す姿もカ・イ・カ・ンですわ！！」  
なんだこの二世代ほど前のギャグは！？

涙目を擦りながらいつの間にかリンの隣に立っている、長い黒髪の女性が目に入った。

その女性は僕へ薄笑いを浮かべながら話しかける。

「お久し振りですわね、多記透」

「アンタは琴和ラン？」

リンの姉であり、シスコン全開の琴和ラン。

昔、手痛い目にあった記憶しかない。

紫を基調とした着物をまとった彼女は僕へとゆっくり近づいてくる。

「覚えてていただいて光栄ですわ、多記透」

するとニコリと笑い、手に持っていた細長いモノを突き出す。

細長いモノすなわち長刀。

なぜ長刀を僕へ向けてますか？

僕の緊張した表情を読み取ったランはさらに一步前進して長刀を突き出した。

思わず背筋がゾツとする。ほんのりひんやり。

「不本意ながら”リンたつての願いで”しようがなく”琴和家私設警備兵を引き連れてきてあげましてよ？ なにかご不満でも？」

「め、滅相もございませんことよ、おほほほ」

「多記君、言葉がうつつてる」

「はつつ」

ペンシル祭、いいツッコミだ。

僕は慌てて自分の口を押さえる。

しかし、なるほどそういうわけか。どうりでへりなんか使えるわけだ。

さらには私設警備兵って……警備員じゃなくて兵なんだよな。

「まあ、今日はこれぐらいにして差し上げますわ。アナタを社会的に抹殺することも生物学的に消滅させることもいつでもできますから」

「あ、そういつてもらえるとありがたいね」

ダメだ。僕はこの人にいつか殺されるな。うん、確実だ。

そんな殺伐としたやり取りの中、琴和ランの後ろから小さく僕を呼ぶ声が聞えた。

「多記君……」

琴和ランの背後から恐る恐るこちらを伺う人影。

しばらく見ていなかった彼女の顔。

もう、何年も見てないような気がしたよ。



## 第45話 「おかえりなさい」

突然あらわれたへり。あらわれた琴和姉妹。

そつが皆で助けに来てくれたんだな。ということは仲直りしたのか？

じゃあ、川上や工藤は？

色々な考えが巡るが、まずは僕に向けられた視線から片付けよう。

見間違いではなければ、あれは波乗のはずだ。

二つにしばった髪に不安げな大きな瞳がこつちを見る。

「もしかして波乗か？」

すると波乗は琴和ランの後ろから覗いていた顔を引っ込めた。

お前はイタズラを見つかった子供かよ。

波乗の壁にさせられた琴和ランは勝ち誇ったような表情を僕に向けた。

「ずいぶん嫌われたみたいですね、多記透」

んなこと言われてもなあ。

波乗がそんな態度をとる理由がわからんし。

「なんだ？ 何かあるならハッキリ言えよ」

すると波乗はピクリと肩を反応させ、その後、琴和ランの着ている着物の袖に自分の指を絡ませてモジモジしている。

「うんとね、うんとね……」

「ちょ、ちよつと、待ちなさい……多記透、何とかしてっ！」

「僕のせいだよ。おい波乗、琴和ランも困ってるから早く出て来いよ」

「だって……だって、だって、だってだって、だってだってだっ  
！」

『だって』が加速度を増すと共に指を絡ませる動きも早くなってい  
いく。

「ああつ、私の着物がっ！！ 貴方たちじつとしてないで早く助けなさい！」

慌てた琴和ランは周りの私設警備兵に命じて波乗を自分から引き離す。

波乗はジタバタしながら琴和ランと僕の間へと運ばれた。

正面から向かい合う形になった彼女は僕から視線を逸らし、なんだかバツの悪そうな表情をした。

「なんなんだよお前は。言いたいことがあるならハッキリしろ」「うっっ」

おいおい、今度はこっちを向いて少し睨んでるし。しかも涙目で何だか唸ってるぞ。

波乗の態度について意味がわからない僕はだんだん腹が立ってきた。

いちいち付き合ってられない。僕は波乗から背を向けた。

「唸ってるだけならもう帰るぞ」

「えっ!?!」

「じゃあな」

「ああつ、待って、行っちゃ駄目です」

「だったら、言いたい事を言え！」

僕は振り返って再び波乗と向かい合う。

白のブラウスに紺のスカートって、夏休みだというのに何故か高校の制服を着ているぞ。

まさかこれが学生の戦闘服とか言わないよな。……っとおちやらけている場合ではない。

さっきから視線が痛い。

すると波乗は俯き加減で僕をチラチラ伺いながらようやく口を開いた。

「あの……」

「どうしたんだよ」

「ち……近づいていい？」

おい、待てよ。そんなこと言ったために今まで粘ってたのか？  
つたく、馬鹿馬鹿しい。

波乗は手を後ろで組み、軽く体を揺らして僕の返事を待っている。  
「なんでいちいちそういうこと聞くんだよ」

「だって……」

不安げな表情で僕を伺う波乗。

こんな表情を少し前に見ていたような気がする。

「あっ」

そういえば。

宝条リンのメンバーが皆波乗の家へ来なくなったとき、二人きり  
になって雰囲気になされたというか、なんというか、波乗と付き合  
ってるみたいないな関係になっただんだよ確か。

はがき書くのをそっちのけでなんだか化粧なんかしだした波乗に  
違和感を覚えて……

『……明日も……来て……くれる？』

『あ……当たり前だろ……明日も来る。じゃ……じゃあ今日はこの  
辺で帰るから』

とか言って波乗の部屋から逃げ出したんだ。

その後、玲子さんに誘われて、ペンシル祭に殴られてここへ連れ  
てこられて……

波乗とはそれっきりだから気まずいはずだな。

ペンシル祭との勝負もあって波乗のことを考えるのすっかり忘れ  
てた。

というか現実逃避してた。

「多記君、聞いてますか？」

「おわっ！」

おお、思いつきり回想に耽っていた。

にしても、この場所って現実世界から離れた場所にあるせいで現

実のことを考えなくなるんだよな。

とはいえ今は現実。

僕は波乗の目の前に立っているのだ。逃げ出すわけにも行かない。かといって「近づいていいよ」とか言ったら、波乗の気持ちに応えたことになるし。

くうっ、どうしたらいいか答えは見つからない。

もうわかんねえ！！

「優柔不断なやつだ。男なら黙って受け止める」

「だ、誰だ！？」

迷っている僕の背後には、いつの間にか気まぐれサーファーが立っていた。

っていかお前いたのかよ。

といった雰囲気を感じたのか気まぐれサーファーは勝手に答えた。

「逃げ遅れて撃たれた」

「なるほど」

わき腹の辺りをさすっているところを見ると、ここにも犠牲者はいたらしい。

「早く、澄音の問いに答えてやれよ」

「でも、いいのか？ 波乗はお前の……」

「気にするな。それにあんな澄音のお預けを食らったような表情はそうそう見れるものじゃない」

気まぐれサーファーに言われるまま波乗へと視線を向けると、確かに物欲しそうな表情で僕をジッと見つめていた。

しかも僕は目が合った瞬間、視線を逸らしてしまった。

「十分わかった。でもな」

さらに言い訳をしようとする僕へ気まぐれサーファーは面倒だと言わんばかりに腰に手を当て、ため息らしきものをついた。

「俺が許す。ほら、身内公認だ。良かったな」

「そっという問題じゃねえよ」

っていつか後ろからボソボソ話しかけるな。  
だいたい前のこと思い出した以上、そんな簡単に受け入れられるか。

「ただど気まぐれサーファーはそんな僕を気にせずに話し続ける。」

「好きか嫌いかなんて後から考えればいい」

「それが肉親の言うセリフか!？」

「俺としてはお前の代わりに抱きしめてもまったく構わんが、それは澄音が嫌だろっからな」

「と言いながらさらに僕の背後に近づく気まぐれサーファー。」

「ぴったりコイツの体が僕の体に密着して、気持ち悪っ。」

「まあ、ハッキリ言えば”我慢”してやるから、澄音を安心させてやれってことだ。お前の理由なんか知ったことか」

「なんだと!？」

「するとどこから出してるんだというような声色で、気まぐれサーファーは波乗に向かって叫んだ。」

「僕に近づくのには遠慮はいらない! とつと飛び込んで来い!」

「うわっ、お前、何言っただよ!」

「多記君。それ、ほ、本当!??」

「おっけーい」

「また勝手に言 うわああっ!」

「僕が気まぐれサーファーに抗議しようとした瞬間、背中を思いっきり押されてしまった。」

「そのまま波乗の前までつんのめる様に駆け寄る。」

「なんとか体勢を整えると、波乗は僕のほんの数センチぐらいに近くにいた。」

「多記君、やっと会えた……」

「そ、そうだな」

「真っ直ぐな波乗からの視線は僕をしつかりと捕らえる。」

僕はその場から逃れられなくなってしまった。

このまま雰囲気の流れられるかもしれない。

「多記君」

「な、なんだよ」

「多記くん」

「だからなんだよ」

「多記くん」

僕の名を呼ぶごとに波乗の瞳はどんどん潤んでゆき、勢いそのままに僕に飛び込んできそうな体勢だ。

やっぱり今度は流されちゃあいけない！

僕はとっさに波乗を手で制す。

「ちよつと待った！」

「はい！？」

波乗は前に傾きかけた上半身を両手でジタバタさせてバランスを取った。

そのあとキョトンとした表情で僕を見上げる。

僕は息を整え、口元に拳を当てて大げさに咳払いをした。

「えー、コホン。今から言うことは偽らざる本当の気持ちだ」

「多記くんの本当の気持ち？」

「ああ、聞いてくれるか？」

すると波乗は不思議そうな表情を引き締め、慎重にゆっくりと答えた。

「うん」

僕は心の中で深呼吸をして、自分の間を整える。

そして心が決まると、何とか言葉を吐き出す。

「僕は波乗のことが好きだ」

「うん」

波乗は喜ぶかと思われたが、意外にも真剣な表情を崩さずに僕の話聞いてくれている。

「どうやら彼女にもこの話の続きがあることはわかったみたいだ。でも正直、この好きが、恋愛感情から来るものなのか、友情なのかわからない」

波乗にしてみたらショックな事実かもしれないが、本当の気持ちをそのまま伝えることにした。

悲しむ顔は見たくないがしようがない。

しかし、波乗は僕の予想に反してニコリと微笑んだ。

「いいよ、それでも」

「本気か？ 付き合えないかもしれないんだぞ？」

「それでもいいです」

「えっ……？」

波乗が浮かべる笑顔での返答に僕は次に言おうとしていた言葉を忘れてしまった。

彼女は相変わらずニコニコしている。

「だって、私はそれでも多記君のこと好きだから」

笑いながら言われても、重い言葉だなそれ。

また、逃げ出してしまいそうだ。

「もちろん宝条リンのメンバー、皆のこと大好き」

「？」

「皆、仲間だしね」

「ああ、なるほど」

ようするに友達に格下げってことか……

なんだかホッとした。

お陰で少し余裕が出て視野が広くなった気がする。

だってさっきまで波乗の顔しか目に入らなかったのだから。

「なにより多記君は『来なかった』んじゃないかって、『来られなかった』んだって分かったから」

「あっ、そうだな……」

次の瞬間、ホッとした自分が恥ずかしくなった。

あの時、僕は捕まっつてすぐに逃げることを諦めた。でも、波乗はきつと待つていたに違いない。

玄関先や部屋なんかで一人、僕の来るのを待つていたんだ。それなのに僕は……

「きつとあの時はどんだん皆がいなくなつて心細くなつたんだと思  
う」

そついうと波乗は一瞬、口を一字にした。

波乗は強がつている。

だつて組んでいる手が震えてるんだぞ。嘘つて丸分かりじゃないか。

「本当にいいんだな」

「はい」

「僕はずるい奴だからそれで納得するぞ」

「うん」

彼女なりの精一杯の笑顔をみせる。

少し緊張気味で上手く笑えてないけど、僕には波乗の気持ちは十分伝わつたし、これ以上追い詰めるのも良くない気がした。

波乗が決めたことだ、僕が今から無理に掘り起こす事はない。

結局元に戻つただけだし、まあいいじゃないか。

「つたく、たかが付き合つ、付き合いがないでなに考え込んでんだか別に結婚するわけじゃあるまいし」

スキーゴーグルをつけたままの人間に言われたかない。

うるさい外野はこの際無視だ。

僕が気まぐれサーファーに気を取られていると、波乗は僕の服の袖を引つ張つぱつた。

「どうした？ 波乗」

「お願いがあるんですが……」

「なんだよ、言つてみる」

すると波乗の表情は微妙にこわばつた。



「友情でもなんでもいいですから、その……もう少し近づいていい？」  
「もう少し近づく？　もう十分近いじゃないかと言いかけて止めることにした。」

これ以上この子を拒否してはいけないような気がしたからだ。  
友達として、友達として。優柔不断と言っなら言えはいい。

「いいよ」

「ありがとう！」

目を細め口からは白い歯が見えた。

彼女のここへきて一番の笑顔を見た気がする。

そして波乗はその場から僕へとゆっくり身をゆだねた。

さっきまではあんなに避ける気持ちが高まっていたのに、抱きしめた途端、一斉に僕の体中の感覚が反応した。

柔らかい衝撃と共に僕の体に波乗が重なる。と同時に波乗からの香りが僕を包む。

きつと髪から香るシャンプーの匂いなんだろうな。

「良かった、多記君が生きてる」

「バカ、そんな簡単に死ぬかよ」

「うん、うん！」

波乗はそう長くはない自分の両腕を精一杯僕の背中へ回す。

僕もそれに合わせるように背中へ腕をまわすと、小柄な体がすっぽりと収まる。

抱きしめた腕からは華奢な体を感じる事ができた。

よくわからない感情が高ぶり、僕はグッと両腕で強く抱き上げる。

「え！？　た、多記君」

「ごめん、心配かけたな」

「……うん」

手のひらからは背中起伏を、体全体からは緊張して高鳴っている心拍が伝わってきた。

すっかり僕は久し振りの波乗を感じていた。  
体が覚えてるといふのだろうか？

「お帰りなさい」

「つて、お前たちが迎えに来たんだろうが」

「えへへ、そうだね」

やっぱり僕は波乗のことを恋愛対象として好きかもしれない。

んなこと考えるから、ハッキリしない男になってしまふの  
だろうが……

「つたく、身内の目の前で見せつけてくれるな」

「なんだよ、お前が受け止めてやれなんて言ったんじゃないか」

「ものには限度というものがある」

ゴーグルでわからないはずの気まぐれサーファーの視線が、  
どうも抱きしめた僕の腕にあるような気がした。

僕は瞬間的に腕を波乗から離れた。

「いや、これはい……」

「あつ。はあ……」

波乗から小さなため息が漏れたのは気のせいかな？

気まぐれサーファーはニット帽の上から頭をかくと、  
琴和リン達を指差した。

「わかったから、さっさとあの迷惑な連中を連れて帰れ」

「うるせえ、お前に言われたかねえよ」

いつの間にか僕の肩越しに波乗は会話の主を見つめていた。

しばらくジッと観察していたがやがて、何かに気づいたように  
咳く。

「あれ？もしかして……」

まずい、波乗が気まぐれサーファーに気づいてしまった。

## 第46話 「夏の終わりに」

まずい、波乗が気まぐれサーファーに気づいてしまった。

「あのニット帽だとかゴーグルつて、なんだか家で見たとような……」  
わわわ、まずい。正解に近くなっている！

いや、待てよ。

これは波乗にとっては父親に会えるチャンスなのか？

とはいえこのままラジオデイズを終らせるのは惜しいぞ。

って何考えてるんだよ。波乗が幸せになることが大切じゃないか。  
どうしよう。さつき以上に頭をめぐらせ、気まぐれサーファーの  
正体を知らせるべきか否か考える

うーん、うーん……よし、決めた。

「あ、あのな、波乗。こいつは気まぐれサーファーと言って、ここに  
に住んでるただのリスナーだ」

ダメダメだあ、僕は。

折角のチャンスだったのに誤魔化す様なマネをしてしまった。

これって僕がラジオデイズを望んでいるってことなのかな？

「この感じどこかで……あつ、わかった！」

しかし、波乗はそんなこと聞いていないようだ。

僕の体の横から顔を出して、気まぐれサーファーに話しかける。

「待て波乗、違うんだコイツは」

「お兄ちゃん、こんなところで何してるの？」

「久し振りだな澄音」

「そうそう、気まぐれサーファーはお兄ちゃん……って、え  
っ  
！……」

くそっ！ ベタな乗りツツコミしてしまつぐらい驚いたじゃねえ  
か……！

っていうか波乗丈じゃなかったのな。昨日と今日で入れ替わった

のか？

どうりでジヨニーの放送が聴けたわけだ。

でも、波乗の兄貴って家出したんじゃないのかよ。

「結構すぐばれるものだな」

「わかるよ、兄妹だもん」

「だな」

おいおい、なんだか納得してるぞ。

これは僕にも納得しろと強要しているのか？

いずれにしろツツコんだら負けのような気がする。

だって波乗兄妹は普通に会話を続けているからな。

「いつ帰ってきたの？」

「最近な。だが、まだ家には帰れそうにもないな」

「そう、頑張ってるね」

「おう」

久し振りの兄弟再会なのになんだこのあっさりとした会話は。

「波乗、いいのかよそれで！」

「いいよ」

波乗はこちらを見て微笑む。

ずいぶんスッキリとしたいいい笑顔だな。ほつぺたをつねってやりたくなるぞ。

とはいえ、やっぱりお兄さんが戻ってきたほうがいいだろう。

「いや、でもな波乗」

「私が良いって言ってるんだから良いじゃない」

「!?!」

気がつかなかったが、いつの間にか波乗は僕の腕を掴んでいた。

「無事だっただけで私は納得できるんだから」

本当に波乗が納得できたかどうか。

それはだんだん力が込められていく僕の腕を握った波乗の手から伝わってきた。

「それに今は皆がいるんです」

「……了解。そうだよな一人じゃないし」

もういいや、どうでも。コイツがいいって言ってるんだから。

波乗の強がりの手助けを出来るぐらい、僕たちで何とかしてやればいいさ。

今なら味方もたくさんいるし。

それにしても久し振りに波乗の顔をこんなに近くで見た。

あれ？ 化粧はもう落としたんだな。僕は素顔の方が好きだからいいけど。

「多記君、どうしたの？」

「え？ いや、なんでもない」

とか言いながら、波乗の潤んだ大きな瞳に吸い込まれそうで、目を離すことはできない。

さらにぶつくりした唇もやわらかそうだ。

「でも、なんだか顔が近づいてきてるよ」

「え！？ そ、そうかな？」

波乗、これは何の罠なんだ。お前の顔にもっと近づきたくなってる。

いや、むしろチュウしてもいいかな？

「多記君！？ えっ、ちよっと待って、心の準備が……」

準備なんて後でもいいじゃん。

そんな邪な気持ちに反応してなのか、僕の背後から再び軽い発射音がした。

「いちや いちや 禁止〜っ！〜っ！」

「あだだだだだだだっ、背中痛っ！！ リン、僕だけ狙い撃ちするんじゃないえよー！！」

「お断リン」

「お前なあ……」

楽しそうに乱射しやがってー！！

それにしても琴和リン、いつの間に僕の背後をとったんだ？

などと考えていると部屋の入り口から大声が聞こえ、数秒後、琴和家私設警備兵と共に見覚えのある二人が突入してくる。

「うおおおおつ、多記、助けに来た……ぞ？」

「あれ〜？ 私らが一番乗りやと思っと思ったのに、なんやビリか」

「川上、工藤、お疲れさん」

「おおあつ！ 多記がいる！」

「多記、ひさしぶりやなあ」

確かに。二人の顔を見るのも久し振りだな。

なんだか大人っぽくなつて〜って、何年ぶりかに会った親戚のよ  
うな感想を持つてしまった。

「くそつ、多記死亡説は嘘だったのかよ」

川上、なぜそんなに悔しがっている。

っていうかなんでハガキ職人GP中間発表の時に着てた黒のタキシードにエアガン持つてんだよ。

「な？ 言つたやろ？ 死亡説がでた芸能人は絶対に死んでない法則発動やつて」

工藤、一体どんな法則だ。

まさか僕が話題作りのために釣りに行って行方不明になったりしたっていいのかよ。

それより、なんでお前も中間発表に来てたパーティードレス着てエアガン持つてるんだよ。

まさか、僕の救出がパーティーとでも言いたいのか？

「多記君」

「はい？」

この成り行きをじっと見守っていたペンシル祭が僕に声をかけた。

下がっていたメガネを中指で上げると冷たい口調で僕に告げる。

「とつとと帰って」

「え!？」

「これ以上、うちの施設を壊されても嫌なの」

周りを見渡すと辺りはガラスをぶち破つての侵入のため、ガラス片が当たりに散らばっていた。

さらには琴和リンの乱射を受けて倒れた後、立つに立てなくなつた人たちがいて、煙によって逃げ出した人たちは後から突入した川上、工藤組によってことごとく打ちのめされ、廊下がさしずめ野戦病院のようになっていた。

「本当に迷惑なの。帰って、つてか帰れ！」

「はい! ごめんなさい!」

こうして僕は施設の皆に頭を下げて帰った。

土下座外交ならぬ土下座脱出をしながら無事(?)波乗家に到着した。

波乗家の前には仁王立ちで待っていた井端環の姿があった。

僕らの姿を見つけると、すかさずコイツはノートパソコンへ何か打ち込み始めた。

「なるほどな、こんな馬鹿げたことを考えるのはお前しかないと思つてたよ」

すると環はディスプレイから顔を上げ、勝ち誇つたような表情を僕に向けた。

「なにが馬鹿げたことだ。感動してちびつただろ?」

「誰がだ? ああん?」

にらみ合う僕と環の間に波乗が割り込む。

「まあ、まあ、二人とも落ち着いて。とりあえず多記君、そこへ座つて」

「いや、ここ玄関前で、下は地面だし」

「じゃあ、心で座つて」

全然意味がわからん。

って思ってた横見たら、川上が空気イスしてるし。工藤はなんだか  
拝んでるし。

心で座るってそういう意味なのか!?

そんな二人を見てうんうんと満足そうにならずに波乗。それでい  
いのか!?

「多記君、環さんのお陰で私たち元の……ううん、違うね。新しい  
宝条リンになれたんだよ!」

波乗が褒めれば褒めるほど、環はエツヘンとか言いそうな勢いで  
胸を張った。

くそっ、ただでさえない胸を強調するな。

「どうせコイツがいらぬ入れ知恵をしたんだろっよ」

「おい、口を慎めよ。お前の個人情報なんかいつでもネット中には  
撒けるんだからな」

「お前の個人情報を知っている点では親戚である僕も変わらんだろ  
」果たしてそうかな?」

すると環は口の端だけ吊り上げるように笑うとなにやらパソコン  
を操作し始めた。

「自宅にあるPCの遠隔操作の用意は完了済みだ。つまり、お前の  
PCは私の手にあるのも同然だぞ。確かCドライブの資料ってフォ  
ルダの中に……」

「うわああっ! 止める、悪かった。ありがとう! さすが環様」  
慌てる僕の態度を見て興味を持ったのか波乗が環の腕を掴んで尋  
ねる。

「なになに? なにがあるの?」

「どうせエロ画像やエロ動画やる?」

「ああ」

なんでそんなに波乗と工藤は目を細くして僕を見ているのだろう  
か。



そして微かに二人から漂う上からの視線は何なんだ？

「勝手に内容を決めるなよ……」

「なんでそんなに弱気な反論なん？」

「えっ、いや、なんでもない」

「当分このネタ使えるわ」

くそっ、何であんなに簡単なフォルダに入れてしまったんだ！

次からはパスワードを……って無駄だ。環にかかれればすぐばれる。

僕らのやり取りを眺めていた環は顎に手を当て満足そうにした。

「さあ、宴は今日で終わりだ」

「なんだよ急に」

「明日から新学期だからな。私は帰る」

そうか、こいつは夏休みだからって直子さんの家に遊びに来ていただけだったな。

「ええっつ、タマちゃん帰っちゃうの？」

すると、どこから沸いたのか琴和リンが環へと飛びつく。

というより、リンの方がかなり身長が高いいので、襲い掛かっていくようにしか思えない。

しかし、そんな不意打ちにも環はスルリと体を移動させ回避した。行き場を失ったリンはそのまま地面へ倒れるように寝転ぶ。

「私にも帰る場所があるのだ。わかるだろ？」

仰向けになって地面に寝転んだまま少し考えるリン。

「うん、わかった。バイバイ」

本当に考えるの少しだけだな。

「琴和リン、お前のそういうあっさりとした所が私は好きだぞ」

「リンちゃんもねー、タマちゃんの捻じ曲がった性格が大好きだよ。どうやらリンは飛びつきを交わされて少しムツとしているらしい。

だが、環はそれが褒め言葉であるかのように微笑み、フツと鼻で笑った。

そうか、もう夏休みは終わりか。なんだか長い休みだったな。

ん、まてよ？

何か忘れている気がする。

夏休みの終わりといえば恒例の……

「やばい」

それを見て全てを見透かしたような余裕の笑みを浮かべ環は僕に言った。

「まさか宿題やり忘れたなんてベタな才チはないよな」

「馬鹿野郎！ 僕は一週間以上、監禁されていたんだぞ！」

「多記君、私を見る？」

「波乗、ありがとう！」

「却下だ、自力でやれ」

「環、お前が言うな！ お前のことだ本当はもつと前に僕の居場所を気づいてただろう」

環は僕の言葉に小さく舌を出すと、視線を逸らし遠くを見た。

「さあな。ただ、私の役目は面白くないことを面白くすることだ」

「単に騒ぎたいだけだろ」

「そうとも言つ」

「お前つて奴は……」

「とにかく今日は宿題やる？」

「じゃあ、宿題をやる人間も増えたことだし、今夜は宝条リン組で徹夜だな」

「なっ……」

隣を見ると参考書数冊抱えた工藤が立っていた。

さらにその隣にはコンタクトを付けているにもかかわらず、丸いメガネを上げ下げしている川上がいる。

「まさかお前たち、宿題やる人数を増やしたくて僕を助けに来たのか！！」

「多記、落ち着け。それだけじゃあない。宿題してたら皆飽きてき

て、それでだ」

「暇つぶしかっ！」

「いいやんか、助けてもらったんやし」

「じゃあね、リンちゃん皆が寝ないように見張ってあげる！」

再び軽い発射音が聞える。

「あだだだだだだっ！！　リン、むやみに撃つんじゃねえよ！！」

「お断リン」

「お前本当に楽しそうだな」

「うん！！」

ともあれ、僕はここへ戻ってきた。

宝条リンのメンバーも元通りだし、後はサーファースキングを獲得するだけだな。

背中にBB弾の痛みを感じながら僕はそんなことを考えていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4065e/>

---

サーファーキング！

2010年10月11日02時46分発行